IS<インフィニット・ストラトス> ～舞い降りた白き鴉～

灯火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜　～舞い降りた白き鴉～

【Ｎコード】

Ｎ５０３１Ｔ

【作者名】

灯火

【あらすじ】

ある日神の勝手な都合で殺された主人公は新たな世界で戦いへと身を投じる。大切なモノを失い、新たな友と出会った彼が、戦いの先に得る『答え』とは――――――

プロローグ（前書き）

長文になりましたがどうか最後までお付き合い下さいますようお願いします。

プロローグ

「・・・俺、どうしちまったんだ？」

まあ今は落ち着いて状況を把握しよう！
俺は、工学系の大学に通う２１歳のさえない機械オタクだ。ハ●の基礎理論を提唱して教授達からの評価も高い。まあこれに関してはどうでもいいか。まずはどうしてこうなったかを思い出そう。

とある休日、俺は買い物の為町にくり出していた。その理由は、今俺の目の前にあるプラモ「ホワイト・グリント　ＶＯＢ付き」税込み一万円以上するこいつを買う為である。

「ハ●の製作費の所為で貯まりづらかった金を貯めに貯めて、やっとの事で買えるようになったんだ。楽しませてもらうぜ！ふふふっ、はーはっは！」

いきなりの大声と狂気に満ちた笑い声を聞いた他の客と店員が白い目を向けてきたが今はこの喜びの所為でまったく気にならない。
ひとしきり笑った後、俺が目的の物を買い店を出て横断歩道を渡ろうとしたその時、

「危ない！」

という声が聞こえた。そちらを向こうとした次の瞬間には、俺の体は中を浮いていた。途中真っ赤なハーレが視界に映ったがおそらく

はあれが俺を轢いたのだろう、けしからんやつだ。・・・以上俺の０．３秒間の考察終了。次の瞬間俺は地面に叩きつけられ、プラモも重力にひかれ落下、地面に衝突し潰れてしまった。

（あーあ、あれじゃもう中身はぐちゃぐちゃだな。組み立てたかったなー。つっても俺もこりゃ死んだか。たくっ、くだらねー人生だったマジで。生まれ変わるならあの世界・・・が・・・・・い・・・い・・・な・・・。がくっ）

そして２０ＸＸ年●月▲日俺は死んだ。

これが俺が死んだ経緯だ。・・・あのハーレ今度見たらぶっ壊してやる。

「お、目が覚めたか。」

突然後ろから声を掛けられた。振り向くと血まみれのライダースーツを着たおっさんが立っていた。

「そんな警戒すんなよ。気楽に行こうぜ？」

まあ確かにそうだな。いったん落ち着こう。

「そうそう、落ち着いて落ち着いて。」

あれ？俺今声に出したっけ？

「？ああ、別に声に出さなくても分かるよ。だって俺神様だもん。」
ほほう、なら納得が・・・行く訳ねえだろ！
と、そこまで考えると視界に赤い物が映った。
あれは・・あの時俺を轢いたハーレじゃねえか！
「ああ、あれね。神様も暇な時があってさぁ、ちょっくら下界に降りぐヴぉふ！！」
神の語尾がおかしくなったのは俺が怒りと憎しみのつまった右ストレートをその左頬に叩き込んでやったからである。
「い、痛いじゃないか！いきなり何をするんだ君は！」
「何をするんだ君はだぁおい？それはこっちのセリフだこの野郎！じゃあ何か？俺はてめえの暇つぶしの為に殺されたって言うのか？どうなんだよああ！」
「い、いや最後まで話をぎゃあーーーーーーー！」
これより先の惨状は大変痛々しいため見せられませんのでご了承下さい。

数分後。俺に殴られまくった神はさすがと言うべきかなんと言うべきか、傷はあれども生きている。・・・チッ。
「じゃあ何か？お詫びに転生させてくれると？」

「あ、あああもちろんさ。（もう殴られたくないし）」

「そうか。じゃあ行き先は・・・。」

「別に言わなくても大丈夫だよ。君の行きたいところは分かってるよ。なんせ私は神だから！」

おお、神って便利だな。

「それじゃ早速頼む。」

「ＯＫ！それじゃ第二の人生楽しんできてー。行ってらっしゃーい。」

次の瞬間俺は眩しい光に包まれた。

「え、ＡＭＳの光が逆流するー！」

その言葉を最後に俺は転生した。

プロローグ（後書き）

ここまで読んで下さいました皆様有難うございました。初めてなのですがどうでしょうか？よろしければ感想やアドバイスをお願いします。

mission1　nextレイヴン（前書き）

さあさあ始まりました、第一話。駄文ですが最後まで読んで下さい。

mission1　nextレイヴン

「緊急事態発生！緊急事態発生！警戒レベルをイエローからレッドへ！繰り返す！警戒レベルを・・・・・！」

室内に緊急事態を知らせるアラームが鳴り響く。孤島(こじましろ)白はそこで出撃準備をしていた。

「ＶＯＢのドッキング完了っと。セレン、こっちは準備ＯＫだ。いつでも出れる。」

白の言葉に答えたのは若い女の声だった。

「そうか。それではもう一度ブリーフィングを確認するぞ。」

彼女、セレン・ヘイズは白のオペレーター兼上官兼幼馴染である。ちなみに歳は１５だ。

「目標は水上用(アームズフォート)ＡＦギガベースだ。ＶＯＢで接近、懐に入ったら攻撃開始だ。敵の長距離射撃には注意しろ、拠点型とはいえＡＦだ火力は侮れん。この他にも護衛のネクスト『ステイシス』及び『フラジール』が確認されている。これもしっかり叩いておけよ、以上で確認を終了する。・・・死ぬなよ。」

「ああ、必ず生きて帰って来るから信じて待っててくれ。」

白はセレンの言葉にしっかりと頷き、目の前を向く。

「さーてと、企業連の馬鹿どもに実力の差を教えてやるか。」

ＶＯＢに火が点いた。その光に照らされて纏っていた純白の装甲が赤く光る。

「レイヴン、『ホワイト・グリント』ミッションを開始する！」

そして白きネクスト『ホワイト・グリント』は大空へ飛び出して行った。

『目標までの距離残り１０ｋｍ！ＶＯＢ使用限界近いぞ、通常戦闘準備しておけ！』

セレンが言ったとおり目の前にＶＯＢの残り燃料は底を尽きかけていた。

『ＶＯＢ使用限界だ、パージする。』

ＶＯＢ特有の加速感が無くなった直後センサーに敵の攻撃を知らせるアラームが表示された。しかし俺はそれが知らされる前に動いていた。上空から飛来したミサイルとエネルギー弾を撃ち落とすか回避で防ぎきり、すぐさま敵へと反撃を開始する。

どうやら俺に攻撃してきたのは護衛のネクスト『ステイシス』と『フラジール』だった。

「無人機の出来損ないが俺を止められると思うなよ！」

こいつらが無人機なのはすでにセンサーから送られてきた情報で知

っている。相手が無人機なら手加減は必要ない。最悪の事態を考えなくてもいいからな。
敵の射撃をくぐりぬけながら両手のライフル『アンナ』連射する。
運良くその内の数発がＰＡ（プライアルアーマー）を貫通してステイシスのメインブースターに直撃した。

『メインブースターが完全に逝ってやがる、くっダメだ飛べん！狙ったかホワイト・グリント！』

・・・えーっと、何か声が聞こえた。無人機のはずなんだけどな。
仕様ってやつか、だがこの際キニシナイ。
まあとりあえずそれは置いといて、まずはこいつを片付けるのが先だ。さっきの一幕の間もこいつの攻撃は止まない。

「・・・いい加減消えろよお前・・・。」

それだけ言って俺はライフルを粒子化して格納、近接格闘用レーザーブレード『ムーンライト』を展開して一気にＣＢ（クイックブースト）で距離を詰めブレードを振るう。

（所詮は無人機、人間の発想にはついて行けまい。）

予想通りフラジールはその行動について行けず、ムーンライトはその右腕と右脚を切り落とす。
それだけのダメージで十分だった。フラジールは小さい爆発を起こし墜落して行った。

『ＡＭＳから光が逆流する！？ぎゃーーーーーーーー！』

おいおい、こいつも何なんだよ。二機そろってＡＣＦＡのまんまじ

ゃねーか。

「まあ、何はともあれあとはギガベースを落とすだけ。」

気付くとギガベースは撤退を開始していた。そりゃそうだ護衛のネクストが二機もやられたんだ、戦況からしてあちら側の負けは決定したも同然だ。だが、

「悪いけど逃がすわけにはいかなくてね、逃がしたあかつきにはあの九人に何を言われるか分かったもんじゃない。」

昔された仕打ちを思い出した恐怖で体が震える。

「まあとにかく落とさせてもらう！」

そう言ってライフルを展開し引き金を引こうとしたその時、

『強力な熱源を確認！避けろ！白！！』

セレンの珍しく焦った声で瞬時に状況を把握した俺は後方へＣＢで緊急回避をする。その直後、ギガベースを巨大なビームが貫いた。攻撃の後には散り散りになったギガベースの残骸だけが残っていた。あれをもろに食らっていたらと思うと生きた心地がしない。ビームの飛来した方向にはそれを放った張本人が浮かんでいた。紅き全身装甲、背部には一対の黒い大型ブースターを装着している。

「まさか・・あれは・・・ナインボール・セラフ！？」

セラフはそれに答えるかのようにこちらを一瞥すると雲の間に飛んで消えていった。

『白、あれは・・・。』

セレンもあれに気付いたらしい。あれが何なのかに。

「ああ、そうだよ。あれは父さんの残した孤島の遺産の一つ、世界の管理の為のＡＩ『ナインボール・セラフ』だ。」

その言葉は、さっきまで戦闘が繰り広げられていたとは思えないぐらい今は静かな空へと消えていった。

『やはりそうか。・・・白そろそろ帰還しろ。今回の件については いろいろと調べる必要がありそうだ、それにはお前の力が要る。』

俺はすこし考えた後、

「そうするよ。整備班に機材を用意しておくよう頼んでおいてくれ。」

とだけ答えた。

『そうか分かった。』

セレンはそれだけ言って通信を切った。俺は帰るためにＯＢ（オーバードブースト）を使用し、帰路についた。

これから始まる大きな戦いにまったく気付かずに。

mission1　nextレイヴン（後書き）

オリジナル設定だいぶ入りましたが、がんばってついて来てください！

原作介入はもう少し先です。

mission2　ルームトーク（前書き）

白の混乱ぶりに注目。

mission2　ルームトーク

暗い部屋の中スタンドライトの光が俺の顔を照らす。
俺、孤島白はネクスト『ホワイト・グリント』を駆るリンクスである。
そして俺が転生した世界は『インフィニット・ストラトス』の世界だ。
篠ノ野束という女性が発表した女性にしか扱えないパワードスーツ『ＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜』によって男と女の立場が反転し、女尊男卑社会が浸透した世界である。
・・・ちなみに俺は男だ。ＩＳは全ての現代兵器の性能を凌駕すると言う束の言葉どおりとてつもない性能を誇る
まあそんなことはどうでもいい、説明を続けよう。
ここはラインアーク本社にある俺専用の研究室だ。俺の格好はそれらしいって言ったらそれらしい白衣だ。研究員が着ているあれだ。
ラインアーク。それは俺がとある奴と立ち上げた会社だ。表向きにやっているのはＩＳの開発だが、その真の目的は、

「世界の統合か。」

そう、それこそがこのラインアークの目的であり、白の父親孤島鎧（こじまがい）の遺言でもある。まあ一部の人間しか知らないことだ。
孤島鎧はネクストの研究を妻の絵馬と共にしていた。ホワイト・グリントの研究にも携わっている。てゆうか実際問題この二人がネクストの基礎理論であるコジマ技術を作り出したのだ。はっきり言って俺の両親ただもんじゃねえな。
しかしその両親はもう居ない。死んだのだ。父は４年前、母は５年前に俺の目の前で死んだ。いや、正確には殺されたのだ。
そして俺の手元には両親の遺品であるこの『孤島のノート』と研究

成果が残った。
孤島のノートにはこの世界を根元からひっくり返しかねない技術が書かれている。そして何故か俺にしか開けないようになっている。
ラインアークでの俺の立場は表向きは研究部の統括責任者である。しかし俺の本当の仕事は、ラインアーク特殊戦闘部隊『ＯＲＣＡ旅団』の隊員『リンクス』だ。・・・でも下っ端要員なんだよな、はあ。
と、そこに、

「白、入っても良いですか？」

少女の入室許可を求める声が聞こえた。

「ん？ああ、別にいいぞ。」

その言葉を聞いて声の主は室内に入って来た。
声の主の正体はフィオナ・イェルネフェルトだった。若干１４歳にしてラインアークに入社し情報部で活躍している。容姿は一言で言うと美人である。体は均整がとれていて顔も整っている為か男性社員からの人気は高い。

「で、何の用だ？」

俺はとりあえず用件を聞くことにした。

「はい、それなんですが白相手に通信が来ています。」

（通信？てことは極秘の依頼か何かか？）

「分かった、繋いでくれ。」

俺はそう告げるとフィオナから通信機を受け取った。

「もしもし孤島白です。」

『おお、白か？久しぶりだな。』

声の主は懐かしそうにそう言った。まさかこの通信の相手って・・・、

「千冬さんか？」

その通りだったらしい、相手は『おう』と短く答えた。

織斑千冬。その名を知らない者はこの世に居ないだろう。ＩＳの国際大会『モンド・グロッソ』その第一回大会で全部門総合優勝者『ブリュンヒルデ』の称号を持つ強者である。

ついでに言うと俺は小学生の頃、織斑家の近くに住んでいた。両親は研究に忙しかった為よく世話になっていた。いわゆる腐れ縁だ。

その世界最強の人が俺に何の用だろうか？

「用件は？また何かの依頼か？」

その言葉に対して千冬は言いにくそうに返してきた。

『その（・・・）だな。一夏がＩＳを動かしてしまったんだ。しっかり遠ざけていたつもりだったんだがな・・・。』

「はあ！？なんだそりゃ！いったいどう言うことだよ！」

『受験の試験会場で間違えて動かしたんだとさ。まったく世話が焼

ける。それで今日連絡した理由だが・・・・』

千冬は少し間を空けて言い放った。

『お前もＩＳ学園に入学しろ。』

・・・はい？それはいったいどう言うことですか、千冬さん？

『一夏が今回の件でＩＳ学園に強制入学させられる事になってな。お前にはその世話役になって欲しい。』

「ちょ、ちょっと待てよ千冬さん！俺はネクスト乗りであってＩＳ乗りじゃない！だいたいあの学校って（・・・）女子高だろ！」

ＩＳを扱えるのは女性だけだ。つまりＩＳ操縦者を育成する機関であるＩＳ学園は女子高なのだ。俺はＩＳが使えない。理由は単純俺が男だからだ。ついでに言っておくとホワイト・グリントはＩＳではない。ＩＳと違いＡＭＳの処置を受け、適正さえあれば使える。ちなみに俺はちょっとした事情でその処置を受けている。まあ、それについてはまた後で話そう。

『なに、ホワイト・グリントだってＩＳみたいな物だろ？ごまかせるさ。それにその方があいつらも嗅ぎつけて来るかもしれない。お前にとっても悪い話じゃないと思うが？』

あいつら・・・か。確かにその方が俺には都合が良い。なら、

「分かった。でも俺の入学は世間には黙っててくれ。あいつらと戦うにはそれなりに準備が必要だからな。」

そう言うと千冬は納得したらしい。

『よし。では手続きはこちらで済ませておく。お前もしっかり準備しておけよ。』

「ああ。」

そうして通信は終わった。・・・しかしあいつがＩＳを動かすとはな。後でしっかりしばいておかなくては。しっかし、転生してから１５年経つが相変わらず苦労してるな俺。はぁおじさん困っちゃうよ・・・。

「フィオナ俺はしばらく留守にする。社長には俺から伝えておくから、後は頼む。」

フィオナはそれを聞くと小さく頷いてからすぐに部屋を出て行ってしまった。俺はもう一度ノートに目を通し閉じた。そしてホワイト・グリントの待機状態である一枚羽の形をしたドックタグを握り締めながら、

「さあて、これから忙しくなるぞ。」

と、誰に言うでもなく呟いた。

ｍｉｓｓｉｏｎ２　ルームトーク（後書き）

いよいよ登場原作キャラ！え？なんで主人公の機体がホワイト・グリントなのにオペレーターがフィオナじゃないんだって？ま、まあそこらへんはいいじゃないですか。なんたって新旧入り乱れてる作品なんですから。

感想、アドバイス等があったらお願いします。

ｍｉｓｓｉｏｎ３　忙しき朝（前書き）

あのキャラ達が登場します。

ｍｉｓｓｉｏｎ３　忙しき朝

朝、白は準備に追われていた。格好もいつもの白衣ではなく、白を基調としたＩＳ学園の男子用制服それであった。そう今日はＩＳ学園に入学する日なのだ。

「コジマ粒子のリミッターは・・・ＯＫ。ＰＡ（プライアルアーマー）の展開範囲も制限。コジマ兵器の全ロック完了。通常武装はマシンガン、背部リニアガンと背部チェインガン、腕部グレネード、肩部ミサイルはちゃんとセット登録してあるな、よし。ライフルもある・・・と。ホワイト・グリントの調整はこんなもんでいいか。」

本日付でＩＳ学園に入学する事になった白は社長命令でホワイト・グリントの機能制限を命じられていたのだ。

（いくらコジマ技術が世間に知れちゃいけないモノだからって、ここまでする必要はないだろ・・・）

考えてすぐにその思考を振り払う。コジマ技術がどれだけ危険なモノかは白自身が知っている、その身で危険を知った白自身が・・・。

その時、

ゴンゴン！！と乱暴なノックの音が聞こえた。

それを聞いたとたん、とある人物達が白の頭をよぎった、そう白がこの世でもっとも恐れる人物達が、

「おい白！居るんだろ、出て来い！！」

そう言いながら部屋に入ってきたのはＯＲＣＡ旅団のメンバーの中で最もガサツと言われているオールドキングとそれとは正反対にお

となしい性格のメルツェルだった。ＯＲＣＡ旅団は白を抜いた全員が女性だ。その理由はＯＲＣＡがＩＳ部隊だからである。出て来いって言っておいて自分から入ってくるのは、おそらく世界中探してもこのオールドキングだけだろう、と心の中で思う白であった。

「いったい何の用だよお前ら。俺は今忙しいんだ。」

その言葉を聞いた二人は一瞬目を合わせて言った。

「お前ＩＳ学園に行くんだってな。」

「それがどうしたって言うんだよ、お前らには関係ないだろ。」

すると今度口を開いたのは珍しくメルツェルだった。

「あなたが居なくなると私達が暇なのだ。なので・・・」

オールドキングがメルツェルの言葉を引き継ぐ。

「時間までちょっくら付き合え！」

白は心の中で泣いた。何でいつもこうなるんだと。

ｍｉｓｓｉｏｎ３　忙しき朝（後書き）

いやー出てきましたねリンクスｗｗｗ　もちろん他のリンクスも登場しますよ。今回、白の暗い部分が少し出てきましたね。いったい白にはどんな過去があるのか、これから少しずつ明かしていきます。さあいよいよ次回原作突入か！？白はどういう風に介入するのか！？白のこれからに乞うご期待！

ｍｉｓｓｉｏｎ４　世界で唯一ＩＳを使える男（前書き）

やっと原作突入です。

ｍｉｓｓｉｏｎ４　世界で唯一ＩＳを使える男

「連絡があった孤島さん以外は全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さっき自己紹介していた）。

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだぼっとしていて、ますます本人が小さく見える。かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ・・・・・・というより背伸び感がするんだが、そう思うのは俺だけなんだろうか。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・・・・・」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちょっとうろたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕はない。

なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

そもそも何でこんなことになっているかというと、時間は一ヶ月半

ほど遡る。
二月の真ん中、俺は中学三年。受験の真っ只中だった。私立藍越学園の受験の為に名前は知っているがどこにあるか知らないという典型的な公共事業の産物こと多目的ホールに来ていた俺はその中で恥ずかしいことに迷ってしまった。適当に施設を回っていた俺は偶然ＩＳ学園の試験会場に入ってしまい、そこでＩＳを起動させてしまったためＩＳ学園に強制入学させられたのだ。

（これは・・・想像以上にきつい・・・・）

俺はちらりと窓側の席に目をやったが、薄情なことに幼馴染の篠ノ之箒はふいっと窓の外に顔をそらした。これが六年ぶりに再会した幼馴染に対する態度だろうか。

「・・・くん。織斑一夏くんっ」

「は、はい！？」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かなくなる。
別に女子に対する苦手意識はない。ないけど、でも限度ってものがあるだろ。

「あっ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

どんだけ謝るんだ、この人。というかホントにこの人年上か？

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・・・っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

・・・あの、俺また注目されてるんですが。
しかしするといった以上、男子たるもの引くわけにはいかない。
しっかり立って、後ろを振り向く。

（うっ・・・・・・）

一斉に俺に集まった視線に耐え自己紹介をする。

「えー・・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

・・・ちょっと待て、なんだその『もっと色々喋ってよ』的な視線と『これで終わりじゃないよね？』的な空気は。
このままでは『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまう。呼吸を一度止め、再度息を吸い、思い切って口にした。

「以上です。」

がたたっ。思わずこける女子が数名いた。どんだけ期待してるんだよ。

「あ、あのー・・・・」

背後から涙声成分が二割増している声をかけられた。あれ？ダメで

した？と考えていると、パアンッ！いきなり頭を叩かれた。

「いっ！」

痛い、という無脊髄反射、あることが頭をよぎった。

ｍｉｓｓｉｏｎ４　世界で唯一ＩＳを使える男（後書き）

中途半端に終わってしまい、大変申し訳ありませんでした。原作見ながら書いているとどうも文章がまとまらないんです。そこらへん誰かアドバイスくださーーい。

ｍｉｓｓｉｏｎ５　介入する鴉　前編（前書き）

今回ちょっと長め。

ｍｉｓｓｉｏｎ５　介入する鴉　前編

パアンッ！俺の頭が何かで叩かれた。

「いっ！？」

痛い、と言う無脊髄反射より、あることが頭をよぎった。
この叩き方、威力といい、角度といい、速度といい、とある人物、
よく知っているとある人物が同じような感じなんですが・・・・・
と、考えながらおそるおそる振り向く。

「げえっ、ウェスカー！？」

パアンッ！また叩かれた。ちなみにすっげえ痛い。

「誰がウロボロスウィルスを体内に入れ、正面から撃った弾丸すら
避ける身体能力を得た超人だ、馬鹿者」

鍛えられているがけっして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。
狼を思わせる鋭い吊り目。やはりそうだ、この人は俺の実姉織斑千
冬だ。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

おお、俺は聞いたこともない優しい声だ。ウェスカーは何処へ？ク
リスに倒されたか？

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・・」

さっきの涙声はどこへやら、副担任の山田真耶先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で応えている。あ、はにかんだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳まで鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」

なんという暴力宣言。だがしかし、教室には困惑のざわめきでわなく、黄色い声援が響いた。

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

これがポーズではなく、本当にうっとうしがってるのが千冬姉だ。

「で？挨拶もろくにできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パアンッ！本日三度目。知ってる、千冬姉。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ。

「織斑先生と呼べ」

「・・・・はい、織斑先生」

と、このやりとりがまずかった。つまり、姉弟なのが教室中にバレた。一気に喧噪が広がる。
一応言っておこう。俺は世界で唯一『ＩＳ』を使える男としてここ、公立ＩＳ学園にいる。
ここは、ＩＳの得られた技術の開示、ＩＳ操縦者の育成・保護を目的とした機関を日本が全ての責任を負って管理・運営をしろというＩＳ運用協定に沿って作られた学園なわけだ。
そんなことを考えていると、チャイムが鳴った。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

おお、なんという鬼教官。目の前の姉は人の皮をかぶった悪魔だろうか。いや悪魔の方がまだ融通が利く。あいつら人間じゃないから。目の前の人間、人間性能の限界を知っているからタチが悪い。
なにせこの織斑千冬、今は現役を引退したが昔は無敗のＩＳ操縦者元日本代表なのだ。ところがある日突然、引退して姿を消す・・・・・っていうか、学園の教師やってたのかよ・・・家族の俺くらい言えよ・・・心配した俺が馬鹿だった。

「席に着け、馬鹿者」

はいはい俺は馬鹿ですよ。

場所は変わってラインアーク本社屋上のヘリポート、そこに一機の

輸送ヘリが発進準備をしていた。

「おい、白！こっちはＯＫだ早くしろ！」

ヘリのパイロットが声を上げる。白はそれに、

「ああ分かった！すぐに出してくれ！」

と答える。白はさっきまでＯＲＣＡ旅団の面子に捕まっていたのだ。

（畜生あいつら・・・これじゃ遅刻確定だろ。しゃれになんねえぞ）

と心の毒づいてももう遅い。

「よし、じゃあ行くぞ！」

そしてヘリは飛び立っていった。

ｍｉｓｓｉｏｎ５　介入する鴉　前編（後書き）

毎度毎度中途半端に終わってしまいマジですみません。
次回いよいよ白がＩＳ学園に現れる予定ですので応援お願いします。

ｍｉｓｓｉｏｎ６　介入する鴉　後編（前書き）

この間自分の小説を確認したんですが、だいぶ短いことを知りました。
なので今回は長めにしました。
それでは、始まり始まり～。

ｍｉｓｓｉｏｎ６　介入する鴉　後編

二時間目の休み時間、俺は机に突っ伏していた。

（ダメだ全然授業について行けないは、参考書を捨てたって言ったら千冬姉には叩かれるはで散々だ）

さっき一時間目の休み時間に箒に声を掛けられたがそれの所為で余計に目立ってしまった。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

またしても針のむしろを味わうかと思っていた俺は、いきなり声を掛けられて素っ頓狂な声を出した。話しかけてきた相手は、地毛のロールがかった鮮やかな金髪がいかにも高貴なオーラを出している女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺を見ている。

その女子の雰囲気は『いかにも』今の女子という感じだった。

今の女性はＩＳの所為でかなり優遇されている。それどころか、女＝偉いの構図になっている。今時街中で会ったこともない女にパシられる男なんて珍しくない。

そういう、いかにも現代の女子が目の前にいた。腰に当てた手が様になっているあたり、いいところの身分なのかもしれない。

「聞いてます？お返事は？」

「あ、ああ。聞いてるけど・・・どういう用件だ？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「・・・・・・・・・」

正直この手合いは苦手だ。
ＩＳが国家の軍事力になって、その操縦者が女性しかいない。だから女性は偉いといって、その力を振りかざすのは違うだろ。そんなのはただの暴力だ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

なんか自己紹介で言ってた気がするが、覚えてない。千冬姉が担任だったことが百倍ショッキングだった。
しかしどうもその答えは、目の前の女子にはかなり気に入らなかったらしい。

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

ああ、セシリアっていうのか。ふーん。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。

「あ、あ、あ・・・」

「『あ』？」

「あなた本気でおっしゃてますの！？」

「おう。知らん」

知らないことは素直に言おう。見栄は身を滅ぼす。

「・・・・・・・・」

セシリアは怒りが一周して逆に冷静になったのか、何かぶつぶつ言い出した。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら・・・・・」

失礼な、テレビくらいあるぞ。見ないけど。

「で、代表候補生って？」

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。・・・あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そういわれればそうだ」

簡単なことほど見落としやすいって本当なんだな。

「そう！エリートなのですわ！」

おお、復活した。さすがは代表候補生。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・馬鹿にしていますの？」

お前が幸運だって言ったんじゃないか。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でＩＳを使えると聞いて、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

おお、この態度が優しさなのか。十五年生きててはじめて知ったぜ。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ・・・泣いて頼まれた教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、をものすごく強調された。――――って、ん？

「入試ってあれか？ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は・・・・・？」

確かそうだ。倒したっていうか、勝手に壁に突っ込んでそのまま動かなくなったわけだが。

しかし俺が言ったことは相当ショックだったらしい。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。あ、何か今氷にヒビが走ったような嫌な音がした。

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・・・？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「これが落ち着いていられ――――」

キーンコーンカーンコーン。
三時間目のチャイムが鳴った。
「っ・・・・！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」
よくない、て言ったら怒るだろうから頷いておく。
「それでは授業を開始する、とその前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めるぞ。クラス代表者はクラス長のようなものだ。対抗戦は今の時点での各クラスの実力推移を測るものだ。競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はない。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への参加することになる。自薦他薦は問わない、誰かいないか？」
「はいっ。織斑くんを推薦します！」
———ん？織斑ってこのクラスにもうひとりいるのか？それは奇遇だ。
「私もそれが良いと思いますー」
俺も俺以外がなるならだれでもいいぜ。
「では候補者は織村一夏・・・他にはいないか？」
織村一夏ってこのクラスにもうひとり———ってそんなわけあるか！
「俺！？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。「いや俺はそんなの」他薦者に拒否権はない。選ばれたからには覚悟しろ。さあ、他にはいないか？」

「いやでも――――」

まだ反論をしようとした俺を、甲高い声が遮った。

「待ってください！納得がいきませんは！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、あのセシリアなんとかさんだ。

「そのような選出は認められませんわ！わたくしに一年間も屈辱を味わえとおっしゃるのですか！？」

そうだそうだ、もっとい・・・ん？

「実力から行けばわたくしが代表になるのは必然。それをただ珍しいというだけの極東の猿にされては困ります！だいたいこのような遅れた国で暮らすのもわたくしにとｘとては耐えがたい苦痛で――――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？もういいですわ、もっと穏便に済まそうと思っていましたけれどもう我慢できません！決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い――いえ、奴隷に――」

と、その時――――

「うおーーーーーっ！」

外から声が聞こえたのと同時に純白の『何か』が窓ガラスを割って飛び込んできた。

突然の乱入者の、その身を包んでいた純白の鎧が光の粒子となって消える。ＩＳ学園の制服らしき物を着ているように見えたがそれも一瞬のこと、乱入者は扉を突き破り廊下へと消えていった。ドスン！と音がした、おそらく壁にぶつかったのだろう。

「いってえーーー・・・」

そう言いながら廊下から戻ってきたのは、限りなく白に近い髪をしている、そして何より目をひくのはその格好である。

ＩＳ学園の男子用制服、だったのだから。

しかし、その顔に俺は見覚えがあった。そうだあの顔は――――

「し、白！？」

「おう、久しぶりだな一夏」

そう、その乱入者は俺の幼馴染、孤島白だった。

ｍｉｓｓｉｏｎ６　介入する鴉　後編（後書き）

・・・一応白でました。少ないかもしれないけど一応でました！
で、今回どうでしたが？何か感想かアドバイスがあったらお願いします。

ｍｉｓｓｉｏｎ７　再会（前書き）

白が本格的に介入します。

ｍｉｓｓｉｏｎ７　再会

「白、ＩＳ学園の敷地に入ったぞ！」

ヘリパイロットが告げてくれるが俺はそれどころではない。
時間からして、おそらくもう三時間目がはじまっているだろう。これ以上は遅れるわけにはいかない。

「機体を校舎に近づけてくれ、飛び移る」

「な！？そんなことしたら危険だぞ！」

「なめんなよ。伊達や酔狂でリンクスやってる訳じゃない」

「たく、どうなっても知らないぞ」

ヘリが校舎の一年一組の教室の窓へと近づいていく。

「じゃ、荷物は運んどいてくれよ」

「お前こそ、後で土産話聞かせろよ。主に女子関連のな」

「ああ。社長によろしくな」

そう言って俺は空中へ身を躍らせる。ただ窓に突っ込んだんじゃ怪我するからな、ちゃんとグリントも展開する。
クイックブーストで速度を上げ強化ガラスへと突進する。

「うおーーーーー！」

パリィィィン！でかい音と共に窓ガラスが割れ俺の体は室内へと飛び込んだ。グリントも解除する。

（フッ、決まった・・・ってうおっと！？）

ガラスはスピードだけは落としてくれなかったらしい、俺はそのまま扉を突き破って廊下へと転がり出て壁にぶつかり止る。

・・・はぁ、俺ついてねぇ。

まあとりあえず、教室へ戻ろう。挨拶もせんといかんし。

教室へと戻った俺は、一人の男子に声を掛けられた。

「し、白！？」

「おう、久しぶりだな一夏」

声を掛けてきたのは今回の依頼対象、一夏だった。

「お前なんでここに！？てか、今まで何処に居たんだ！？」

驚くのも当たり前か。四年前に父さんが死んでからすぐ姿くらませたからな。

「質問ばっかりすんなよ、俺だって忙しかっグハッ！？」

俺の言葉は千冬さんの拳骨で中断させられた。ちなみにすげえ痛い。

「窓を割るは、床は傷つけるは、学校を壊しおって。さっさと挨拶しろ「いや、俺にも事情が」問答無用だ馬鹿者」

・・・何で俺ってこんなに苦労するんだろうな。
まあ、挨拶ぐらいちゃんとしとくか。

「ラインアーク所属の孤島白です。一年間よろしくお願いします」

いきなりの出来事でフリーズしていた女子一同が我に返って騒ぎ始める。

「男子がもう一人！？一体どう言うこと！？」

「ラインアークってあの大企業のことでしょう！？」

そんな女子達の会話を千冬さんが手を叩いて静かにさせる。さすがはＩＳ操縦者、鬼の怖さをよく知っている。

「よし、それでは織斑、オルコット話はまとまったな。勝負は一週間後に行う。両者はそれまでに準備しておくように。以上でこの話は終わりだ、授業を始めるぞ。孤島の席は織斑の隣だ」

とりあえず席に着こう。そして授業を受けよう・・・てかさっきの話、決闘ってなんだ？

「なあ、一夏。決闘ってなんだ？」

「ああ、あれか。いや実はさ、ちょっとした事情で代表候補生と勝負することになっちゃったんだ。ほらあのセシリアって子」

一夏の視線を追うと金髪の女子がいた。若干イライラしてるように見えるんだが、俺の見間違いか？まあ、コイツの事だくだらない挑

発にでものったんだろう、馬鹿なやつだ。

「それで物は頼みなんだが、ＩＳについて教えてくれないか？このままじゃ何もできずに負けそうだ」

「別にいいぞ。俺もちょうどいろいろと話を聞きたかったしな」

他にもやんなきゃいけないことあるし、ここで借りを作っておくのも悪くない。

「――――で、あるからしてこれは――――――」

っと、今は織斑先生の授業中だったな。ＩＳにはだいぶ興味がある、しっかり聞かなくては。

そうして俺の高校生活は始まった。

夜、俺は教員寮のとある一室の前に居た。その理由は単純明快、俺の入学が極秘だったため、すぐに部屋が用意できなかったのだ。とりあえず部屋に入ろう。これからどうするかは、それから決めよう。

ガチャ。広い部屋にはダンボールがいくつか置いてあった。

「よし。とりあえずは荷解きから始めよう。えーとこれは――――――」

パカッパタッ。ダンボールを開けてすぐ閉める。何故かって？それ

はこの中にとある奴らが入っていたからさ。

「・・・俺、こいつらを入れた覚えないぞ」

その中に入っていたのは、黄色くて薄いボディ、亀か蜘蛛に見えるフォルムをした、俺お手製小型ガードメカ『フレア』×３だった。

「なんでお前らが入ってんだよ・・・。って、ん？これはなんだ？」

荷物の中に紙切れが入っていた。開いてみるとどうやら手紙らしい。

『白、ＩＳ学園での生活では以下の決まりを守るように。
コジマ兵器の使用禁止、ホワイト・グリントはあくまでＩＳとすること、会社の評判を下げるようなことはしないこと。ＰＳ　フレア達には小型カメラが内蔵されていて何かするとすぐに分かるのでありしからず。　セレ・クロワールより』

セレって社長が仕込んでたのか、こいつら。
・・・ていうかＩＳ学園って外部からの干渉ができないんじゃなかったっけ？

「ま、決まりさえ守れば何もないんだから気楽にやるか」

そうだ気楽にやろう。じゃなきゃやってらんなくなるし。
俺は止めていた手を再度動かして、荷解きを再開した。

ｍｉｓｓｉｏｎ７　再会（後書き）

今回登場したフレアとセレですが、こちらはアーマード・コアに登場したものです。
まだ決まっていませんが、これから後書きを作者とオリ主の会話にしようと思っているんですがどうでしょう。何か意見や良いアイデアがあったら教えてください。

ｍｉｓｓｉｏｎ８　決闘　前編（前書き）

今回は後書きにてアンケートを取りたいと思いますので後書きをチェックしてみてください。

ｍｉｓｓｉｏｎ８　決闘　前編

翌朝、教室に入ると一夏が机に突っ伏していた。

「どうした一夏、昨夜何かあったか？」

一夏は俺の声を聞いてのろのろと顔を上げた。うわ遅、ほんとに大丈夫かコイツ。

「いや実はさ、俺箒と同じ部屋になったんだよ。そんで昨夜いろいろとあってさ、もうほんとに死ぬかと思った」

ほう、そうだったのか。よかったな箒。

「でもまあ箒でよかったよ。これが知らない女子だったら夜も眠れなかっただろうし」

こいつ、どんだけ唐変木なんだよ。少しは女子の気持ちに気付いてやれよな、まったく。

とその時、教室の扉が開いた。おお、噂をすれば箒じゃないか。

「おっす箒。一夏と同じ部屋だってなおめでとう」

そんな俺の言葉を箒は普通にスルーして自分の席に行ってしまった。俺なんかした？いやおそらく一夏が原因だろう。だって何もした覚えないもん。

「何がおめでとうだよ。別に俺と一緒の部屋だからって良い事ないだろ。それに箒、昨夜からあの調子で機嫌が悪いんだ」

やっぱな、俺じゃなかった。ていうか何をしたんだこいつ？それよりマジであいつの気持ちに気付いてやれよ。

「席に着けお前ら。ＳＨＲを始めるぞ」

おっと鬼教官のご登場だ、席に着かねば。

「ところで織斑」

「は、はい」

「お前のＩＳだが準備に時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから少し待て。学園側で専用機を用意する」

ほう、それは驚いた。まさか一年のこの時期に専用機を与えられるとはな。

「普通なら専用機は国家あるいは企業に所属する者が与えられないんだが、お前は状況が状況なのでデータ収集を目的として用意することになった。理解できたか？」

「な、なんとなく・・・」

・・・こいつ絶対分かってないな。

「なあ白、一つ聞いてもいいか？」

「何だ？」

「専用機って何？」

「その言葉どおりその人間専用の機体だ。まあ、お前の場合実験体みたいなもんだ」

「実験体かよ」

「何言ってんだ。ＩＳは全部で４６７機しかないんだ、専用機を貰えるって事は光栄に思えよ」

一夏はそれで納得したらしい。それ以上は聞いてこなかった。

（光栄ねえ・・・でもモルモットてのは何かなあ）

状況が状況なのは分かるが、仕方なく感があるのは微妙だ。

「それを聞いて安心しましたは。これでお互いフェアに戦えますわね。まあでも、結果は見えていますけどね。何故ならわたくしセシリア・オルコットも専用機を持っているのだから」

気付くと目の前にセシリアがいた。いつの間に動いたんだ？

パアンッ！セシリアの金髪が柔らかそうに揺れた。そうだ、今はＳＨＲ中。しかも鬼教官の。

「席に着け馬鹿者。邪魔だ」

「す、すみません」

おずおずと自分の席に戻るセシリア。頭を押さえてるところを見ると相当痛かったらしい。一瞬目が合ったが睨まれた。俺なんかしたか？

「さて授業を始めるぞ」

今日も辛いであろう一日が始まった。

時間は昼休み、場所は一年生食堂。
そこで白達は食事を囲んで雑談をしていた。

「――――つまりだな、ＩＳは宇宙活動を目的として作られた為に相互位置関係を把握する為のコア・ネットワークって機能があってだな――――――」

雑談と言っても主に白が一夏にＩＳについて教えているのだ。

「・・・・・・・・・」

すらすらとＩＳについて話す白と比べて一夏はまったくついていけずにいた。

「それと・・・て、おい一夏聞いてんのか？」

「いや、聞いてるんだが・・・全然分からん」

一夏の言葉に白は頭を抱える。

「・・・まあいい。こればっかしは慣れるより慣れろだ。ＩＳが届き次第、実戦訓練を開始するから、そのつもりでいろよ」

「ああ、色々と悪いな」

「別に構わないさ。・・・それにここで借りを作っておけば後々役に立つしな・・・」

最後の腹黒い発言は一夏には聞こえなかったらしい、首を傾げている。

「さてと、冷めないうちに食うとするか。折角の美味い飯が不味くなっちまう」

「あ、ああそうだな」

そうして二人は食事を再開した。

翌週、月曜。セシリアとの対決の日。

「――――なあ、白、箒」

「何だ一夏？」

俺の問いかけに応えたのは箒だった。何とかこの数日で関係は修復できた。六年間の溝は案外浅かったらしい、喜ばしいことだ。だが、今はそんなことを気にしている場合では。何故なら、

「俺のＩＳって何時届くんだ？」

そう、俺のＩＳは今もまだ来ていない。その所為で実戦訓練はまったく出来なかった。

「さあな。何か話によると色々とごたついてて、届けられなかったらしいぞ」

今度応えたのは白。まあ、白のおかげでＩＳの基礎知識ぐらいは頭に叩き込めた、それに関しては感謝感謝。

・・・・・しばしの沈黙。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

三回も呼ばなくていいです。慌ててピットに入ってきたのは副担任こと山田先生だ。

しかし、今日はいつもより輪をかけて慌てふためいている。

「山田先生、そんなに慌ててどうしたんですか？」

「あ、ＩＳが、織斑くんのＩＳが届きました！」

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使える時間は限られている」

不意に声が聞こえた。あ、何だ千冬姉か。
その時、ごごんっ。とピット搬入口が開く。

――――――そこに、『白』が、いた。

いや孤島じゃなくて色の白ね。とにかく真っ白、飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったＩＳが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが・・・」

「はい！織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」

その無機質の純白は、俺を待っているように見えた。こうなることを、この時をずっと前から待っていたように。

「すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦で済ませろ」

急かされて俺は純白のＩＳに触れてみる。だが試験の時の、初めてＩＳに触れたときのあの電撃のような感覚はない。ただ、馴染む。理解できる。これが何なのか。何の為にあるのかが分かる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

千冬姉の言葉通り、装甲を開いている白式に体を任せる。受け止めるような感覚の後装甲が閉じる。
そして、生まれたときから我が身だったかのようなあの一体感。融和するように、適合するように、最初から俺の為だけにあつらえた

かのように、白式が『繋がる』。
解像度を一気に上げたかのようなクリアーな感覚が視界を中心に全身へと伝わる。各種センサーが伝えてくる数値も当たり前のように理解できる。

「ハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもと同じように見える千冬姉の、その声の微妙な震えも感知できる。———ああ、心配してくれているんだな。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

ほっとしたような声。けれどそれはハイパーセンサーが無ければ分からなかっただろう。

「おい、一夏」

後ろから声を掛けてきたのは白だ。振り返らなくても分かる。

「何だ？」

「あんだけ教えてやったんだ、負けたら承知しねえぞ」

「あ、ああ」

何としてでも勝たなければ俺の命が危ない。
ちなみに箒はというと、何か言いたそうな、けれど言葉を迷ってい

るような、そういう表情をしていた。これも、普段なら分からないレベルなんだろう。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ・・・ああ。勝ってこい」

その言葉に首肯で応えて、俺はアリーナへと飛び出していった。

ｍｉｓｓｉｏｎ８　決闘　前編（後書き）

前書きで書いたアンケートです。
前回の後書きに書いたとおり後書きを、作者と白とゲストによる会話にしようと言うものです。
それについて、そうした方がいいと思う人は『賛成』、やめた方がいいと思う人は『反対』と感想に書き込んでください。
できれば理由等も添えていただければ光栄です。〆切は特に決まっていませんが、できれば二巻の内容に入る前に始めたいと思っています。

ｍｉｓｓｉｏｎ９　決闘　後編（前書き）

まだまだアンケートは続行中です。みなさんのご意見をお聞かせ下さい。
今回も後書きでアンケートを取りますのでよろしくお願いします。

ｍｉｓｓｉｏｎ９　決闘　後編

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。また腰に当てたポーズが様になってる。

けれど俺の関心はそんなところにはない。

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じさせる。

それを駆るセシリアの手には二メートルを超す長大な銃器＜スターライトｍｋ？＞が握られている。

アリーナ・ステージの直径は二〇〇メートル。発射から目標到達までの予測時間〇．四秒。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、何時撃ってきてもおかしくない。

「最後のチャンスをあげますは」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今此処で謝れば許してあげてもよろしくてよ」

そう言って目を笑みに細める。――――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティの解除を確認。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？残念ですわ。それなら――――」

――――警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

キュインッ！耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、俺の体を撃ちぬく。

「うおっ！？」

――――バリアー貫通、ダメージ４６。シールドエネルギー残量、５２１。実体ダメージ、レベル低。

（くそっ、俺が白式の反応に追いつけていない！）

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

射撃、射撃射撃射撃。弾雨が降り注ぐ。しかも、それら全てが的確にこちらを狙ってくる為、凌ぐのすら難しい。
その間にもシールドエネルギーは削られていく。

「装備、装備は！？・・・て、一個しか無いんだが・・・」

開いた装備一覧には『近接ブレード』と書かれた装備しか表示されない。はて、気のせいだろうか。はて。

「くそ、素手でやるよりはましか！」

俺は右手にそのブレードを展開する。
片刃のブレード、刃渡り一・六メートルはある長大な『刀』が俺の武器。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・笑止ですわ！」

再び降り注ぐ弾雨。またしてもそれは、俺を的確に狙ってきている。

「このブルー・ティアーズを前に、初見でこうまで持った事は、褒めてさしあげますは」

「そりゃどうも」

「でも、そろそろフィナーレと参りましょう！」

突如セシリアの背にあったフィンアーマーが分離した。しかも一つ一つに銃口が開いている。どうやらその兵器はビットのようだ。
俺の上下に多角的な直線機動で回ったそれらの先端が発光、レーザーを放ってくる。それらを防御、回避すると、その隙をセシリアのライフルが突いてくる。はっきり言って厄介だ。

「く、一か八か！」

セシリアの射撃を何とか潜り抜け、一気に接近、刀を振るう。だが、その一撃はギリギリのところで回避される。

「な・・・！？無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きですわ！」

セシリアは距離を取り、待機していたビットを俺に向かって飛ばしてくる。
――――よし、分かったぞ。
穿たれるレーザーを潜り抜け、一閃。重い金属を切り裂く感覚が手に伝わる。真っ二つになったビットが一秒後、爆散する。――――
一機撃墜。

「なんですって！？」

驚愕するセシリアに向けて、上段打突の構えで斬り込むが、またしてもギリギリでかわされる。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！しかもその時、お前は他の行動ができない。制御に意識を集中させているからだそうだろ？」

機動を先読み、次のビットの後部スラスターを破壊して落とす。

「――――っ！？」

ひくくっとセシリアの目尻が引きつった。図星だな。ビットは残り二機。機動も読めた。あれは必ず俺の最も反応の遅い角度を狙ってくる。
ＩＳの全方位視界接続は完璧だが、使っているのは人。真後ろや真下、真上は直感的に『見る』事が出来ない。だからこそそこに生じる、コンマ数秒の遅れをセシリアは突いてきていたのだ。
だから、逆に言えば、『機動を誘導出来る』。そこを狙えば、確実に落とせる。
――――あとは集中するだけ。

俺は勝てるかもしれないという興奮に、気持ちが高ぶった。

「はぁぁ・・・・。すごいですねぇ、織斑君。ＩＳの起動が二回目とは思えません」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田先生がため息混じりにつぶやく。

確かに、なかなかの健闘ぶりだ。だが――――

「あの馬鹿者浮かれているな」

「え？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。ああしている時は、大抵簡単なミスをする」

そうだ。一夏は昔から浮かれている時はあの癖が出る。そしてその時はいつもボロが出ていた。

おそらく、今回もそうなるだろう。

「さすがはご兄弟。よく分かっていらっしゃるんですね」

「ま、まあな。あれでも一応、私の弟だからな」

「あ、ひょっとして照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

あ。山田先生、それは禁句ですよ。言ったら最後、鬼の仕打ちが待ってますよ。

そう言いたいんだが、いかんせん口が動かない。理由は単純、千冬さんのプレッシャーのせいだ。

「・・・・・・・」

ぎりりりっ。鬼のヘッドロックが炸裂した。すっげえ痛そう。

「いたたたたたっ！！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「は、はいっ！分かりました、分かりましたから！離し――――――あぅぅぅっ！」

・・・・山田先生、ご臨終です。あなたのことは一生忘れません。なむなむ。

ふと横を見ると、箒が心配そうにモニターを見つめていた。

「おい、箒。心配しなくても、あいつならできるさ」

「だがっ・・・・そう・・だな。一夏ならきっと」

箒が唇を噛み締めながらモニターに目を戻した時、試合が大きく動いた。

――――――獲った！

セシリアの間合いに入った俺は、振り下ろした刀でビットを撃墜、

もう一機を回し蹴りで破壊する。
確実に決まる！そう思ったときだった――――――

「――――かかりましたわね」

セシリアが笑みを浮かべる。とたん本能的に回避をしたが間に合わない。

「ブルー・ティアーズは六機でしてよ！」

セシリアの腰部のスカート状アーマーの先端が外れて動いた。
今までのレーザーではなく『弾道型（ミサイル）』だ。

ドガァァァァンッ！

爆発が、俺を包み込んだ。

「一夏っ！」

箒が思わず声を上げる。
さっきまで騒いでいた教師二人と白も真剣な面持ちで画面を見る。

「――――ふん。機体に救われたな、馬鹿者め」

黒煙が晴れたとき、千冬が鼻を鳴らした。そこには安堵の色がある。
吹き飛んだ煙の、その中心に純白の機体があった。
そう、真の姿で――――――。

――――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。
何が起きたか分からないまま俺は確認ボタンを押す。
途端、白式が光の粒子となって消え、また形を成す。
再び現れたその姿は、まだうすぼんやり光っているが、さっきまでの実体ダメージが嘘のように消え、より洗練された形へと変わっていた。

「あ、あなた。まさか今まで初期設定で戦っていたというの！？」

どうやらさっきのはそういうことらしい。
やっとこの機体は、俺専用になったんだ。
改めてその姿を確認すると、どこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。
武器も今までと違う。
『雪片弐型』という名に変わったそれは、太刀に近い形をしていた。
――――雪片。それは、かつて千冬姉が振るっていた刀と同じだった。
・・・・ああ、つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

ずっと前から、あの人はいつでも俺の姉だ。

「でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。これからは、俺も俺の家族を守る」

「・・・は？あなた何を言って――――――」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ。弟が不出来じゃ格好がつかないからな」

あの格好いい千冬姉が格好がつかないなんて冗談じゃない。

「ていうか、逆に笑われるだろ」

「だからさっきから何の話を・・・・ああもう、面倒ですわ！」

またミサイルが飛んで来る。しかも射撃型ビットより速い。だが――

（見える・・・！）

右手を握り締めると、それに応えるように《雪片》が低い機械音を鳴らす。使い方なら分かる。千冬姉に隠れて何度も見た試合の動画。そこでどうやって千冬姉が使っていたか、覚えてる。

――――――ギンッ！

横一閃。両断されたビットが背後で爆ぜる。

爆発の衝撃が伝わるより速く、俺はセシリアの懐へと突撃する。

「おおおおっ！」

手の中でエネルギーが密度を増し、次の瞬間雪片の刀身が強い光を発する。

（いける！）

そう確信して、雪片を逆袈裟払いを放つ。
―――しかし、その斬撃が当たる直前に試合終了を知らせるアラームが鳴り響く。

『試合終了。勝者セシリア・オルコット』

「・・・・え？」

たぶん、今俺は全力で『なんで？』って顔をしているだろう。向かい合ったセシリアでさえぽかんと口を開けて同じ顔をしている。
そしてそれは、第三アリーナに詰め掛けていたギャラリーも、ピットで試合を見ていた山田先生と箒もだった。
ただ二人、千冬姉と白だけは『やれやれ』という顔をしている。
何が起きたか分からないまま、試合は終了した。――――――結果、俺は負けた。

「良くもまあ持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か・・・大馬鹿者」

どうやら俺は馬鹿者から大馬鹿者に昇進したらしい。嬉しくない出世だ。

「武器の特性を考えず使うからああなるのだ。身をもって分かっただろう。明日からは訓練に励めよ。暇があればＩＳを起動しろ。いいな」

「・・・・はい」

頷くしかない。頷くしかないってこの状況。あんな大見得切って負けりゃあさ。

「ＩＳは今待機状態になっていますが、織斑君が呼び出せば何時でも起動できます。それについても規則があるのでちゃんと読んでおいて下さいね」

山田先生が笑顔で分厚い本を渡してくる。あなたの街の電話帳三冊分くらいのやつ。

「何にしても、今日はこれで終わりだ。帰って休め」

敬うことを知らない言葉だ。優しさってもんを知って欲しいぜ。ていうかこの人、ほんとに俺が守る必要あるのか？

「帰るぞ、二人とも」

はい出ました、優しさ欠乏症人物ナンバー2。名前は箒って言って、俺の幼馴染なんだけどね。

まあそれは置いといて、俺と白は箒と共に帰路についた。

サアアアア・・・・・。

少し熱めのお湯でシャワーを浴びながら、セシリア・オルコットは物思いに耽っていた。

（今日の試合――――）

何故一夏のシールドエネルギーがいきなりゼロになったのか、あの一撃が決まっていたら試合の結果はどうなっていたのかは分からない。

何時だって、勝利への確信と欲求を抱いていたセシリアにとっては、この困惑はひどく落ち着かないものだった。

（勝ったのはわたくしなのに・・・・）

けれど腑に落ちない。

（――織村、一夏――）

あの男子の事を思い出す。何か確信に満ちたものを、とても強いものを秘めたあの瞳を。

「織村、一夏」

そう呟くだけで胸が高ぶるのが分かる。でもこの気持ちが何なのか、分からない。熱いのに甘い、切ないのに嬉しい。

――――知りたい。

この気持ちの正体を。その向こう側にあるものを。

――――知りたい、一夏の事を。

「・・・・・・・・」

浴室には水の流れる音だけが、ただただ響いていた。

ｍｉｓｓｉｏｎ９　決闘　後編（後書き）

さあ、アンケートの時間です。内容はいたって簡単、武装についてです。
白に使って欲しい武装を募集します。作品は何でも構いません。オリジナルだって歓迎します。中二病な物も大歓迎！何かの作品に登場する武器の場合は作品名も記入してください。お願いします。

mission10　就任（前書き）

今回、だいぶ長くなりました。ネタも中々思いつかず苦労しました。
どうぞ楽しんでください。

ｍｉｓｓｉｏｎ１０　就任

セシリアと一夏の決闘が終わった後、俺たちは夕食を取る為一年生食堂に向かった。
今は夕食も食べ終わり、雑談をしているところだ。

「はあ、これであいつがクラス代表か」

一夏がひとりでに呟いた。決闘に勝ったのはセシリアなので、彼女がクラス代表になるのだ。

「だが、お前も専用機持ちになったんだ、これからは実戦訓練をしていくぞ。そのうちリベンジしたいだろ？」

「まあ、そうだな。あ、そういや白って専用機持ってるのか？」

「ああ、そういえばお前は俺の機体を見たこと無かったんだな。それじゃ、明日の放課後の特訓のときに見せてやるよ」

ちゃんと機体制限もしてあるんだ、殺すようなことはまず無いだろう。

「あ、そうだ」

？コイツ、何か思いついたみたいだな。

「なあ箒、お前もＩＳについて教えてくれないか。束さんの妹だから、ＩＳついて詳しいだろうし」

そう、この篠ノ之箒、あのＩＳの開発者篠ノ之束の実の妹なのだ。しかし箒よ。これは一夏と親密になるチャンスだぞ、良かったな。

「そ、そうか。一夏は私に教えて欲しいのだな？」

「ああ。指導者は多いほうが良いしな」

「そうか。じゃあ仕方ないな、私も教えてやろう」

仕方ない、て言ってるわりには嬉しそうだな。それにしても、一夏は箒がこんな態度なのにコイツの気持ちに気付かないのか？すごい唐変木だなおい。

「じゃ、話もまとまったことだし、俺は部屋に戻って休むとするか。お前らも疲れてるだろ？あんま無理せずにちゃんと休めよ」

「おう。また明日」

俺は一夏と箒と別れて部屋に戻った。

扉を開け中に入るとフレア×３が出迎えてくれた。こいつらカサカサ動くから某黒光りするＧみたいだな。

「お前ら、本社から何か連絡はあったか？」

俺の質問に対してフレアは赤いランプを点滅させて否定する。ちなみにこいつら、通信機能と超低出力レーザーを積んでいる。レーザーの威力はスタンガン程度だ。

「そうか。ならいいや、寝よう。このまま起きててもやることないし」

とりあえず俺はシャワーを浴び、寝巻きに着替え布団に入った。
目を瞑ってみると、案外すぐに眠気が押し寄せてきた。俺は眠気に負け、深い眠りへと落ちていった。

四月も下旬、遅咲きの桜が花を開いた頃、俺達は鬼教官こと織斑先生の授業を受けていた。

「ではこれより、ＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、孤島、オルコット。試しに飛んでみろ」

「え？」

「わかりましたわ」

「了解」

ちなみに一夏、セシリア、俺の順である。ていうか一夏、お前はもっとしっかり返事が出来んのか。
四の五の言ってる暇はない、さっさと始めよう。首に下げたドッグタグを握り締める。すると俺の体は純白の光に包まれ、次の瞬間にはグリントを纏っていた。
横を見ると、ちょうどセシリアもブルー・ティアーズを展開したところだった。さすがは代表候補生、速いな。
しかし、その横の一夏はというと、なかなか展開できずにいた。

「集中しろ、織斑」

おっと、ありゃ次は叩かれるな。当の一夏はそれで集中しきれたらしい、やっとの事で白式を展開した。

「よし、飛べ」

言われて俺はすぐに飛ぶ。それにセシリアが続き、後から一夏がだいぶ遅いスピードで着いて来た。

「遅い。スペック上では白式の方がブルー・ティアーズよりも出力が上だぞ」

「そう言われてもなあ。だいたい飛ぶって感覚自体あやふやなのに」

一夏が愚痴を漏らす。ま、確かに『前方に角錐を展開するイメージ』なんて分かりづらいわな。

「イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

セシリアがオープン・チャネルで一夏に声を掛けた。何か前より態度が柔らかくなったな。何かあったか？

「だいたいなんで飛んでるんだ、これ？翼はあるけど飛行機と同じ理屈だとは思わないし」

「説明してあげても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますから」

「いや説明しなくていい」

「そうですか、ふふ残念ですわ」

頭を抱える一夏と楽しそうに微笑むセシリア。何か俺邪魔じゃね？

「あの、よろしければ放課後教えてさしあげてもよろしいですわよ。その時は二人きりで――――――」

「お前ら、急降下と緊急停止をやってみせろ」

「了解。それじゃ先に行くぞ」

言ってブースターを真上に噴射する。その推力によって機体が急降下する。地面に衝突する直前に下に向かってブースターを噴射し着地する。

続いてセシリアも降りてきた。一夏も降りてきたが何だか様子がおかしい。次の瞬間には嫌な予感が的中した。

ドゴォォォン！一夏は止まれずに地面に衝突した。その衝撃で地面に穴が開いている。

とりあえず助けてやろう、話はそれからだ。俺は未だに地面に逆さまに刺さったままの一夏に近づき、足を掴んで引っこ抜く。

「おい、大丈夫か一夏？」

「うう、サンキュウ白。・・・はあ、死ぬかと思った」

大丈夫そうで何よりだ。てか、ＩＳを展開してるんだ大丈夫に決まってるか。

「なあ白・・・」

「何だ？」

「そろそろ降ろしてくれないか？」

「あ、すまん」

掴んでた手を離してやると一夏は白式を解除した。

「馬鹿者、グランドに穴を開けてどうする」

「す、すいません・・・」

鬼教官はこんな時でも厳しいな。どんまい一夏。

「大丈夫ですか、一夏さん！？」

セシリアが一夏に駆け寄っていく。・・・ん？

「ああ、大丈夫だけど・・・て一夏『さん』？」

「それはよかった。ああでも、一応保健室に――――」

「ＩＳを展開していて怪我などするはずが無いだろう」

おっと、誰かと思えば箒か。

「あら、篠ノ之さん。他人の事を気遣うのは当然のこと。たとえそれがＩＳを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか、この猫かぶり」
「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」
「・・・なあ、白。あの二人の間に火花が散っているように見えるんだが、俺の見間違いか？」
「いや、大丈夫だ一夏。俺にもそう見える」
「・・・俺たち、疲れてんのか・・・」
「・・・だろうな」

放課後。俺は白と共に第三アリーナのピットに、特訓の為に来ていた。
来る途中チラッと見たが、観戦席がだいぶ埋まっていた。世界で二人のＩＳを使える男が特訓をするんだ、当たり前か。
「一夏、準備は出来てるか？」
とそこに、ＩＳスーツに着替えた白が声を掛けてきた。男用のＩＳスーツは女性のと違い（同じだったら嫌だ）長めの半袖半ズボンみたいな形だ。
だが白のそれは、俺の紺色じみた物と同じではなく、黒のディティールが入った純白の物だった。
「俺はオッケーだ。白の方は？」

「俺はちょっくら機体の状態を見ていくから、お前は先に行ってろ」

「おう」

応えてすぐに白式を展開する。一度白の方を確認すると携帯端末の画面に見入っていた。

とりあえず俺はアリーナステージへと出た。数分遅れて白も出てきた。だがさっきまでとは違って、その体にＩＳを纏っていた。

俺が、そしてアリーナにいる全ての生徒が息を呑んだ。

白の纏っているＩＳの、その美しさに見とれていた。純白。白式の汚れ無き純白とは違う、全てを拒む絶対的何かを感じさせるものだった。

だが、それよりも目を引くものがある。それは、その体全体を覆っている装甲――――『全身装甲（フルスキン）』だった。

普通ＩＳは、エネルギーシールドによって操縦者を守っている。だからこそ装甲はあまり多くなくてもいいものなのだ。装甲が多いと機動力にも影響が出る。高速戦闘が当たり前のＩＳバトルで遅いというのは、ただ的になるだけだ。

しかし、白の纏っているそれは、『全身装甲』だ。おそらくは防御重視の機体なのだろう。

「それが白のＩＳか。なんつうかキレイな機体だな」

「ん？そうか。まあいい、さっさと始めるぞ」

白はそう言うと背中に何かを展開した。折り畳まれたそれが変形して一つの砲身へとなる。大きい。三メートルはあるであろうそれを、白は軽々と担いでいる。

「そうだ一夏。俺、お前に言ったよな？あの決闘の時に、負けたら承知しねえってなあ」

白の声に、俺は恐怖を感じた。明らかに怒っている。だって声が数トーン低いもん。コイツは怒るといつもこうなるんだ。

「その罰だ、死にたくなければひたすら避け続けるんだな！！この『オイガミ』の砲弾を！！」

オイガミと言うらしいその大口径グレネードキャノンから砲弾が放たれた。

背中に冷たいものが走る。咄嗟に回避したことで直撃は避けたが、その着弾地点を見てゾッとする。砲弾の命中した地面には直径五メートルはあるクレーターが出来ていた。

食らっていたら一撃でエネルギーを持っていかれていただろう。そんな一撃を、あの純白の美しきＩＳが放ってきたのだから信じられない。

「こ、殺す気か！あんなもん食らったらただじゃすまないｄ「だから避けろって言ってるだろ？そういうことだ！」聞けーー！」

立て続けに放たれる砲弾を必死に避け続ける俺。何か可哀想じゃね？白の駆るＩＳ『ホワイト・グリント』――――さっき教えてくれた――はＣＢ（クイックブースト）と言われる急加速を利用した、ブルー・ティアーズのビットを上回る高速多角機動によって時々ハイパーセンサーすらも振り切るのだから恐ろしい。

そんな特訓（？）は夕方まで続いた。

「ここがＩＳ学園」

夜、ＩＳ学園のゲートの前に一人の少女が立っていた。
まだ暖かな四月の風になびく髪は、左右高い位置で結んである。肩にかかるか、かからないくらいの髪は、金色の髪留めがよく似合う艶やかな黒髪をしている。

「待ってなさいよ、『一夏』」

「というわけでっ！織斑君、クラス代表決定おめでとう！」

ぱん、ぱんぱーん。クラッカーが乱射される。俺の頭に乗った紙テープが、実際の質量よりも重く、俺の心にのしかかる。
ちなみに今は夕食後の自由時間。場所は一年生食堂。一年生全員が集まっていて、各自が飲み物を手にわいやわいやと騒いでいる。

「・・・何で俺がクラス代表なんだ？」

「それはわたくしが辞退したからですわ。まあ勝負はあなたの負けでしたが、それも考えてみれば当たり前のこと。何せわたくしが相手だったのですから」

事実なので言い返せない。でも、何でそこで辞退？

「それでまあ、情けなく怒ったことを反省しまして、一夏さんに代表をお譲りすることにしましたの」

「さすがセシリアわかってるねえ」

「折角の男子だもん、持ち上げないとね」

「私達は貴重な経験を積める。他のクラスの女子に情報が売れる。織斑君は一粒で二度美味しいんだよ」

クラスメイトを売るなよ。

「・・・人気者だな一夏」

「本当ににそう見えるか、箒？」

「ふん」

箒は鼻を鳴らしてお茶を飲む。この調子でさっきから機嫌が悪い。何でだ？

「はいはーい、新聞部でーす。織斑君の取材に来ました～！あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部の部長やってまーす。はいこれ名刺」

受け取る。画数の多い名前だな。本人書くの大変だろうな。

「それじゃ写真取るよー。孤島君とセシリアちゃんも一緒にいいかな？ああ、握手とかしてるといいかもね」

「そ、そうですの。それじゃあ」

セシリアはそう言って俺の手を握ってくる。おい白、なんでお前若干離れてるんだ。

「はいチーズ」

カシャ。シャッターが下りる。て――――

「・・・何故全員入ってますのー！？」

クラスメイト全員が見事な動きで写真に入っている。あ、箒もだ。

「まあまあ、セシリアだけ抜け駆けは無いでしょう」

「だ、だからって――――――」

まだ言い合ってるセシリア達から視線を外すと、白がいない。

（あいつ、何処行ったんだ？）

「ふう。ああいうのはどうも苦手だ」

パーティーから抜け出してきた俺は教員寮の廊下を歩いていた。

「おい、孤島」

いきなり声を掛けられる。この声は千冬さんか。

「何の用ですか？」

「そう警戒するな。生徒会がお呼びだ、ついて来い」

「生徒会が？いったい何で」

「私も詳しくは知らん。まあ行けば分かる」

俺はとりあえずついて行くことにした。
これから何が起きるかも知らずに。

ｍｉｓｓｉｏｎ１０　就任（後書き）

アンケートの返事が中々来ません。でも武装については一件だけ来ました。本当に有難うございます。
武装はオリジナルでも構いませんし、アーマード・コアに限らなくてもいいです。出来れば、今は近接武装についての意見が欲しいです。どうぞ宜しくお願いします。
後書きについてのアンケートの方も宜しくお願いします。

ｍｉｓｓｉｏｎ１１　転校生はサード（？）幼馴染（前書き）

最近ラストレイヴンにはまっています、灯火です。ホワグリ再現したりして遊んでます。

ｍｉｓｓｉｏｎ１１　転校生はサード（？）幼馴染

『織村一夏クラス代表決定パーティー』は十時過ぎまで続いた。
やばい、女子のエネルギーを侮っていた。そう気付いた頃にはもう夜はどっぷりとふけ、俺はエネルギーを消耗しきって部屋に帰還、ベッドに転がっていた。

「今日は楽しかっただろう。よかったな」

箒もさっきから言葉の節々に棘がある。

「どこがだよ。疲れただけで、楽しいもんか。お前が逆の立場だったら嬉しいのかよ」

「むっ・・・。ああ、そうだな。楽しいかもしれないな」

コイツはいつも自爆する。そろそろ切り上げてやるか。

「あっそう。んじゃ俺寝ｒぶべっ。いきなり何しやがる！」

寝ようとして布団に潜り込もうとした時、枕が飛んできた。

「今から寝巻きに着替える。むこうを向いていろ！」

同居生活も一週間が過ぎたが、何でコイツは、いつも俺が居る時に着替えるんだ？

「なあ箒。前にも言ったけど、俺が居ない時に着替え――――」

ギロッ。

「分かった分かった。むこうを向いてますよ」

これだから女は分からない。俺はとりあえず布団の上でゴロリと向きを変える。

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

そう、この沈黙が嫌なんだよ。ちょっとした衣擦れの音も大きく聞こえて、余計にドキドキする。

（はあ、助けてくれ白・・・）

「あのー、織斑先生？ほんとに何で、俺は生徒会に呼び出しくらってるんですか？」

「だから、さっきから言ってるだろう。私にも分からん」

何回このやり取りを続けただろう。だって本当に分からないんだもん。俺、何もしてないし。

あれやこれやとしてる内に、着いたのは生徒会室ではなく理事長室だった。

「え？此処って理事長室じゃあ・・・」

「いいから入れ。私は此処で失礼するが、後はお前でどうにかしろ。それじゃあな」

「えっ、ちょっと先生！」

「がんばれよ」

千冬はそれだけ言うと行ってしまった。後には俺だけが残された。

「・・・・・まあ、此処でじっとしてたら始まらないし、当たって砕けろって事で」

俺は思い切ってドアノブに手をかけた。当たり前だが開いている。

「失礼します」

部屋に入ると窓の前の席に初老の男が居た。その隣には一人の女子生徒が居た。リボンの色からして、二年生だろう。

「おお、来たか。待っていたよ、孤島白君。私は轡木十蔵（くつわぎじゅうぞう）。この学園の理事長をやっている。それで此方は」

「ＩＳ学園生徒会長、更識楯無（さらしきたてなし）。楯無って呼んでね、白君」

・・・はい？

「まじ、ですか？」

「うん、まじ」

えー・・・。確かこの学園の生徒会長ってのは『最強』の証だって聞いたぞ。

「・・・それで、用件は？」

「あら、意外と反応うすいわねえ」

「いえ、慣れてるんで」

だって、俺の周りってチートな人間が沢山居るんだもん。ひっどい人間が沢山。

「うーん、用件って言うほどでもないんだけどね。白君にはこれから――――――」

「織斑君、孤島君おはよー。転校生の噂、聞いた？」

朝。席に着くなり俺と白は女子に話しかけられた。入学からの数週間で、女子とはそれなりに話せるようになった。

「転校生？この時期に？」

確かこのＩＳ学園、転入の条件が厳しいはずだ。なんでも、国の推薦が必要だとか。

「聞いた話によると、中国の代表候補生だそうだよ」

「ふーん。白、お前知ってたか？」

「いや、知らん」

あ、代表候補生といえばセシリアもそうだったな。

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら」

気付くとセシリアがすぐ横に居た。腰に手を当てたポーズが、相変わらず様になっている。

「このクラスに入ってくるわけじゃないんだ。騒ぐほどの事でもないだろう」

箒も結局は噂に敏感な女子という事だろう。さっきまで窓側に居たのに、今はもう俺の前に居る。

「転校生、どんな奴なんだろうな」

「む・・・気になるのか？」

「ん？ああ、少し」

「今のお前に、他の女子を気にしてる余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるんだぞ」

ちなみに、クラス対抗戦と言うのはその名前の通り、クラス代表同士によるリーグマッチだ。同じスタートでの、各クラスの実力指標を作る為にやるらしい。

やる気を出させる為に、優勝したクラスには学食デザートの半年間フリーパスが配られる。

「まあ、やれるだけやってみるさ」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそんなに弱気でどうする」

「織斑君が勝てば、クラス皆が幸せだよー」

セシリア、箒、クラスメイトと各々が好き勝手に言ってくる。
最近はＩＳの基本操縦で躓いていて、自信に満ちた返事は出来ない。

「それに、今専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

「――――その情報、古いよ」

ん？教室の入り口からすっげー聞き覚えのある声が聞こえたような・・・。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝させないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは――――

「鈴・・・・？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「おーおー、何格好付けてるんだお前」

白が囃し立てる。

「そうだぞ鈴。すっげえ似合ってねえぞ」

「んなっ・・・！？何てこと言うのよ、アンタ達は！」

おお、やっと普通に喋った。何ださっきの気取ったしゃべり方は。

軽く引いたぞ。

「おい」

「何よ！？」

バシンッ！聞き返した鈴に痛烈な出席簿打撃が入った。――――鬼教官登場だ。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません」

すごすごとドアからどく鈴。その態度は１００％千冬姉にビビッて

いる。こいつ、昔から千冬姉が苦手だよな。何でか知らんが。

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

何で俺が逃げるんだ。

「さっさと戻れ」

「は、はい！」

うん、昔通りの鈴だ。しかし、何であいつは格好付けて宣戦布告に来たんだ？高校デビューかってタマでもないだろ。

「てかあいつ、ＩＳ操縦者やってたのか。知らなかった」

「俺もだ。ま、人は変わってないみたいだがな」

「だな」

と、この会話がまずかった。

「・・・・一夏、今の女子は誰だ？知り合いか？ひどく親しそうだったが？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で――――」

その他、クラスメイトからの質問集中砲火に合う俺たち。ああ、俺らの馬鹿・・・・。

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿共」

千冬姉の出席簿が火を噴いた。・・・俺達の所為か？――――俺達の所為だな。

「うーん。何でまたこうも知り合いに会うんだろうか」

「んー？何かの縁だろ。賑やかでいいじゃないか」

「そんなもんか？まあ、いいか」

そして、今日も一日ＩＳの訓練と学習が始まる。

ｍｉｓｓｉｏｎ１１　転校生はサード（？）幼馴染（後書き）

題名にもあるとおり、鈴はサード幼馴染です。先にオリ主と箒がいますから。
アンケートの返事が中々来ません。武装は何の作品の物でもいいです。気軽にどうぞ。・・・自分的には実体ブレードとかが欲しいです。ＦＦに出てくるようなやつ。

番外編　介入したはいいが・・・（前書き）

今回は番外編です。原作知識が云々という意見が来たのでここら辺で修正修正。

番外編　介入したはいいが・・・

どうも白でーす。この話では俺が原作に介入して思ったことを話したいと思います。まあ、付き合わなくてもいいです（出来れば聞いて欲しいけど）。
それでは始まり始まりー。

ＩＳ学園に来て早数週間。俺は悩んでいた。
転生した頃は、原作の知識があるから生き延びることは出来るだろうと思っていた。だが、その考えが甘かった。
何が甘かったかって？それは簡単だ。原作知識が欠けていたのだ。
いや、欠けていたなんてものじゃない。ＩＳや世界観の知識は残っていたが、それ以外の知識がスッポリ抜けていた。
それが分かったのは転生して四年ぐらい経った頃だった。

とある朝。俺が四歳ぐらいの時だった。父さんが研究室に妙な人間を連れてきたのだ。
どこら辺が妙かって？そりゃ全体的にだ。頭には機械的なウサ耳がついていて、服装は『不思議の国のアリス』に出てくるアリスが着てるような青いワンピースを纏っている。一人不思議の国のアリス状態だ。
何だか知ってるような気がした。だが思い出せない。でも知ってるはずだ、そんな気がした。

「父さん、その人誰？」

とりあえず聞いてみよう。話はそれからだ。

「ああ、そうだな。白にはまだ教えてなかったな。彼女は篠ノ之束。私たちの研究を手助けしてくれてるんだ。まあ、時々しか来ないからお前は知らないだろう」

「君が白君？始めまして、私が皆のアイドルこと束さんだよー。プリティ束って呼んでねー」

「・・・分かりました。束さんと呼ばせてもらいます」

「おー四歳児とは思えない対応。束さんちょっとショック」

・・・目の前にいるこの人、本当にコジマ粒子の研究を手伝っているのだろうか？もし本当なら、研究のほうは大丈夫なのか？そう思わせるぐらい妙な人なのだ。

その時、頭に何かがよぎった。唐突に、電撃のように。

そうだ思い出した、この人は、この妙な人物は篠ノ之束だ。後にＩＳを開発することになるであろう、あの人だ。

・・・ん？何で忘れてたんだ？確かに覚えてたはず――――。

そこで俺はあることに気付いた。思い出せない、思い出せないのだ。原作知識が、その重要な部分が。どんな人物がいたのか、どんな話だったかも全て。束について思い出したのはおそらく、本人に会ったからだろう。そうじゃなかったら世界の修正力かなんかだろう。

「どうしたんだ、白？」

「あ、いや何でもないよ」

「そうか？ならいいんだが・・・」

この瞬間から俺はこの世界に対して危機感を覚えた。どうやって生き抜けばいいんだと。

――――とまあ、こんな感じだ。

しかし、あの時始めて気付いたのは幸いかもしれない。だって、出来るだけ早く対策を講じることが出来たのだから。

今となっては大体の事を思い出した。でもそれだって、今までに起きたことの元ネタだけだ。これから先の事は、まったく思い出せない。

「・・・まあ、分からないなら分からないなりに、この世界を楽しめるからいいか」

俺はこの世界で生き抜く、転生してすぐそう決めた。今もその信念は変わっていない。

「俺は生き抜いてやる、この世界を。何が起きようと関係ない、今俺の世界はここだ」

番外編　介入したはいいが・・・（後書き）

どうでしたか？これであらかた大丈夫だと思うのですが。

ｍｉｓｓｉｏｎ１２　複雑な乙女心（前書き）

どうも次元斬が使えなくて嘆いてる灯火でーす。
また一話書き終わったのでどうぞ読んでください。
それでは始まり始まり～。

ｍｉｓｓｉｏｎ１２　複雑な乙女心

鈴が転校してきたこと以外は特に無く――――箒とセシリアが授業中山田先生の注意やら織斑先生の出席簿チョップやらを食らっていたがあえてスルー――――現在は昼休み。俺達は食堂に向かっていた。

「一夏！お前の所為で私達はこんな目にあったんだぞ！」

「そうですわ！どうしてくれますの！」

・・・一夏はさっきからこんな感じで女子二人から責められている。なんつうか、ドンマイ。つっても悪いのはあいつか、俺は二の舞にならないよう気をつけなければ。くわばらくわばら。

「いやだから、悪かったって言ってるだろう・・・。いい加減解放してくれ・・・。ていうか白も見てないで助けてくれよ」

「ファイトー」

「そりゃねえだろ・・・・・」

あれこれ言ってるうちに気付くと食堂まで来ていた。だがその食堂の前に誰かがラーメンの丼を載せたお盆を持って仁王立ちしていた。もしかして・・・、いやもしかしなくても鈴だろう。身長で分かる。まあ、そんなこと本人に言ったら殺されるだろうから言わないでおく。

「待ってたわよ、一夏！」

「何で俺限定なんだよ。つうか食券出せないからそこどいてくれ。あと普通に通行の邪魔だ」

「う、うるさいわね。分かってるわよ」

ちなみにメニューは俺が日替わりランチにだし巻き玉子、一夏も日替わりだがこちらは玉子は無い。美味いのになこれ。あとは箒がきつねうどん、セシリアが洋食ランチだ。皆、他にも色々試そうぜ？俺も言えないけど。

「ラーメン、のびるぞ」

一夏が言う。確かにさっきからずっと持ってるんだ、早くしないと不味くなっちまうな。

「わ、分かってるわよ！大体アンタを待ってたんでしょうが！何で早く来ないのよ！」

おお、なんつう言いがかり。まあ、コイツはいつもこうだし気にする必要はないと俺も一夏も心得ている。

「それにしても久しぶりだな、鈴。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

あー、そういやこいつらは中二まで一緒だったって一夏が言ってたな。

まあでも、俺は中学に入る前、小六の時に消えたんだがな。いろんな理由で。

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさい

よ」

「どういう希望だよ、そりゃ・・・・」

・・・なあ、一夏。何でだろう、さっきから後ろのほうで殺気を感じるんだ。女子特有の。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！一夏さん？注文の品、出来てましてよ？」

大袈裟に咳き込んだ、殺気を放っていた張本人こと箒とセシリアによって、会話が中断させられる。

おお、今日は鯖の塩焼きだこんがりついた焼き色が食欲をそそる。だし巻き玉子もふんわり焼けていて美味そうだ。

「お前ら、思い出話は飯を食いながらしようぜ。ほら、向こうの席空いてるぞ」

俺を除いた全員に促す。しかしなんだな。ここまで多いと移動も大変じゃねえか。

とりあえずは席に着く。話はそれからだ。

「鈴、何時日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？何時代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかりしないでよ。アンタらこそ、何ＩＳ使ってんのよ。ていうか一夏はともかく、白。アンタがＩＳ使ってるなんてこっち来て初めて知ったわよ。どういうこと？」

「あー、それはだな。色々と事情があって、極秘裏に入学したんだ」
「極秘裏って何で？」
ぐあ。一夏、てめえはそれを訊くか。出来れば訊いてほしくないのに。
「お、教えられるか。機密事項だからな。知ったら色々と面倒だぞ。ま、時が来たら教えてやるよ」
二人は納得いかないといった顔だが、とりあえずは訊くのを諦めてくれたらしい。よかったよかった。
「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」
「そうですわ！一夏さん、まさか此方の方と付き合ってらっしゃるの！？」
俺達が――――特に一夏と鈴が――――楽しそうに話しているのに疎外感を感じてか、箒とセシリアが多少棘のある声で訊いてくる。てかセシリア、それは話が飛躍しすぎだろ。
「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ・・・・・」
「そうだぞ。何でそんな話になるんだ。ただの幼馴染だ」
「・・・・・・・」
「なあ、白。何で俺はコイツに睨まれてるんだろうね」

「さあな」

「別に何でもないわよ、馬鹿！」

おお、鈴が怒った。

「何怒ってんだ？」

一夏も一夏でどんだけ唐変木なんだよ。鈍い奴だ。

「幼馴染・・・・・？」

怪訝そうな声で聞き返してきたのは箒だった。そういやコイツは知らないんだったな、鈴の事。

「あー、えっとだな。箒が引っ越したのが小四の終わりだっただろ？鈴は小五の頭に転校してきたんだ。中二の終わりに国に帰ったから、会うのはちょうど一年ぶりだな」

「ほう。鈴。お前、一年前に国に帰ってたのか」

「ああそうか。白は小六の中盤頃に引っ越したから、鈴と会うのは四年ぶりか」

俺の事はともかく、箒と鈴って面識無かったんだよな。ちょうど入れ違いだったしな。

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘」

鈴はじろじろと箒を見る。負けじと箒も鈴を見る。あれ？何故だか二人の間に火花が散ったように見えるな。きっと、・・・うん、きっと気のせいだ。そういうことにしておこう。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言って挨拶を交わす二人。その二人の間にまたしても火花が見えた様な気がした。・・・俺、疲れてるのか？しっかり休まないと早死にしちまう。ちゃんと休もう。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ」

「・・・・誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし、他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ・・・！？」

セシリアは怒りで顔を赤くしていた。あー・・・どうすればいいかな、この状況。　・・・作戦放棄を提案するぜ俺！

「んじゃ俺は、この辺りでおいとまさせてもらうぜ。一夏。後は頼んだぞ！」

「えっ！？ちょ、待ってk「がんば！」ふざけんなぁぁぁ！」

一夏の叫びを背に、俺は即食堂から離脱する。一夏。生き残れよ、お前は。

時間は夜。場所は一年生寮。俺は、昼の事を訊いて笑ってやる為に、一夏の部屋を目指して廊下を歩いていた。

「えーっと１０２５室は・・・と、この階段を上がって右に進んだ所か」

この建物、結構広いな。移動がめんどくせえな、おい。

と、俺が階段を上がり終えた時、廊下の向こうからでかい声が聞こえた。

「最っっっ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

そういって寮の一室から飛び出してきたのは、ボストンバッグを片に提げた鈴だった。その目には涙が滲んでいた。だがそれも、鈴が廊下の向こうに走っていってしまい一瞬しか見えなかった。

「・・・・・・・」

とりあえずは、あれが一夏の部屋だと分かった。何故かって？だって鈴がさっき言ってたじゃん。男の風上にも置けないヤツって。部屋の前まで行って中に入ってみる。するとそこには、片方の頬を赤くしている一夏と機嫌の悪そうな、というか悪い箒が居た。

「お、おい。何があったんだ一夏？」

「・・・・はぁ。訊かないでくれ、白・・・・」

「どうせ鈴を怒らせたんだろ。どうすんだ、アイツ泣いてたぞ」

「そ、そう言われてもなぁ。だいたいなんで怒ったのか分かんないし・・・。つうかあんなに言わなくてもいいだろ、普通」

・・・・はぁ。まったくコイツって奴はどんだけ鈍いんだよ。女の子が怒ったり泣いたりするって事はそんだけ大事なことなんだろ、多分。

「あのなー、お前は何でそういつもいつも――――――」

「一夏」

俺の言葉に割り込んで一夏を呼んだのは、さっきまで口を開かなかった箒だった。

だが、その言葉は冷たいものだった。

「お、おう。何だ、箒？」

「馬に蹴られて死ね」

うわーなんともキツイ言葉。それ言われて一夏も相当ダメージ食らってるぞ、主に心に。

「・・・ドンマイ一夏」

「・・・ああ・・・・」

翌日。今は朝。鬼教官・・・じゃなくて織斑先生のＳＨＲ中だ。

「クラス対抗戦については以上だ。では次に、生徒会からの連絡を伝える。各自よく訊くように」

はて？何かあったんだろうか。

「本日付で孤島が、生徒会執行部に所属することになった。これから孤島には特別権限とそれ相応の義務が与えられる。孤島はこれからしっかり仕事をするように」

・・・・え？あ、ああそうか。そういやそうだったな。

「（おい白どういう事だ？）」

隣の席の一夏が話しかけてくる。

「（どういう事だって、そういう事だよ。色々とあったんだ）」

本当に色々とあった。どういう事あったかって？それはこんな感じだ。

『白君にはこれから生徒会に所属してもらうわ』

『え？いったいどういう・・・』

『どういうも何も、そのまんまの意味よ。それに、その方があなたにも都合が良いでしょ？生徒会に所属すれば、緊急時に自分の判断でＩＳを使用できる。そうすればいざという時『あいつら』と上手く戦える、そうでしょ？』

『！・・・そうですか、そこまで調べていましたか。なら断る理由もありません、引き受けましょう』

『ふふっ。素直な子はお姉さん好きよ』

『それはどうも』

・・・・てな感じだ。

まあ、これで『あいつら』と戦う用意も整ってきたか。

準備ができ次第俺が潰してやる。待ってろよ――――『幽霊』そして『企業連』。

ｍｉｓｓｉｏｎ１２　複雑な乙女心（後書き）

「どうもどうもー作者でーす。え？何で台詞になってるのかって？それはですね・・・」

ジャジャーン

「今回試験的に始まりました、作者と白による『傭兵トークコーナー』です。此処では自分と白によるトークをします。それではもう一人のＭＣ、白君の登場です。どうぞ！」

パーンッパーンッ

「・・・・・何をしてんだお前は。何故作者であるお前が此処に居る？つうか此処何処だ？」

「まあまあ細かいこと気にしない気にしない。それじゃ、役者も揃ったところで「おい、人の話を」早速始めましょうー」

「たく、何なんだよ」

「そう怒らずに。じゃあ今回は最初ということもあるからなー。・・・よし、それじゃあ白について教えましょうかねえ」

「おい、勝手に個人情報流そうとすんな」

「いいじゃんいいじゃん。さて。この話の主人公である彼のイメージはですね、ＡＣ４とＡＣＦＡの主人公を合わせたようなものです」

「そうだったのか？俺はてっきり適当に作ったんだと思ったんだがな」

「さすがにキャラはしっかり作るよー。じゃなきゃ面白くない」

「面白くないって、お前なあ・・・。まあ、いいか。そんじゃこの辺で」

「終わりにしますか。まあこんな感じでやっていこうと思うんですが、どうでしょう？続ける時はさらにゲストを迎えようと思ってます。意見などがありましたらどんどん送ってください。それでは皆さん———」

「「さようならー」」

ｍｉｓｓｉｏｎ１３　クラス対抗戦、開始（前書き）

産廃機体は誇れるもの。

ｍｉｓｓｉｏｎ１３　クラス対抗戦、開始

「えーっと格納庫は・・・此処か」

放課後、一夏の特訓を箒とセシリアに任せた俺は、第四アリーナの格納庫に本社から届いた装備を確認する為来ていた。プシューッ、と空気の抜ける音がしてドアが開く。その中には武装の入ったコンテナが四つ、並んでいた。

「んじゃ、一つずつ確認するか」

近くにあった一つを開けてみる。中に入っていたのは火炎放射器『月輪（ガチリン）』と『日輪（ニチリン）』だった。・・・・・分かっていると思うが、これは趣味だ。

その隣にある物も開けてみる。ＨＩレーザーライフル『カラサワ』が二丁入っていた。コイツは個人的に好きなんだよ。使い易いし。

三つ目は――――

「！これはっ！」

中に入っていたのは、大剣型の実体ブレードだった。

「コジマバスターブレード・・・完成してたのか。さすがは特殊技術の『キサラギ』だ、この短期間で実現しやがった」

名を『霧雨（キリサメ）』というそれは、その刀身にコジマ粒子を纏わせることで攻撃力を増加させ、相手に強力な一撃を浴びせることが出来る。しかし、今回はその機能は使えないのでただの実体ブレードとして使うつもりだ。・・・気付いた奴もいると思うが、元ネタはＧＮバ

スターソードだ。ま、カッコイイから良いじゃん。
ということは最後の一つは開けなくても分かる。出来れば使わずにすんでほしい代物だ。それだけ危険なものが、この中には入っているのだ。

「――――よし、問題ないな。んじゃ本社に連絡入れておくか」

俺はポケットから通信機を取り出してアークの本社に繋ぐ。

『はい。此方ラインアーク本社です』

「ようフィオナ。頼んでおいた装備、届いたぞ」

俺の通信に応えたのはラインアークの看板娘（？）ことフィオナだった。てか、コイツは相変わらず仕事ばっかしてんな。あんまり働きすぎるとストレス溜まって折角の美人が台無しになるぞ？

『そうですか、それは良かった。では社長には此方から伝えておきます』

「ああ。そうしてくれると助かる。それじゃあな」

『え、あ、あの、ちょっと待ってくださいっ！』

珍しくフィオナが大きな声を出したので少し驚いた。

「あ、ああ。な、何だ？」

『あのー・・・ですね。そのー・・・』

フィオナにしては歯切れが悪い言葉に少し面食らってしまう。いつもならこんな態度しないのにな。

『あの・・・そちらは・・楽しい、ですか？』

「？んー、まあそこそこな」

『・・・・・そうですか』

あれ？なんかいきなり不機嫌になったような・・・。

「えーっと・・・フィオナ？」

『それでは社長にはしっかり伝えておくので。おやすみなさい』

ブツッ。切られた。通信を一方的に。

「・・・・どうしたんだろうな、アイツ」

独りでにそう呟く。女子というのは分からない。色々な事がいきなりすぎて対処ができん。

「ま、いいか」

気付いたら、時間はもう七時。あいつ等もそろそろ切り上げただろうし、俺も食堂行って飯でも食うか。

―――翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は『クラス対抗戦日程表』。

一夏の一回戦の相手は二組―――鈴だった。

五月。クラス対抗戦当日。
あれから数週間たったが鈴の機嫌は直らない。この間、『勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられる』という勝負を持ち掛けられた後口喧嘩になり、俺が禁句である『貧乳』を言ってしまったので、直るどころか余計に機嫌が悪くなった。

（何にしても、謝んなきゃいけないな・・・）

噂の新入生同士の対決とあって、第二アリーナは満席だ。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされている。会場に入れなかった生徒や教師、関係者はリアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

（・・・と、そんな事を気にしてる場合じゃないな）

俺の前には、鈴とそのＩＳ『甲龍（シェンロン）』が試合開始を静かに待っている。左右の肩にある、棘付き装甲型（スパイクアーマー）の非固定武装（アンチロックユニット）がやたら攻撃的な自己主張をしている。・・・・・あれで殴られたら、すげー痛そう・・・・。

『それでは両者規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて俺と鈴は空中で向かい合う。その距離五メートル。俺と鈴は開放回線（オープン・チャネル）で言葉を交わす。

「一夏、今謝るなら少し痛めつけるレベルを下げてあげるわ」

「どうせ雀の涙ぐらいだろ。そんなもんいらねえよ。全力で来い」
これは、強がりでも何でもない。セシリアの時もそうだが、俺は真剣勝負で手を抜くのも、抜かれるのも嫌いだ。勝負とはそういうものだ。全力でやってこそ、始めて意味が生まれる。
「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御は完璧じゃない。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」
それは脅しなんかじゃない、本当の事だ。噂では、ＩＳ操縦者に直接ダメージを与える“為だけ”の装備も存在するらしい。もちろん、それは競技規定違反だし、何より人名に危険が及ぶ。けれど、
『殺さない程度にいたぶることは可能である』
という現実は変わらない。そして、代表候補生クラスはそれがおそらく可能なんだろう。俺がセシリアの時にきわどいところまで迫ったのは、本当に奇跡としか言いようがない。
そして、奇跡は二回と続かない。
『それでは両者、試合を開始してください』
ビーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に俺と鈴は動いた。
ガギィンッ！！
と次の瞬間にはお互いの刃が交えた。

「いよいよ始まりましたね」

山田先生が、そう呟く。

モニターには、瞬時に展開した《雪片弐型》を、鈴がバトンのように振り回す青竜刀――と呼ぶにはかけ離れた形状――に弾かれながらも、三次元躍動旋回（クロス・グリット・ターン）をどうにかこなして鈴を正面に捕らえている一夏が映っていた。

「一夏・・・」

「一夏さん・・・」

隣で箒とセシリアがが心配そうに呟く。

「安心しろ、お前ら。あいつなら大丈夫だ。なんせ俺が鍛えたんだからな。・・・まあ、負けたら負けたでまた地獄を見せるだけだ」

「「？」」

おっと、口が滑ってしまった。だがこいつらには最後の黒い台詞は聞こえなかったらしい、不思議そうに此方を見ている。

再びモニターに目を戻すと、距離を取ろうとする一夏が映っていた。

その刹那――――

『――甘いっ！』

鈴の声が響き、肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間、一夏の体は見えない衝撃に『殴り』飛ばされたように吹き飛ぶ。

一夏が体制を立て直そうとする間も鈴の攻撃は止まない。

『今のはジャブだからね』

不敵な笑みを浮かべる鈴。牽制（ジャブ）の後は本命（ストレート）と相場が決まっている――！

「――――避けろ、一夏！」

ドンッ！

『ぐあっ！』

俺の言葉は当たり前のように届かず、一夏はもろに攻撃を食らってしまった。

「何だあれは・・・・？」

隣でモニターを見ていた箒が呟く。

「衝撃砲だ。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃を砲弾にして撃ちだす兵器だ」

「わたくしのブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわね」

セシリアが呟く。今モニターには苦戦する一夏が映し出されている。

『よくかわすじゃない。この『龍砲』は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに』

鈴がそう言っている間も攻撃は止まらない。だが、

「織斑君、動きが変わりましたね。何かするつもりでしょうか？」

山田先生の言葉に答えたのは千冬さんだった。

「『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』を使うつもりだろう。私が教えた。出しどころさえ間違えなければあいつでも代表候補生レベルとも渡り合える」

『瞬間加速』。それはその名の通り一気にトップスピードになれる技能だ。ＩＳの操縦者保護機能のおかげで、急激なＧに意識がブラックアウトする事はない。

（さて、上手くいくかもんかな？）

「鈴」

「何よ？」

「本気で行くからな」

真剣に見つめる。俺の気概に押されたのか、鈴は曖昧な表情を浮かべる

「な、何よ・・・・そんな事、当たり前じゃない・・・。と、とにかくっ、格の違いって奴を教えてあげるわ！」

俺達が再び刃を交えようとした時――――

ズドオオオンッ！
突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

ｍｉｓｓｉｏｎ１３　クラス対抗戦、開始（後書き）

ジャジャーン

「どうも、作者です。傭兵トークコーナーについて特に批判が無かったので『鴉の雑談』に名を改めて正式に始めようと思います」

「褒め言葉も無かっただろ」

「ぐあっ。おいおい白君、なんて事を言うんだ君は。ちょっと傷ついちゃったよ」

「嘘を言え、嘘を。その顔の何処が『心が傷ついた』って言ってんだよ」

「はっはっは、冗談だよ冗談。んじゃ、そろそろ始めるか」

「そう言っても特にやること無いだろ」

「そう言うと思って、今日はゲストを呼んでいまーす。織村一夏君です、どうぞ！」

「えーっと・・・此処何処？何で白が居んの？てかあんた誰？」

「ようこそ一夏君。此処は夢の中だ夢の中。それと僕の事は何とでも呼んでくれ」

「え、でも俺寝た覚えｈ「いいからいいから」うーん、まあ、いいか」

「それじゃゲストも納得したところで早速始めよー」

「で、結局何をするんだ作者」

「んー？じゃあまたしても白君の過去を暴露――――――」

「わーー！やめろばｋ「一夏君、白は一体どういう少年だったかな？」聞けコラァァーー！」

「白かー。コイツ昔ｈ「やめろ一夏！ネタばれになる！」えーでも――」

「いいからやめろぉぉぉー！」

「はっはっは、冗談が通じないなぁ、白君は」

「作者てめえ、覚えてろよ」

「それじゃあ、そろそろ時間かな？「おい、話をｋ」皆さん、また次回会いましょう」

「「「さようならー」」」

――――――次回、いよいよ白の過去が少しばっかし明らかに！？ほんの少しだよ。

mission14　追憶の襲撃者（前書き）

レイヴンの生き様。憧れるぜ。

ｍｉｓｓｉｏｎ１４　追憶の襲撃者

ズドオオオンッ！！
突如、アリーナに衝撃が走った。

「何が・・・起きたんだ？」

箒が驚きを含んだ声をあげる。
だが、今の俺にはそんな事どうでもいい。俺はアリーナの、その中心をじっと見つめる。そこに居る『敵』を。

（・・・・こりゃあ、面倒な事になりそうだな・・・）

アリーナを揺らした衝撃の正体は、鈴の衝撃砲――――ではないだろう威力も範囲も桁違いだ。
しかもアリーナの中心からはもくもくと煙が上がっている。どうやらさっきの『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通してきた衝撃らしい。

「な、何だ？何が起こって・・・・」

状況が分からず混乱する俺に、鈴からプライベート・チャネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

鈴が早口にそう言うと、ＩＳのハイパーセンサーが緊急告知を行ってきた。

―――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています。

「なっ――――」

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので作られている。それを貫通できるだけの攻撃力を持った機体が乱入、此方をロックしている。

つまり、ピンチというやつだ。

『一夏、早く！』

「お前はどうするんだよ！？」

初めての相手との回線の開き方が分からない俺は、普通にオープン・チャネルで返す。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって・・・女を置いてそんな事出来るか！」

「馬鹿！アンタの方が弱いんだから仕方ないでしょうが！」

思いっきり遠慮なく言われた。ちなみに俺がプライベート・チャネルで返さないから、鈴も普通に喋っている。

「アタシだって、最後までやり合うつもりは無いわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達が事態を収拾――――」

「あぶねえっ！」

間一髪、鈴の体を抱きかかえてさらう。その直後、さっきまでいた空間を熱線で砲撃された。

「何だ・・・ありゃ・・・・」

砲撃を放った者の正体は、異形。としか言いようがない姿だった。深い灰色をしたそのＩＳは、腕がつま先よりも下まで伸びていた。しかも首という物が無く、肩と頭が一体化しているような形をしている。

何より特異なのが、その『全身装甲（フルスキン）』だった。

ホワイト・グリントもそうだが、通常、ＩＳはシールドエネルギーによって守られている為、部分的にしか装甲を展開しない。だから、見た目の装甲というのはあまり意味を成さない。もちろん、防御に特化した機体なら物理シールド等を装備しているが、肌が一ミリも露出していないＩＳなんて、ホワイト・グリント以外聞いた事が無い。

そしてあの巨体も、他のＩＳとは違う事を物語っている。腕を入れると二メートルもある。

「ちょっ、ちょっと、馬鹿！離しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな！――――てか殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！」

シールド・エネルギーで守られてるとはいえ、速射砲の如きパンチが顔面に向かって飛んでくるのだ。気分のいいものではない。

「大体何処触って――――」

「！来るぞ！」

敵は此方に向かって、ビームを乱射してくる。

「お前、何者だよ！」

しかし、襲撃者は答えない。

『織斑君！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達がＩＳで制圧に行きます！』

割り込んできたのは山田先生だった。心なしか、いつもより声に威厳がある。

「――――いや、先生達が来るまで俺達で食い止めます」

相手は遮断シールドを貫通できるだけの攻撃力を持っている。誰かが此処で食い止めなければ、観客席にいる人間に被害がでる。

「いいな、鈴」

「だ、誰に言ってんのよ。そ、それより離しなさいってば！動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

俺が手を離すと、鈴は自分の体を抱くようにして離れる。うーん、そんなに嫌だったか。そいつは悪かった。

『織斑君!?だ、ダメですよ!生徒さんにもしものことがあったら――――――』

言葉はそこまでしか聞けなかった。相手の突進をかわす。

「向こうはやる気みたいね」

「みたいだな」

俺達はそれぞれの得物を構える。

「あたしが衝撃砲で援護するから、アンタが突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ」

「その通りだ。それじゃ、それで行くか」

「もしもし!?織斑君聞いてます!?凰さんも!聞いてますー!?」

ＩＳのプライベート・チャネルは声に出す必要はないのに、山田先生は焦ってそんな事気にしている暇はないようだった。

傍から見たら、危ない人だ。

「山田先生、落ち着いてください」

グリントが生体反応を感知しなかったのを見ると、おそらくあれは無人機だろう。そういうのとは戦いなれてる所為なのか、直感的にも分かった。

「そうだ。本人達がやると言っているのだ、やらせてみてもいいだろう」

千冬さんと山田先生の会話を軽く流していて、気付いた。――――箒が、居ない。
不安が押し寄せてくる。何かヤバイ事が起きる、そんな気がした。
そして次の瞬間には、その不安が的中した。

『一夏ぁっ！男なら・・・・男なら、その位の敵に勝てなくて何とする！』

キーンとハウリング。声の主はもしかしたら、いや、もしかしなくても箒だろう。
つうかアイツ、いつの間に放送室に？
と、その声に反応してか襲撃者は声の主へと向く。
――――――まずいっ！
襲撃者は腕の砲口を箒へと向け、発射しようとした。一夏が間に飛び込もうとする。その時――――――。
突如上空からビームが遮断シールドを貫通して降り注ぎ、その一発が襲撃者の片腕を吹き飛ばす。
そしてビームを放った『何か』は、急降下してきて襲撃者を踏み潰す。襲撃者はそれだけで機能停止した。
その『何か』は白い装甲を纏い、右手に五連装ガトリング、左手に長大なキャノン砲を持っていた。そいつは、コジマの遺産、プロトタイプネクスト『アレサ』だった。

それが、俺の記憶を蘇らせる。

「嘘だ・・・・そんなはずない。・・・・・あいつは・・・・あいつは俺が、この手で『殺した』筈だ・・・」

「殺した、だと？どういうことだ白！？」

頭に過ぎる、忘れたくても忘れられない『あいつ』の声。

『その力で・・・・お前は』

あいつの体を貫いている、血まみれのグリントの右手。そして、あいつの最後の言葉。

『折れるなよ・・・』

「何故だ・・・何故お前がここに居る。ジョシュアァァァァッ！」

俺はグリントを展開し、右手に武器を呼び出す。

射突型ブレード『キク』。ＩＳのシールドエネルギーと装甲を貫通し、操縦者を殺傷する兵器。それを壁に向かって叩きつけ、吹き飛ばす。其処を潜ってアリーナへと出る。

――――ジョシュア。あいつは、俺がこの手で殺した筈だ。父さんを殺された怒りに任せて。

そんな事を考えている間にも、敵との距離は近づいていく。

「白っ！？お前どうやって――――」

「うおぉぉぉぉぉぉぉっ！！」

一夏の言葉も無視して、キクを叩き込む。しかし、アレサはそれを紙一重でかわす。目標を失った杭が、地面を抉る。

「答えろジョシュア！何でお前がここに居る！？お前は・・・死んだんじゃなかったのか！？どうなんだ、ジョシュア！！」

「・・・・・・白」

さっきまで沈黙を続けていた敵が口を開いた。懐かしい、それであって聞きたくなかった声。

「ジョシュア・・・。あんた、ジョシュアなんだろ？」

「・・・違う。俺はあいつではない。俺は『人間』じゃない」

「！？何・・・だと・・・！？」

「俺は、ジョシュアの戦闘データを元に作られたプログラムだ。ジョシュアは死んだ。お前が殺した」

「おい、白。お前が人を殺したって、どういう事だよ？教えてくれ、白！！」

「一夏・・・・」

コイツは知らないんだったな。ジョシュアの事を、俺の両親が何で死んだのかを。

「あいつは、ジョシュアは、俺の親友で、兄貴みたいで、目標だった人だ。そして――――」

俺はそこで一旦言葉を止め、言い切る。

「父さんの仇で、俺が殺した」

俺のその言葉に、一夏と鈴はただ驚くだけだった。そりゃそうだ、自分の友達が人殺しで、しかもその殺した相手が、父親の仇なのだから。

「お前ら。ここからは手を出すな」

「何でよ！あたし達だってまだ戦え――――――」

「いいから手を出すな！！」

俺の怒号に鈴は言葉を止める。その顔には驚愕の色が浮かんでいる。

「・・・悪い。でも、お前達に死んでほしくないんだよ、俺は。あいつに、アレサにＩＳで挑んだら、確実に死ぬ。だから、手を出すな」

「・・・・分かった。だけどな、白」

「何だ？」

「必ず生きて帰ってこい！」

「・・・・・・・おう！」

俺は一夏と拳をぶつけ合わせて、アレサへと向き直る。

「俺の役目はお前とホワイト・グリントの破壊だ。殺すつもりで来ないとお前が死ぬぞ」

「ああ、そんな事分かってるさ。今度こそ、お前を消す」

――――――殺し合いが始まった。

ｍｉｓｓｉｏｎ１４　追憶の襲撃者（後書き）

「皆さんこんにちはー。作者でーす。今回は白君が本編の方が忙しくて来れないので代理が来まーす。それではどうぞ！」

ジャジャーン

「フィオナ・イェルネフェルトです。以後お見知りおきを」

「いやー、ありがとねーフィオナちゃん。白君の代わりなんか頼んじゃって大丈夫だった？」

「特に問題はありませんので心配しなくても大丈夫です」

「そっか、それは良かった。そんじゃ、早速始めよー。フィオナちゃんに質問があるんだ」

「何でしょうか？答えられる範囲で答えますので」

「じゃあさ、単刀直入に訊くよ。ぶっちゃけ白君の事どう思ってんの？」

「え、それは、そのー・・・」

「ハッハッハー。そんなに照れないで言ってみなさい」

「その・・・。す、す、す――――」

「おーい作者、遅れてすまん。て、フィオナ。こんな所で何してん

の？」

「あれ？白、お前今回は来ないんじゃなかったっけ？」

「おいおい、俺は仮にも司会だぞ？ちゃんと来るさ。つうかさ、フィオナ。お前何で顔が赤いの？」

「そそそ、それは・・・・。きゃぁぁぁぁぁっ！！」

「て、おい。待てよフィオナ！・・・おい作者。お前何かしたか？」

「いんや、何も」

「そっか。と、もう時間だな。それじゃあ」

「「さようならー」」

――――次回、アレサと決着！白は因縁を断ち切れるのか！？

ｍｉｓｓｉｏｎ１５　白き閃光と白き悪魔（前書き）

今すぐ撃ちたい社長砲。

ｍｉｓｓｉｏｎ１５　白き閃光と白き悪魔

目の前で繰り広げられる壮絶な戦いを、一夏と鈴はただ見ている事しか出来なかった。
いや。これはもう、戦いなんてレベルではない。『殺し合い』だ。
お互いが首や頭等の急所を狙いながら切り結び、時には撃ち合っている、常識外れの『殺し合い』が目の前で行われているのだ。

「なあ、鈴」

「何よ？」

「白のＩＳ。ホワイト・グリントって、本当にＩＳなのか？」

「はあ？あんた何言って――――――」

ハッと何かに気付いたように、表情を変える鈴。

「確かに・・・そうよね。あの機体、ＩＳとは何かが違う。敵側の機体もそうよ。『ＣＢ（クイック・ブースト）』とかいう機能も、あの特殊な防御能力も現段階じゃあ、何処の国も作れてない」

「だよな」

この戦いが終わったら、白に訊いてみる。一夏は今、そう決めた。

（だから、必ず生きて返って来い！！）

一気に間合いを詰め、コジマ粒子を纏ってクリアな黄緑色に輝く『霧雨』を横薙ぎに振るう。しかし、アレサはその攻撃をＣＢを使って後方に急加速し避ける。
俺はグリントの制限を全て解除している。そうでもしなきゃ、とっくに死んでいるだろう。

「白、何故お前は戦う？」

アレサが訊いてくる。それに俺は、左腕に装備したムーンライトで斬り込みながら答える。

「俺は、因縁を断ち切る為に、今戦う！！」

ムーンライトによる突撃を繰り出すが、アレサが同じく左腕に展開したレーザーブレードによって弾かれる。

「逆に訊く！お前だって、何故戦う！？」

「俺はプログラムだ。プログラムは命令された事をただ遂行するだけの人形に過ぎない。たとえ、ジョシュアが元だろうとな」

「命令だろうが何だろうが、お前の好きにはさせねえ！！」

後退してオイガミを展開。乱射する。しかしそれは、全て避けられてしまった。

「感情に任せて戦う。それもいいだろう。しかし、それでは俺は倒せん！」

規格外の出力を誇るアレサのＣＢは、一瞬で俺の目の前までその巨体を運んできた。

「――――――っ！？」

「甘いな」

突然の爆発が、俺を飲み込む。――――――『ＡＡ（アサルトアーマー）』。ＰＡ（プライアルアーマー）を爆発させる、高威力の攻撃だ。

「――――――――！！」

一夏が叫んだようだったが、その音は爆音にかき消された。

「白ぉぉぉぉぉっ！！」

黒煙の所為で、白の姿は確認出来ない。

「・・・存外しぶといようだな、お前は」

黒煙が晴れる。その中から現れたのは――――――

「――――――冷や冷やさせやがって・・・・」

ほとんどダメージを食らっていないホワイト・グリントだった。

「ＡＡをＡＡで相殺するとはな」

「伊達や酔狂でリンクスやってねえよ」

言いながらも周りを確認する。一夏と鈴は――――――よし、無事だな。

「アレサ・・・いや、ジョシュア。もう、終わりにしよう」

俺はそう言って霧雨を格納、左腕だけでなく右腕にもムーンライトを展開する。

「・・・いいだろう。受けて立つ」

ジョシュアもガトリングとコジマキャノンを格納して、左腕のブレードを最大出力で展開する。

そして、それぞれの機体が一気に飛び出す。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！」

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ジョシュアのブレードを右腕のブレードで受け止めた俺は、左腕のブレードでアレサの装甲を貫く。

「終わり・・か・・・。これで・・・いい」

耳元で、いつか聞いた優しい声がした。顔を上げて其処にあるのは、昔のジョシュアの雰囲気を纏った、アレサのアイレンズ。

「ジョシュ・・・ア」

「その力で・・・お前は・・・」

前にも一度聞いた、今も心に残る言葉。

「折れるなよ」

シュゥゥゥン。それを言ってすぐ、アレサは機能を停止した。最後の言葉が、耳に響く。

『その力で・・・お前は・・・折れるなよ』

「・・・・俺は、折れたりしないよ。ジョシュア」

「・・白」

振り向くと、一夏と鈴が近づいて来ていた。

「これで・・・終わったよ」

「そうか。ま、おつか――――――」

俺が言葉を言い切る前に、ハイパーセンサーが警告をしてきた。

――――警告。敵ＩＳの再起動を確認。

「なっ！？」

「一夏、孤島！あの黒い機体、まだ動いてる！！」

片腕を失ってもなお、もう片方の腕で砲撃を行おうとする襲撃者。
俺は飛び出した。
砲口から光が放たれ、俺はそれへと突っ込む。光に飲まれ、敵を切り裂く確かな感触が腕に伝わったのを最後に俺は意識を失った。

「う・・・・・・？」

全身の痛みに呼び起こされ、俺は目を覚ました。
周囲を見回すと、どうやら此処が保健室なんだと分かった。俺は其処のベッドで寝ていた。
ぼんやりとした意識の中で、俺は意識の整理を始めた。

（ええと・・・。一体どうなったんだ？確か、俺の攻撃は当たって――――）

考えていると、再び眠気が迫ってきたので、俺は眠りについた。

・・・・・・・・。

「・・・・・・・・」

ん？何だ？顔の近くに、人の気配を感じるぞ。誰だ？てか、俺どれくらい寝てた？

「一夏・・・・・」

「鈴？」

「っ！？」

声で鈴だと分かって、俺は目を開ける。そうするとビックリ、鼻先三センチの所に、鈴の顔があった。

「・・・・何してんの、お前？」

「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

「お前の声で起きたんだよ。つうか、何でそんなに焦ってんだ？」

「あ、焦ってなんかないわよ！勝手な事言わないでよ、馬鹿！」

お前は何回『馬鹿』って言うんだよ。変なキャラ付けは、こけると痛いぞ。

「そいえば試合、無効だってな」

「まあ、そりゃそうでしょ・・・」

そう言ってベッド脇の椅子に腰掛ける鈴。リンゴでも剥いてくれるかと思ったが、生憎リンゴは無い。

「鈴」

「何よ」

「その、何だ・・・・。悪かったな、色々と」

俺は素直に頭を下げる。何があったにせよ、俺が悪い事をしたのは変わりない。悪い事をしたからには、謝らないでいることは出来ない。

「ま、まあ、あたしもムキになってたし・・・・。もういいわよ」

どうやら許してくれたようだ。親しき仲に礼儀あり。人との繋がりを簡単には失いたくはない。

「そういえば・・・・。小学校の時、酢豚の話したのもこんな夕方だったな」

「えっ――――」

確かそうだ。あの時も夕暮れ時の教室だった。

「正確には『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』だっけ。なあ、あの約束って、何か違う意味があったのか？俺はてっきり、ただ飯を食わせてくれるんだと――――」

「ち、違わない！違わないわよ！？だ、誰かに食べてもらったら料

理って上達するじゃない！？」

いきなりまくし立てられて、俺は少し気圧される。

「お前の酢豚も食べてみたいけどさ、鈴の親父さんの料理、美味いもんなあ。また食べたいぜ」

「あ、その・・・。お店は、しないんだ」

「え？何で？」

「あたしの両親、離婚しちゃったから・・・・」

・・・・え？あんなに仲良さそうだったのに、どういう事だろう。しかし、鈴の酷く沈んだ表情を見る限り、嘘ではないようだ。俺は何を言うべきか、迷った。

「あたしが国に帰ることになったのも、その所為なんだよね」

「そう・・だったのか・・・・」

今にして思えば、あの頃の鈴は、何かを隠そうと無理して明るく振舞ってるように見えた。俺はそれが、妙に気になっていた。

「・・・・なあ、鈴」

「ん？」

「今度、どっか遊びに行くか」

「え！？それって、そのデー――――――」

「一夏さーん、具合はいかがですか？わたくしが介護に――――って、どうしてあなたが！一夏さんが起きるまで抜け駆けはしないと決めたでしょう！？」

ドアが開いて入ってきたのは、セシリアだった。というか、決めたって何を？

と、その後ろから――――――

「そう言うお前も、私に隠れて抜け駆けしようとしたな」

次に入ってきたのは箒だった。

「ぐぬぬぬぬっ・・・。二人とも出てってよ！一夏はあたしの幼馴染なんだから！」

ちょっと待て、鈴。どうすりゃそんなに話が飛ぶんだ？

「それを言ったら私も――――」

「大体、二組のあなたが――――」

おっと、このままじゃ大変な事になりそうだ。――――――って、あれ？

「なあ、千冬姉と白は？」

「そういえば」

「何処行ったんだろ」

「さっきまで私達と一緒に居たのだが――――」

学園の地下五十メートル。そこは、レベル４権限を持つ者しか立ち入る事の出来ない隠された空間だった。
機能停止した二機の襲撃者はすぐさま其処へと運び込まれ、現在、真耶が解析をしている。
そうしていると、ドアが開いた。

「山田君、結果は？」

「あ、織斑先生――――――って、あれ？」

真耶の目は千冬を通り越し、その後ろに居る白髪の少年へと向いた。

「お、織斑先生、何で孤島君が！？此処はレベル４権限を持っていないと――」

「ああ、こいつか。こいつは特別許可を貰っているから問題ない。それに、こいつが居た方が役に立つと思ってな」

「織斑先生の言ったとおりですよ、山田先生。今回の件については、俺も関係してるって言ったら関係してますから」

「そ、そうだったんですか。・・・そ、それより。解析結果の方ですが、やはりどちらも無人機ですね」

データを映し出したディスプレイの青白い光が、三人の顔を酷く冷たいものに見せた。だが三人の表情は鋭い。

「黒い機体に使われていたコアは、登録されていない物でした。それで・・・、孤島君が破壊した機体の方ですが、この機体に使われていたのはコアでもなんでもない、特殊な動力部が使われています」

「・・・やっぱり、そうでしたか」

白の表情が翳る。その顔には、確かな確信があった。

「この機体。アレサは、俺の父さんが開発した物なんです」

「え、それって――――――」

「あまり詳しくは話せませんが、話せる範囲で。まず俺の父さんは、コジマ粒子という特殊な物質を発見、研究していました。アレサはその一環で開発された、ＩＳを超える兵器です」

白の言葉に、真耶は目を見開いた。当然だ、ＩＳは現代兵器を上回る最強の兵器と言われているのだ。それを超える兵器が、今まで表に出ずに存在していたなんて、誰が信じられようか。

「信じられないかもしれませんが、これは事実です。それは、あの戦闘で十分分かったでしょう？」

あの戦闘。ホワイト・グリントとアレサによる、ＩＳ同士のものなど比ではない、常識はずれの戦闘。

「今のところ話せるのは此処までです。他の事は、『もうすぐ』分かりますよ」

それだけ言うと、白は部屋を出て行った。

後に残されたのは、未だに話が飲み込めない真耶。そして、教師の顔ではなく、戦士のそれに近いものを浮かべた、千冬だった。

――――――しかし、今回の事態はこれから始まる大きな戦いの幕開けでしかなかった。

ｍｉｓｓｉｏｎ１５　白き閃光と白き悪魔（後書き）

「皆さんこんにちはー（こんばんはかもしれないけど）今回も始まりました、『鴉の雑談』でーす」

「で、今回は何をするんだ？またゲストでも呼ぶのか？」

「さすが、鋭いねえ。今回お呼びしたゲストはこちら！セレン・ヘイズさんでーす（フィオナみたいにちゃん付けしたら殺されそうだからあえて『さん』）」

「ほう、此処が噂の・・・と、紹介が遅れた。セレン・ヘイズだ。白のオペレーターを担当している。これ以上はネタばれに成りかねないから言わないでおく」

「せ、せ、セレン！？な、なな、何でお前が！？」

「ふん。どこかの馬鹿が何か妙な事をやらかしていないか見に来てやったのだ。感謝しろ」

「・・聞いたか作者。これが優しさなんだって。俺は生まれて始めて知ったよ」

「まあ、そんな事はどうでもいい。おい作者とやら、コイツを少し借りていくぞ。色々とやらねばいかん事があってな。また会おう」

「え、ちょっ、ま、待ってくれよ！お、おい、作者！助けてくれ！て、あーーーー」

「・・・・いやー、行っちゃたな、司会。これ以上やる事も無いし、ここらで切り上げるか。それじゃあ皆さん、さようならー」

――――次回、いよいよＯＲＣＡが動き出す！？お楽しみに！

ｍｉｓｓｉｏｎ１６　山猫達の集会（前書き）

ＯＲＣＡの面子って、こんなだよね？（結構想像で書いた）
まあ、頑張って着いて来て下さい。

ｍｉｓｓｉｏｎ１６　山猫達の集会

此処は、太平洋沖にあるＯＲＣＡ旅団本部『ビックボックス』、その会議室。
薄暗い部屋の中で、ディスプレイの光が、此処に集まっている俺を含めた十人の顔を照らしている。
十人。ＯＲＣＡ旅団の全メンバーが、此処に集まっている。俺を抜いた全員が全員女だがもう慣れた。

「全員揃ったようだし、始めよう」

ＯＲＣＡ旅団団長マクシミリアン・テルミドールが告げる。

「この間、ＩＳ学園が『ネクスト』によって襲撃されたのは全員知っているな？」

「ああ。いよいよ企業連と幽霊が動き出したか」

テルミドールの声に答えたのは、副団長メルツェルだ。その隣では、口をマスクで塞がれて喋れないヴァオーが、何か騒いでいる。・・・こいつはただでさえ声がデカイからこうでもしなきゃ五月蝿くて仕方ない。

「おそらくな。さらに、この間の襲撃の際にネクストを各国のＩＳ関係者に目撃されてしまったようだ。そこでだ」

俺が言葉を続ける。

「ネクストを、全世界に見せ付けようってか？」

「その通りだ」

俺も、アレサが現れた事で覚悟はしていた。だが、それは本当に大丈夫なのか？ネクストはＩＳを超越した最強の兵器だぞ？そんなモノが存在するって知ったら、世界は混乱するに決まってる。そして何より――――

「ラインアークや、ＩＳ学園が危険だぞ？それどころか日本自体が危ういかもしれない。それを分かった上で、言ってるんだな？」

「・・・そうだ。だがな白、その時は簡単だ、我々が守ればいいだけの話さ。それに世界・・というか世界のお偉いさん達は『例の一軒』でネクストの恐ろしさを嫌というほど知っている筈だぞ？なあ、そうさせた張本人」

「・・・・・・・・・」

テルミドールの言っている『例の一軒』というのは二年前、ラインアークが結成されて数ヵ月後の事だった。
俺は極秘でＩＳ委員会にネクストを発表したが相手にされず、発表したという事実さえ闇に葬られた。
それから数日後の事だった。何処かの馬鹿な組織がラインアーク、もといネクストに喧嘩を売ってきたのだ。相手の戦力はＩＳ四機。
まあ、俺が一人で全部片付けたんだけど。
確かその時の一人がオールドキングだったな。

「・・・・・了解。ほんと、あんたには適わないよ団長」

「ふっ、ＯＲＣＡ『最強』が何を言ってるんだ」

最強。それを聞いて、俺は苦笑いをする。最強と言っても、ネクストに乗った時だけだし。生身じゃこいつらに勝てる気がしない。

「まあ、いい。それでは作戦を説明する。我々はこれから、世界中の武装勢力や違法研究施設に攻撃を仕掛ける。そして、その映像を全世界に流す。分担は、メルツェルとヴァオーが企業連の違法研究所を襲撃、其処で開発されているであろうＡＦ『ジェット』の奪取だ」

「了解。不足は無かろう、ヴァオー」

「（悪くないぜ、メルツェーールッ）！」

二人はそれに答えると、部屋を出て行った。

「次に真改とハリ。お前達は東シナ海で確認されたＡＦスティグロを撃破してくれ。おそらく、何処かの武装勢力が企業連か幽霊どもから買ったのだろう。まったく、迷惑極まりない奴等だ」

「・・・分かった」

「真改さん、もう少し喋ろう」

そう言って更に二人、部屋から出て行く。

「銀翁、ジュリアス、オールドキング。お前達は幽霊達の研究所を一つ潰してきてくれ。ああ、人は殺すなよ、オールドキング」

「所詮大量破壊だ。刺激的に行こうぜ」

「安心しろ、テルミドール。こいつは、わしがきっちり見張っておくからな」

「それでは行って来る」

上から順にオールドキング、銀翁、ジュリアスだ。しかしオールドキング、お前は若干戦闘狂だろ。
そんな事を考えているうちに、三人は行ってしまった。

「ところでセレン。・・・いや、今は霞と呼んだ方がいいか？」

「ふん。聞かなくても分かっているのだろう。今の私はリンクスなのだから」

セレンの名前は、偽名だ。それを言ったらＯＲＣＡのほとんどが偽名なんだけどな。
このセレン、本名は霞スミカ――――スミカを漢字で書くと澄香――――だ。

「そうだったな。それで、シリエジオは出せるか？」

「まだ整備に時間がかかりそうだ。私は今回出れん」

「そうか。なら白。お前には一人で作戦に当たってくれ。お前にもＡＦを破壊してきてもらう。目標はスピリット・オブ・マザーウィル。相手は全長二キロはある大型の要塞型で火力は相当なものだ。なお、今回はＶＯＢを使用して一気にけりをつけろ。霞は白のオペレーターだ」

「はあ。あいつら何処でそんなデカブツ造ってたんだよ」

「ほら行くぞ、白」

「ちょっと待て白」

「あー、何だよ団長」

「企業連か幽霊どもが『あれ』を所持しているかもしれないからといって、無茶はするなよ」

「・・・・ああ」

そう答えて、俺と霞は部屋を出た。
今更だが、俺は前にＯＲＣＡはＩＳ部隊だって言ったな。だが本当のところは『元ＩＳ操縦者』の部隊だ。昔、俺が各国のＩＳ部隊を回って掻き集めた精鋭で構成されている。まあ、団長とオールドキング、それに霞は例外だけど。
故にその機体もＩＳではない。俺が孤島のノートを元に作り上げたネクストだ。オリジナルのコジマリアクター程の出力は出せないが、ＩＳとは比べ物にならないほどの性能を誇る。世界に喧嘩売るぐらい造作ない。

「・・・・行ったか」

白と霞が出て行ったのを確認して、テルミドールは椅子に背を預ける。

ついにやって来たのだ、この時が。世界を救うため、動き出す日が。
テルミドールがＯＲＣＡによって、企業連の呪縛から解き放たれて早一年が経つ。

「私も演説の準備をしないとな」

テルミドールはそう言って立ち上がる。

「最悪の反動勢力ＯＲＣＡ旅団のお披露目だ。皆のもの、派手にいこう」

誰に言うでもない言葉が、暗い部屋にただ木霊した。

ｍｉｓｓｉｏｎ１６　山猫達の集会（後書き）

「皆さんこんにちはー。どうだったでしょう今回。投稿がだいぶ遅れてしまってすみません」

「前置きはいいからさっさと始めて終わらせようぜ」

「そうだねー。んじゃ始めますか。今回はゲストを呼ばずに我々だけでお送りしまーす」

「だいぶ適当だな」

「何を言うか！あれって結構文章考えんの面倒なんだよ！」

「じゃあ最初から呼ぶなよ！」

「それじゃつまらないだろ！いつもいつも野郎が二人話してるだけで、華も何も無いなんてむさ苦しいだけだ！」

「・・・はあ。もういいや。さっさと進めようぜ」

「今回はこの小説について話そうかね」

「この小説って、投稿が安定しないわ、駄文だわ、作者がダメ人間だわと良い所無しのこの小説か？」

「ぐはっ！・・白君、君酷い事言うね・・。仮にも主人公なのに」

「仮にもってなんだ仮にもって。俺はれっきとしたオリ主だ」

「そういやそうだった」

「てめえ、仮にも作者だろ」

「なーにー！？誰が仮にもだ誰が！」

「お前だよ、お・ま・え！」

「うるさーい！」

――――――数分後

「・・・こんな不毛な戦い、もうやめよう」

「・・・・だな」

「それじゃあ皆さん」

「さようならー」

ｍｉｓｓｉｏｎ１７　鴉は何を守る（前書き）

前回の『鴉の雑談』裏話。あの数分間です。

白「この下手くそ作者！」

作「うるせえハーレム野郎！」

ｍｉｓｓｉｏｎ１７　鴉は何を守る

俺にラインアークから通信が入ったのは、作戦開始の二時間前だった。

「こちらレイヴン。何の用だ？」

『フィオナです、レイヴン』

「何だフィオナか」

どうやら通信を入れてきたのはフィオナらしい。でも、何でこのタイミングで？

『レイヴン、今回の作戦ですが「ちょっと待った」はい？』

「敬語じゃなくていい。前にも言っただろ、俺にはタメ口でいいって。な？」

『え、でも・・・』

「いいから」

『・・・はい』

俺が少し語尾を強くして言うと、フィオナは引き下がった。

『それで、今回の作戦。どれだけ重要な事か、分かってるよね？』

「ああ、もちろんだ。失敗でもしたら、お前達が危険な目に遭う。それに――――」

それに、この作戦に失敗したら孤島の、父さんの意志は実現出来なくなる。それだけは避けなければいけない。

世界は、ＩＳの登場によって各国が水面下で睨み合いをしている状態だ。

父さんの意志は、こんな世界を一つにしようという大それたものだ。世界がお互いの国の垣根を越え、手を結ぶ。そんな世界を、父さんは昔から創りたいと言っていた。

ネクストは、その為に作られたのだから・・・・。

「しっかし皮肉なもんだな。世界を一つにする力がこんな『暴力』だなんてな」

『違うわ、白。ネクストは――――ホワイト・グリントはただの『暴力』じゃない。世界を一つにする為の『希望』よ』

「・・・『希望』、か」

こいつは、グリントはそんなたいそうなもんじゃない。いわば世界の『抑止力』だ。そして、父さんの作った他の兵器だって――――――

「・・・・所詮は、人殺しの兵器じゃないか。母さんだって、その所為で・・・・」

『え、今なんて』

俺の呟きはフィオナには聞こえなかったらしい。俺は適当に誤魔化しておく。

「いや、何でもない。とにかく、この作戦は失敗できない・・・じゃなくて失敗しない。心配しなくても、成功させるさ」

『そうね。貴方を信じてる。無事に戻ってきてね』

「おう」

俺が応えると通信は切れた。

「・・・守れないのはもう沢山だからな」

父さんや母さんは守れなかった。でも、今度こそ守ってみせる、こいつらを、俺の大切な人達を。

「もう嫌なんだ。俺の所為で、誰かが死ぬのは」

たとえ『奴』が姿を現したとしても、俺はこの作戦を成功させる。

〜一時間後〜

「・・・・で、何で俺を呼んだんだ？」

今俺が居るのはビックボックスのエントランス、その一角である。

何故俺が此処に居るかと言うと……。

「来たか、白。早速だが、茶を淹れてくれ」

「・・・それだけの為に俺を呼んだのか、団長？それにお前らも」
大きめの丸テーブルを囲むようにして配置されているソファには、それぞれＯＲＣＡのメンバーが腰掛けていた。
「別にいいだろ。ああ、茶菓子もな」
「オールドキングまで・・・。つうか、今は作戦開始一時間前だぞ。こんな事してていいのか？」
「こういう時だからこそ、リラックスしなければいけないんじゃないか。それと、私はようかんが食べたい」
「霞・・・・。そりゃそうだけど」
「私は大福を頼む」
「俺もメルツェルと同じでいいぜぇぇぇっ！！」
「お前らなぁ。つうかヴァオーうるせえよ。誰かマスク持って来い」
ヴァオーには、こいつ本当に女か？て思える時がある。まあ、ＡＣｆａの性格がそのまま影響してるんだろうな（性別は一部を除いて違うけど）、皆。つうかこいつらがこの世界に居るのは多分、俺が原因だ。俺がこの世界に転生してきたのが。
「おい、白。早くしてくれ」
「はいはい。今やりますよ」

ヤケクソ気味に言って、手近にあった棚から急須と魔法瓶、それから人数分の湯飲みと茶菓子を出す。
・・・何でもあるな、此処。
俺がそれを持っていくと、途端に始まるガールズトーク。こればっかしは俺は加われないので、少し離れた反対側のソファに横になる。

（・・・・・・・・・・）

一人物思いにふける。

（この世界は、楽しい）

ＯＲＣＡの奴等や、ＩＳ学園の奴等と居ると自然とそう思える。
だが、良いのだろうか？
俺が、俺みたいな人殺しがこの世界を楽しんで。
良い訳が無い。
だからこれ以上は望まない。
いや、望んではいけない。
もしかしたら、こいつらを殺してしまうかもしれない。
だから、これ以上は――――――

「――――い。おい、白！！」

「え、あ、ああ、何だ？」

「まったく。人の話はちゃんと聞け」

声を掛けてきたのは霞だった。

「今回使用するＶＯＢについての資料が届いたぞ」

「おお、サンキュ」

霞から紙の束を受け取り、一枚ずつ目を通す。何でも、今回のＶＯＢは前回の物に改良を加えたそうなのだ。しかし、その詳しい内容を作戦直前に伝えるとはどうかしてる。俺はモルモットじゃねえんだからちゃんと仕事しろっての。

「・・・ふむ。機動性、使用時間共に十分だ。これなら行ける」

「いいか、白。テルミドールが言ったとおり、自分を見失うなよ。自分自身がやるべき事をやれ。いいな？」

「当たり前だ。じゃなきゃ格好がつかないからな」

俺は笑ってみせる。

「ふん。成功しようがしなかろうが、元から格好などつかんだろう」

「いやー、さらりと酷いこと言うね」

「ふん。それぐらいがちょうどいいんじゃないのか？」

「俺はマゾじゃねえ」

「ふふ、そうだな」

霞が笑う。俺も、それにつられて笑う。

「おーおー。良い感じだなぁお二人さん」

「え。うわっ！」

そう言って霞に後ろから掴みかかって来たのはオールドキングだ。

「いちゃいちゃするのは構わんが、今は作戦前だぞ？」

「い、いちゃ！？て、てて、テルミドールまで、何を言うんだ！！わ、私は別にそんな――――」

そう言い合うＯＲＣＡの面子を見ていると、自然と顔が緩む。

「白！何を笑っているんだ、助けてくれ！！」

「ははは。がんばれ霞」

「お前ぇぇっ。後で覚えていろっ！」

こうしていると、本当に楽しい。

これ以上が望めないなら、せめてこれだけでも守りたい、いや――――守る。守ってみせる。

――――そうして、ＯＲＣＡの戦いは始まった。

ｍｉｓｓｉｏｎ１７　鴉は何を守る（後書き）

作「どうも皆さんこんにちは～・・・」

白「うわっ。いつもの元気はどうした？」

作「はぁ。俺はこの四日間で痛いほど自分のセンスと甲斐性の無さを実感したよ・・・」

白「こりゃ重症だな。んじゃ、俺だけでやるか。えー本日のゲストは今回登場してないけど、箒でーす」

箒「宜しく頼む」

白「一夏と違って、反応薄いな」

箒「そうか。ところで白。そこに転がってるボロ雑巾の様なものは何だ？」

白「ああこれか。なんつうか、今は放って置いてやってくれ」

箒「そうか、分かった。で、一体何をするんだ？」

白「さあな。実際の事言うと、このコーナーってこいつがぶっつけ本番で書いてるからなあ。本人がこれじゃあ何も出来ないな。ま、質問でもするか」

箒「私が答えられる範囲で答えよう」

白「そんじゃまあ、単刀直入に聞くけど一夏に告る予定は？」

箒「な、ななな、何を言うんだいきなりっ！！」

白「えー、いいじゃんかよー。さっさとしないと他の奴に取られちまうぞ？良いのか？」

箒「い、良い訳ないだろ！」

白「だったら早く気持ちを伝えようぜ。俺も応援するからよ」

箒「そ、そうか。有難う」

白「まあ、頑張れよ。と、ここらで時間か。それじゃあ皆さん、さようならー」

ｍｉｓｓｉｏｎ１８　宣戦布告（前書き）

白の呟き

「あー。武器に拳が欲しいー。クレスト辺りに頼んだら作ってくれるかな？」

・・・・お前、研究部の統括責任者だろ？自分で作れよ。

mission18　宣戦布告

side　一夏

六月頭、日曜日。
俺は学園の外――――というか五反田の家に来ていた。
ちなみに五反田は俺の中学からの友達で、入学式当日に会ってからというものやたらと馬が合って、三年間鈴と揃って同じクラスだった。それもあって、昔は三人でよくつるんでいた。――――以上
五反田の説明終了。

「どうした一夏？」

「いや、何でもない」

「？まあいいや。それで、どうなんだよ？」

「どうって、何が？」

俺は意味がよく分からず聞き返す。

「何がじゃねえよ。女の園の話だよ。良い思いしてんだろ？」

いきなり何を言い出すかと思ったらその話か。
良い思いなんてしてねえっつうの。何回説明すれば納得すんだよ、こいつは。

「嘘言え。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえか。何そのヘヴン。招待券とかねえの？」

ねえよ馬鹿。てかあれの何処がヘヴンなんだよ。女子だらけで気まずいだけだわ。

「つうか、アレだ。鈴が転校してきてくれて助かったよ。話し相手本当に少なかったからなあ」

「ああ、鈴か。鈴ねえ・・・」

うん？何だ？何でこいつはにやにやとにこにこが合わさったような顔で見てるんだ？おかしな奴。

と、そこに、

「ちょっとお兄！さっきから呼んでるんだから早く来――――――」

部屋に入って来たのは五反田の妹、五反田蘭だった。歳は一個下で今は中三。有名私立女子校に通う優等生だ。うん、兄とは違うな。しかし女子というのは自分の家だとこうまでラフな格好なのか。弾と同じ赤っぽい髪を、後ろでクリップに挟んだだけの状態で、その格好もショートパンツにタンクトップという機能性重視の涼しげなものだ。

「い、一夏さんっ！？」

「おう。お邪魔してる」

あたふたと何故か混乱している蘭に、弾が声を掛けた。

「それより蘭。呼んでたって、何かあったのか？」

その言葉で我に返った蘭は、焦りを隠せないといった状態で言葉を発した。

「し、下！早く下に来てください、大変な事になってるんです！」

蘭の言葉が即座に理解出来なかった俺と弾は、とりあえず蘭に着いて行く事にした。

ついでに言っておくと、弾の家は食堂をやっている。

「あ、やっと来た。早くこれ見なさい」

俺達が食堂に入ると、五反田食堂の自称看板娘、五反田蓮さんがテレビを見るよう促してきた。

テレビの画面に映っていたのは、二十代前半ぐらいの女性だった。整った顔立ち、着ているスーツが似合うスレンダーな体。誰が見ても美人だと言うであろうその女性はしかし、ただならぬ雰囲気を持っていた。殺気とは違う。だが、敵意には近い。個人に向けられたものじゃない。もっと大きな、この世界に対しての敵意。その雰囲気に、食堂中の誰もが息を呑む。

『・・・・そろそろか。それでは始めよう』

画面の女性が言う。少し低めのトーンのその声に、冷たいものを感じる。

『私の名はマクシミリアン・テルミドール。この放送は全世界で流れている。用件を説明する前に、まずはこの映像を見てくれ』

女性――――――マクシミリアン・テルミドールと名乗ったそいつが言うと、画面が変わって、三つの映像が流れる。

「何だ・・・これ」

隣で弾が呟く。

映像に映し出されていたのは、戦闘だった。そしてそれには、記憶にある『あの機体』を連想させるものが映っていた。

一番左のものは海上・・だろうか。其処で二機の機体が、前方に巨大なブレードを付けた全長十メートルはあるであろう謎の機体と交戦していた。

赤い機体が離れてライフルによる中距離支援をし、もう一機が距離を詰めてのブレードによる斬撃でダメージを与えている。

・・・・一瞬。一瞬だけだが、この近接機体に憧れてしまった。

次にその横――中心の映像を見る。それには、これまた異形の機体が映っていた。片方の機体は前の映像よりゴツイニ脚だが、もう一機は先日の襲撃者以上に異形だった。

何処がかって？脚部だ。脚が戦車のキャタピラと同じなのだ。サイズがＩＳと同じぐらいだから、人が乗っているのかもしれないが、想像できない。

だがその考えは的中してしまった。

『はっはーーっ！！悪くないぜ、お前等ーーーっ！！』

喋ったのだ。タンク型が。はっきり言って、それはとても目を疑うものだった。

そして、ニ脚型も声を発した。

『・・・五月蝿いぞ、ヴァオー』

『何言ってるんだメルツェーールッ！こんな楽しい任務久々なんだから楽し――――』

ピッ。そんな音がして音が途切れる。見ると中心の映像の端に、消音の文字が光っていた。

『すまない。気にしないでくれ』

テルミドールがそう言って、また黙る。

とりあえず俺は最後の右側の映像も見る事にした。その映像には、三機の機体が映っていた。一機は薄緑のこれまたゴツイ機体。背中の円状の武装らしき物が、神々しさをかもし出している。もう一機の機体はゴツイ機体とは違う濃い目の緑色で、曲線の多いその機体はとてもスレンダーだった。そして最後の一機。これがまた凄いものだった。その細い機体からは想像出来ない大火力の武装を施されていた。

と、其処で映像が元に戻り、テルミドールが映し出された。

『見て頂けただろうか。この映像はリアルタイムのモノで、合成でも何でもない。事実だ。今現在起きている事実。世界に害を成すであろう武装勢力や研究所。我々は今回、そういったものを攻撃した。映像に映っていたものを考えれば、信じられると思うがね』

映像に映っていたもの、と言うとあの巨大な機体等の事だろう。俺程度の人間にだって分かる。あれは、絶対に公式の代物じゃない。

『ふっ。それではここら辺で本題といこう』

何だって!?まだ何かあるのかよ!

『我々は『ＯＲＣＡ旅団』。ＩＳを超えた最強の兵器、『ＡＣネクスト（アーマードコアネクスト）』を所有するラインアークの特殊

戦闘部隊だ』

その言葉に、すぐには思考が着いて行かなかった。理解していくにつれて、よく知る『アイツ』の顔が、脳裏に浮かんだ。
ラインアーク。それは聞き覚えのある名だった。俺の幼馴染、孤島白が所属する企業の名前だ。
そして、テルミドールの言葉を思い出す。
ＩＳを超えた最強の兵器『ＡＣ（アーマードコアネクスト）』。実に信じがたい話だ。何も知らない人が聞いたらそう言うだろう。そう、何も知らない人が聞いたら。
だが、俺はその言葉に覚えがあった。

『ＩＳでネクストの相手をしたら確実に死ぬ』

友にそう言われ、さらにその事を目の前で証明された。だからこそ、俺はこの言葉を信じる。
そんな事を考えていると、テルミドールが言葉を紡いだ。

『・・・そろそろあいつも初めただろう。それでは、皆さんに我々の最後の手札を、これからお見せしよう。我々の“切り札（ジョーカー）”を』

また画面が変わる。其処に映し出されていたのは――――――

「そんな・・・マジかよ・・・」

其処に映し出されていたのは、全長二ｋｍはあるであろう巨大な要塞らしきもので戦う、友の機体であった。
白い装甲、驚異的な機動力、部分的に含まれる変形機構。その特徴全てが、友の機体に当てはまっていた。
それが、大量の敵と一人で戦っている。敵の一機一機がＩＳには劣

るが、相当な火力と機動性を持っている。大量のそれを、白い機体は一人で相手をしているのだ。

（だけど何で！？何であいつが、白が戦ってるんだ！！）

映像が戻る。

『これが我々の“切り札”だ』

テルミドールはそう言い放つ。

俺は、信じるしかなかった。この目で実際にネクスト同士の戦闘を見て、今の映像を見た。だからこそ分かる。これは悪戯でも何でもない。事実なのだと。

『そして我々の切り札は今、ＩＳ学園に通っている』

すると、画面に白の情報が映し出されていく。顔写真から学年まで、ＩＳ学園での情報が表示された。

「おい、一夏！お前、こいつの事知ってるのか！？」

「知ってるも何も、クラスメイトで幼馴染だ」

「はあっ！？なんだそりゃ！」

弾が驚く。無理もないか。

『ああ、誘拐なんて考えない事だ。逆に死ぬかもしれないからな。まあ、それはいい。我々の目的は戦争などではない。ましてや金でもな。我々の目的。それは――――――』

一拍置いて、言う。

『――――世界の、統合だ』

「何言ってやがんだ、こいつ？」

その声に振り向くと、五反田食堂の大将にして一家の頂点、五反田厳さんがいた。今日も筋肉隆々の腕が健康的に焼けている。

「じいちゃんか。さあな。何かの悪戯じゃないのか」

厳さんの言葉に弾が答える。　だがその間もテルミドールの言葉は止まらない。

『各国が水面下で睨み合っているこの世界を、我々は国家同士が垣根を越えて一つになれる世界を創る。それが我々の目的だ。邪魔をしても構わない。だが、その時は我々は全力で反抗勢力を潰す。これは脅しではない。本気だ。と、ここらで時間らしい。それでは、世界の返答を楽しみにしているよ』

その言葉を最後に、映像は途切れた。

ｍｉｓｓｉｏｎ１８　宣戦布告（後書き）

作「・・・・・・・・」

白「・・・・・・・・」

作「・・・・・・・・はあ～～～～～」

白「どうしたんだ、溜息なんかついて？」

作「いや～なんかさ。考えたとおりにこの話を書けなくてさ。良いアイデアが浮かんだってもう手遅れだったりするし」

白「何だそんな事で悩んでたのか」

？？？「思い通りにならないから、良いんじゃないか？」

作「はっ！」

白「その声はっ！」

千冬「やれやれ。何を悩んでいるのかと思えば。そんな事か」

白「千冬さん、何故此処に！？」

作「あ、説明忘れてた。今日のゲストは千冬さんでーす」

千冬「よろしく頼む」

白「そうだったのか・・・」

千冬「それよりお前」

作「は、はいっ！！何でしょうか！？」

千冬「思い通りにならないって悩んでいたがな、世の中思い通りになる事なんて滅多に無いぞ」

作「はっ！」

千冬「だからこそ、そんな事で悩む必要はない。むしろ何もかも思い通りになったらつまらんだろう」

作「そう、ですよね。世の中、思い通りにならないから面白いんですよね」

千冬「そう言う事だ。忘れるなよ若造」

作「はい！」

千冬「お前もだぞ、白」

白「えっ！？」

千冬「暴れるのは構わんが、自分のやるべき事だけは忘れるな」

白「え、は、はいっ！」

千冬「ふっ。それでいい。されじゃあ私はここらで失礼する」

作・白「ありがとうございましたーーっ！！」

――――――――――

作「いやー実に良いお言葉を貰った」

白「そうだな」

作「と、そろそろ時間だ」

白「それじゃあ皆さん」

作・白「さようならー」

mission19　もう一人のレイヴン（前書き）

いよいよあの人が出ます。

ｍｉｓｓｉｏｎ１９　もう一人のレイヴン

ｓｉｄｅレイヴン

「よし。この砲台で最後だな」

無人ＡＣと多くの砲台を潰した俺は、最後のミサイル発射口に照準を合わせていた。
何故砲台を攻撃しているかって？このマザーウィルは武装のダメージが本体に伝播しやすいという特徴を持っているからだ。これならわざわざ内部に侵入して破壊する必要も無い。
だが俺は引き金を引く前に、マザーウィルの管制室に通信を入れた。

「こちらレイヴンだ。お前達に勝ち目は無い。速やかに投降してくれ」

出来るならば人は絶対に殺したくない。殺したら最後、俺は一生後悔する事になる。それだけは絶対に嫌だ。二度と、この手を血で染めたくない。これ以上誰かを、悲しませたくない。
それに、生かしておけば企業連や幽霊の情報を手に入れられるかもしれない。あわよくば奴の――――――『粉砕者』の情報も。

「繰り返す。速やかに投降しろ。そうすれば命は奪わない。まあ、拷問はするかもしれないけどな」

すると、マザーウィルから通信が入った。

『こちらスピリット・オブ・マザーウィルの艦長のような者だ。要請を受諾しよう。我々は武装解除し、直ちに投降――――――』

――――上空に高エネルギー反応を確認。回避を推奨。
突如、俺の頭に機械音声が流れる。それを聞いて、体が反射的回避行動を取ろうとした。

（いや、此処で避けたら間違いなくマザーウィルは崩壊する。そうしたら重要な情報が入手出来なくなる。ああ、もう、くそったれ！！）

両手に持っていたライフルを粒子化し格納。ミサイル発射口の上に陣取った俺は、上方に最大出力でＰＡを展開する。

「くそがーーーっ！！」

次の瞬間、高出力のビームが降って来る。ＰＡが減衰していくのが分かる。各種センサーからのアラームが絶えず鳴り響く。

（これは・・・さすがに拙いか。だけど・・・頼む。もってくれ、グリント！！）

やっとの事でビームの掃射が止む。

「何とか・・・助けられた・・・」

が、この油断が甘かった。敵はもう、すぐ其処に居たのだから。

「こいつをぶっ放した奴は何処だ？この短時間で逃げられるはずが――――」

俺が言いかけたその時、長い間聞いていなかった戦友の声が、耳に

響いた。

『・・・甘いな、白。そんなだからお前は何も守れないんだ』

「なっ――――――」

気付いたがもう遅い。振り向いて見えたのは、発射口を両断する真紅の機体だった。

頭の中には、まだ通信を切断していなかったマザーウィル内の喧騒が響いていた。

『総員地上装備！！』

『総員退避！！マザーウィルが崩壊するぞーっ！！』

家族の名を叫ぶ者。故郷の名を叫ぶ者。色々な叫びが、生々しく頭に響いた。

と、その中に叫びとは別の声が聞こえた。

『おい白！何をぼさっとしている！さっさと離脱しろ、巻き込まれるぞ！！』

「え、あ、ああ」

俺はＯＢを起動し、その場から離脱する。

十秒足らずでマザーウィルから十ｋｍ以上離れた俺は、何も無い荒野に降り立った。

「・・・また、守れなかった」

もう二度と、誰かを助けられないなんて御免だ。そう思ってたのに。

「俺は、俺はぁ・・・」

すると、視界の隅に紅い影が映った。

『ナインボール・セラフ』。それがその機体の名だ。父さんが作り上げた兵器の一つ。その開発目的はグリントと同じ、世界の抑止力。元は変形機構を付けるつもりだったが、大掛かりな変形であった為に有人機じゃ無理だと言う事で廃止になった。

「・・・・どうしてだ・・・」

『・・・・・・』

セラフは答えない。

「どうしてだって聞いてるんだ・・・。『ジナイーダ』ァァァァァッ！！」

レーザーブレード『月光』を展開して突撃。それを横薙ぎに振るうが紙一重でかわされる。

「何で・・・どうして彼等を殺した！どうして無抵抗の人間を殺したんだ、ジナイーダ！」

左手に月光を展開したまま、右手に『霧雨』を展開し叩きつけるように振り下ろす。ジナイーダはそれを、両手から出したレーザーブレードを交差させて受け止める。

『相変わらず甘い男だな、お前は』

「何っ！？」

さっきまで沈黙を押し通していたジナイーダが口を開いた。

『相手が何者であろうと助けようとする。それに今だって、その気になれば私を殺せた。違うか？』

「っ！」

『其処で動きが止まる辺り、やっぱりお前は甘いな！』

セラフの背面に装着された大型ブースターから自立行動兵器が射出され、容赦なく俺に弾雨を浴びせる。この近距離じゃあＰＡも意味が無い。

「くそっ！」

俺は咄嗟にセラフを蹴り飛ばし、距離を開く。それと同時にセット登録してあった武装を展開する。

背部リニア、腕部グレネード、片手持ちマシンガン、肩部フレア。

それらの武装が左右に一つずつ展開され、その全ての銃口がジナイーダを照準していた。

『何故、引き金を引かなかった？』

「ここでお前を殺したら、俺は一生後悔する。それだけは嫌なんだよ」

『・・・・やはりお前はあいつとは、『レイヴン』とは違うのか』

「？何か言ったか？」

『いや。ただお前は、馬鹿でお人好しで甘い男だと。そう言ったんだ』

「んなっ！！お前なあ『私はそろそろ引くとしよう』あ、待て！！」

『またいずれ会うことになるだろう。続きはその時だ。それまで死ぬなよ』

ジナイーダがそう言うと、セラフが消えた。レーダーにも映っていない。

これはおそらくセラフの能力の一つ、『ステルス』だろう。肉眼はおろか、どんなセンサーにも絶対引っ掛からない優れものだ。まあ、今の俺にとっちゃ迷惑極まりないがな。

「長居してても意味無いし、俺も戻るか」

俺はグリントのＯＢを起動する。しかし、今回は距離が距離なので戦闘モードではなく巡航モードで起動する。

――――――白が去った後には、とてつもなく静かな静寂だけが残っていた。

ｓｉｄｅ白

任務から戻った俺は、夕暮れ時の赤く光る太陽を背にＩＳ学園への帰路に着いていた。

（はあ、疲れた。今日は早く帰って休もう）

そんな事を考えていると携帯が鳴った。

「メール？こんな時に誰だ」

そしてメールを開いた俺は驚愕した。

メールの内容はと言うと、

『やっほー！白君久しぶりー。元気にしてた？束さんは元気いっぱいだよー！それでね。今回の用件なんだけど、明日辺り会えないかな？場所は後で伝えるからねー。それじゃあ明日会えるのを楽しみにしてるよー！　ｂｙ君の愛しい束さん』

・・・いや、別に愛しく無いし。

俺が驚いた理由も分かっただろう？現在行方不明で各国が血眼になって探しているＩＳの開発者、篠ノ之束本人が送ってきたのだから。

つうかこのメールを見る限り、俺に拒否権は無いらしい。面倒な話だ。

「それにしても明日って、えらい急だな。授業どうすっかな」

ま、適当に言いくるめて休むか。後で補修受ければ問題無いだろうし。

俺はこれ以上考えても仕方ないと思い、また歩き出した。

この先の事なんか考えずに――――――

ｍｉｓｓｉｏｎ１９　もう一人のレイヴン（後書き）

作「やあ、こんなにも早く会うとは思ってもいなかった作者です」

白「同じく白です」

作「いやー。まさかこんなに早く書き終えられるとは思ってなかったよ」

白「いったい何があった？」

作「この作品を楽しんでくれてる人が居るんだと、改めて思い知らされただけだよ」

白「・・・そうか。それは良かったな」

作「ほんとだよね。どんな作品であろうと楽しむ人は必ず居る。その事に気付けたのは良かったよ」

白「その調子で頑張れや」

作「ああ、もちろんさ。頑張って、君が苦労出来るようにするよ」

白「いや、そこは『君が楽できるようにする』だろ」

作「いやいや。それじゃつまらないでしょ。君にはもっと苦労して貰わなきゃ」

白「くそっ。こんな奴を持ち上げた俺が馬鹿だった」

作「はっはっはっは。まあ頑張れよ主人公。と、時間だな」

白「それじゃあ皆さん」

作・白「さようならー」

・・・・これ以外の挨拶も考えたいな。

――――――次回、いよいよ束さん登場！あの二人も登場（予定）！

ｍｉｓｓｉｏｎ２０　動き出す世界（前書き）

女の子視点の文章って、書くの辛い。

ｍｉｓｓｉｏｎ２０　動き出す世界

ｓｉｄｅ一夏

「ただいま」

寮の自分の部屋に帰ってきた俺は、同居人に声を掛けた。
篠ノ之箒。小さい頃からの知り合い――――――つまり幼馴染だ。

「一夏。昼間の“あれ”、お前も見たか？」

“あれ”とはおそらく、ＯＲＣＡ旅団とか言うやつ等の放送だろう。

「ああ。しっかし驚いたよな。白があんな事してたなんて」

「私もだ。真意の程はあいつが帰って来てから訊くとしよう」

「そうだな」

白をどんな風に質問攻めするか考えながらベッドに飛び込んだ俺は、ふと思った。
あいつは、白はずっと戦い続けていたんだ。この学園に来る前からずっと。
きっとそれは、誰かを守る為にそうしていたんだと。たぶん、俺も白に守られていた。
誰かを守る。それは俺の目標だ。千冬姉に守られて、白に守られて。
守られてばかりの俺が強くなったらやりたい事。
でも、もしかしたら俺は――――――頼っていたんじゃないか？
白を頼っていたんじゃないか？あいつが何を背負っているのかも知

らずに、ただ頼って、ただその強さに憧れて。

「・・・・俺も、あいつの背中を任されるぐらいにならないとな」

「何か言ったか一夏？」

「いや。何でもない」

俺がそう言うと、ノックの音がした。

今出ます。と短く答えた俺は、ドアを開けた。

「あれ、山田先生。どうしたんですか？」

ドアの前に立っていたのは我等が副担任、山田真耶先生だった。でも、何でだ？俺、なんかやった？

「今日用があるのは篠ノ之さんです」

「私、ですか？」

自分の名前が出た箒もこっちに来る。

「はい。篠ノ之さん。お引越しです」

にっこりと笑顔で言う山田先生。ほうほうお引越し・・・て、え？

「私がですか？」

「そうです。篠ノ之さんも男子と同室では何かと気を遣うでしょう？」

「いえ、私はそんな・・・」

尚も食い下がる箒。どうしたんだ？何か気に掛ける事でもあるのだろうか。

と、そんな事を考えていると箒がこっちをちらちらと見ていた。ああ、そう言う事か。

「大丈夫だよ箒。俺は一人で起きれるし、歯だってちゃんと磨ける」

プチッ。ん？何かが切れる音がしたな。一体なんだろう？

「山田先生」

「は、はい」

箒が語調を強くして山田先生の名前を呼ぶ。こらこら、教師を怖がらせるな。

「部屋を変えましょう。今すぐに！」

「え、あ、そ、そうですね。では早速準備に取り掛かりましょう」

そう言ってすぐに動き始める二人。

俺にも何か出来ることは無いだろうか。等と思いながら箒に声を掛ける。すると、

「必要無い。お前は何もするな」

とすごまれた。俺、こいつを怒らせる事したか？うーん駄目だ。思

い当たるものが無い。
そんなこんなで片付けは小一時間で終わった。
部屋を出る二人を見送った後、俺は一人ベッドに寝っ転がった。

（何か、落ち着かないな～）

今まで二人で使っていた部屋は、一人になると広すぎるぐらいに感じた。

「やる事も無いし寝るか」

寝巻きに着替える為に立ち上がった俺の耳に、ノックの音が響いた。
ドアを開けると、其処にはさっき部屋を移動したはずの箒が立っていた。

「どうした箒。忘れ物でもしたか？」

「い、いや。そう言う訳じゃないんだ。その・・・だな」

珍しく歯切れの悪い箒に、少し面食らってしまう。一体どうしたんだコイツは？こんな事滅多に無いぞ。

「い、一夏っ！」

「お、おう」

いきなり大きい声で名前を呼ばれて俺もついつい声がでかくなる。
隣人達よ、すまん。

「今度の“学年別個人トーナメント”だがな――――」

“学年別個人トーナメント”って確か、今月あるあれか。あれがどうしたんだろうか。

「私が優勝したら、つ、付き合ってもらう！！」

・・・・・はい？咄嗟に理解できなかった俺は箒に何なのか訊こうとしたが、脱兎の如く退散され持ち上げた腕は空を切った。

「何だったんだ、一体？」

まあいいか。そう思った俺は部屋の中に戻った。

――――それを影で見ていた者達が居た――――――

「ねえ、今の見た？」

「見た見た」

「これは――――――」

「「「大ニュースだ！！」」」

――――フランス某所

薄暗い部屋。その部屋の窓際にある大きな机の椅子に、一人の男が腰掛けていた。

男はふと何かを思いついた様に顔を上げると、近くの秘書らしき痩

身の男に声を掛けた。

「“奴”を呼べ」

それを訊いた痩身の男は部屋を出て行き、しばらく後には別の人間が部屋に入ってきた。

それは、長めの濃い金色の髪が綺麗な少女だった。

「・・・お呼びでしょうか、社長」

「来たか。ＩＳ学園転入後のお前の任務を変更する。元々は日本の特異体とその専用機が目的だったがそんなモノはもうどうでもいい。ＯＲＣＡ旅団は知っているな？」

「はい」

「お前にはＩＳ学園に居ると言う、奴らの切り札と接触。その機体データの奪取を命じる」

「分かりました」

もう下がれと言われた少女は一回頭を下げた後、部屋を出た。そして、廊下を歩きながらＯＲＣＡの切り札について思い出していた。白い髪。優しさの中にも鋭さのある瞳。迷いの無い顔。それを少女は知っていた。

「あれは確か、お母さんがまだ生きてた頃。三年前ぐらいだったかな」

そんな事を言いながら、少女は思い出を辿り始めた。

――――三年前

ｓｉｄｅ金髪の少女

お母さんに買い物を頼まれていた私は、街中に来ていたんだ。

「えーっと。野菜も買った、調味料も買った。後は・・・よし、もう無いね」

買う物も買ったし、後は小物でも見てから帰るとしようかな。

「まずは何処に――――うわっ！」

考えながら角を曲がったら人にぶつかっちゃったよ。

「イタタッ」

「君、大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫――――」

です。て言おうとしたら言葉が止まっちゃったよ。だって、目の前の人がとっても不思議だったんだ。

――――綺麗な、白い髪をしていたから。

――――時間は数分巻き戻る――――

ｓｉｄｅ白

俺は任務でフランスに来ていた。今はそれを終え、適当に街を歩いている。

「あー。廃工場の人強かったな」

父さんが死んで一年。俺は武者修行も兼ねて、傭兵として働いていた。雇い主は『アナトリア』という小さな町で、トルコのアナトリア高原にある。
俺は其処で、度々送られてくる企業連の奴等と戦っていた。

（しっかし今回は以外だったな。まさかリンクスから直に決闘を申し込んでくるなんて）

企業連にも、あんな奴が居たんだな。自らの意志を強く持ってる奴が。
まあ、そのリンクスも決闘場所の廃工場で散った。正確には俺が散らしたんだけどな。後悔は・・・多分、していない。
こうして自分の手を汚すのは何度目だろうか・・・・。
そんな事を考えながら角を曲がったら視界に金色が映り、次の瞬間にはぶつかってしまった。

（おっとっと。あぶねえ）

俺はよろけるだけで済んだが、相手は転んでしまった。ぶつかった相手は濃い金髪が似合う少女だった。身長は俺より頭一個分小さいぐらいだろうか。
そんな事を思いながら、俺はその娘に声を掛けた。

「君、大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫――――――」

少女が途中で言葉を止めたので、気になった俺は少女の視線を追った。

・・・ああ、そう言う事か。

「この髪、そんなに気になるか？」

「え、いや、その、嫌な気持ちにしちゃったならごめんなさい。ただ白い髪なんて珍しいからつい」

「怖かったり・・・・しないのか？」

「怖いなんてそんな！その、綺麗だなって思って」

綺麗、か。そんな事を言われたのは久しぶりだ。大抵の奴はこれを見て、俺を不気味に思うのにな。

「ありがとう。そう言って貰えると嬉しいよ。そうだ。転ばせたお詫びに冷たい物でも奢るよ」

俺が何気なく言うと、少女は手をわたわた振って遠慮した。

「悪いですよそんなのっ。よそ見してたのは私の方なのに」

「いやいや。こんな綺麗なお嬢さんを転ばせちゃったんだ。お詫びをするのは当たり前でしょ」

俺の口からこんな言葉が漏れるなんてな。正直言ってキモいな。何処のナンパ男だよ俺は。

「き、綺麗って・・・。お世辞はいいですよ」

「お世辞なんかじゃないって」

実際そうだ。俺は基本的にお世辞を言う性格じゃない。

「とにかく。何かお詫びをさせてくれ」

「そこまで言うなら。あ、その前に名前、教えてくれませんか？」

「俺は孤島白。見ての通りって言うと分かりづらいが、一応日本人だ。あと俺に対してはタメ口でいいぞ」

「じゃあそうさせてもらうよ。私はシャルロット・デュノア。よろしくね」

シャルロットと名乗ったその少女はにっこりと微笑む。やたら笑顔が似合うな。

――――――そして現在

それが少女――――――シャルロット・デュノアと孤島白の出会いだった。

思い出してみると、結構恥ずかしいなとシャルロットは思った。

「彼は・・・僕の事覚えていてくれてるかな？」

と言っても会ったのは三年前。白が覚えている確率の低さに、シャルロットは心の中で溜息をついた。

しかし今回、それは彼女にとっては好都合だった。

今回の任務は“男子”としてＩＳ学園に潜入。そして目標と接触して機体データを奪取すると言うものだった。

“男子”として潜入するのは、目標に接触しやすくする為の処置だった。だからこそ、女子とバレてはいけなかった。

「任務だって言っても、やっぱり少し寂しいな・・・」

誰も居ない通路に、少女の声は消えていった。

ｍｉｓｓｉｏｎ２０　動き出す世界（後書き）

作「どうも。最近執筆ペースが上がるはＰＶが十万九千行くわでテンションの上がってる作者でーす」

白「そんな作者に振り回されてる白でーす」

作「今回の話は一話にまとめるつもりが、気付いたら前後編に分裂してたよ」

白「そりゃご苦労なこった。俺は出番が少なかったからゆっくりしてたがな」

作「大丈夫さ。次回は君の出番たくさんあるから」

白「なんじゃそりゃ！」

作「主人公の出番が少なくてどうするんだよ」

白「ぐっ。それもそうか」

作「と。あれやこれやと話していたらもう時間だよ。それじゃあ皆さん。次回の雑談でまた会いましょう。今日はご観覧頂き有難うございましたー」

――――――次回、白がいよいよあの人と接触！？乞うご期待！！

ｍｉｓｓｉｏｎ２１　天才からの依頼（ミッション）（前書き）

あの人が出るよー。

ｍｉｓｓｉｏｎ２１　天才からの依頼（ミッション）

ｓｉｄｅ白

今日は色々とあったが、とりあえず俺様おつかりーっす。でもそんな事は一晩寝ればきっと問題ナッシング！

「・・・いかんな。疲れでテンションがおかしい。今日は早く休もう」

任務後、ＩＳ学園に戻ってきた俺はそんなこんなで自室のドアを開ける。すると、

「おかえりなさい、あなた♪ご飯にする？それともお風呂？それともw「部屋間違えました」あ、ちょ――――――」

バアンッ！！言葉を遮り勢いよくドアを閉める。部屋番号を確認する。あれ？確かに俺の部屋だ。

何で楯無さんが裸エプロンと言う破廉恥な格好で俺の部屋に居るんだ？

そう思いながらもう一度ドアを開ける。今度はそーっと中の様子を窺いながら。

「白君ったら酷いわねー。こんなか弱い美少女を無視するなんて」

「か弱いなんて言葉、どうやって信じろって言うんですか？」

「か弱いわよ。少なくとも君よりは」

「俺はあなたが思ってる程強くありませんよ。それより何の用ですか？ひやかしなら今すぐ窓から放り投げますよ」

この人が自分から乗り込んで来たからにはそれなりの理由があるのだろう。本当にひやかしなら俺は容赦なく窓から云々を実行するが？

「白君が言うと冗談に聞こえないわ「実際冗談じゃありません」ひどーい。用ならちゃんとあるわよ。引越しよ」

「引越し？」

「そう引越し」

「でも何で急に」

「その理由はあなたが一番知ってると思うけどね。まあいいわ。理由は簡単。君はもう隠れる必要が無いから。だから君には一年生寮に移ってもらうわ。でも安心して、一人部屋だから余計な詮索はされないと思うから」

「そりゃご苦労な事ですね。でもまあ、有難うございます。俺もその方が動きやすいです」

「そう。それは良かった。それじゃあすぐに移動しましょ。荷物はもうまとめておいたから」

部屋を見回すと確かに俺の荷物が全てダンボールに納まっていた。なんと言う手際だろうか。

私は生徒会室に戻るから後は自分でやってね、とだけ言い残して洗面所に入った（この時気付いたがどうやらエプロンの下にビキニを

着ていたようだ）楯無さんは、次に出てきた時には既に制服でそのまま部屋を出て行った。
その後、一年生寮の新しい部屋に移動して荷解きを済ませた俺は、千冬さんに平日の外出許可を貰う為職員室に向かった。
この時間帯は皆食堂で夕飯を取っているので誰かと会うことはなかった。

「学園側には申請しておいたぞ孤島。それにしても束に呼び出されるとは何があった？」

俺の外出を学校側に申請した織斑先生が聞いてくる。既に事情は説明済みだ（外出理由は適当にごまかしって貰った）。

「そんなの俺が聞きたいですよ」

こればっかしは俺にも覚えが無い。束さんとはあの人がＩＳを発表して姿をくらませてから会っていない。

「あいつの事だ。また下らない事でも考えてるんだろう。気をつけろ。何をされるか分かったもんじゃない」

「あー。それは同感です」

その後他愛も無い話をして、俺は新たな自室に戻り夕飯も取らずに床に就いた。するとすぐに睡魔が訪れて俺は眠りへと誘われて行った。

翌日の朝。始発電車を降りた俺は送られて来た地図情報を見ながら駅のホームを出た。
早朝という事もあって、人影は無い。

「昨日の今日だからな。これはある意味好都合」
そんな事を呟きながら、俺は歩き出す。
地図通りに歩いて辿り着いたのは、古びて今はもう使われていない海沿いの倉庫街だった。
「とりあえず、そこら辺歩いてみるか」
だがそれも数秒の事だった。俺の視線の先には看板が立っていた。
『こっちだよ～』
そう書いてある下にはご丁寧にも矢印とウサミミが描かれていた。
「・・・・・・・・・」
こう言う時、どんな反応をすれば良いのだろうか？これを立てた人物が誰かは分かる。一人しか居ない。
「まあ、行ってみるか」
考えるより行動。俺は矢印に従って倉庫に入る。
・・・・誰も居ない。周りを見回すとまた看板が立っていた。内容は同じ。俺はまた矢印の方向に進む。
しばらく進むと階段があった。どうやら地下に繋がっているらしい
それを、俺は降りてみる。
降りて行った先にあった扉を開けると、懐かしい声が耳に響いた。
「しーろーくーん！会いたかったよー！」

そう言いながら飛びついて来たモノを、俺は蹴りで吹っ飛ばす。ゴスッ！と言う音と共に、蹴られた何かは盛大に転がって積み重なっていた木箱にぶつかり止まる。

「えーん痛いよー。白君ひどーい」

「束さん。もう一回蹴るぞ」

俺の目の前に居るこの人こそがＩＳの生みの親にして世界一の頭脳を持つ人物、篠ノ之束だ。

「白君の鬼ー。あーでも、白君になら何回蹴られてもいいかなぁ」

「ちっ。このドＭが」

生憎俺は自らいじめてくれと言ってる奴をいじめる趣味は持ち合わせていないのでね。

・・・・さてと。フザけるのは此処までだ。そろそろ本題に入ろう。

「俺を呼んだ理由は何だ？」

単刀直入に訊く。この人が俺を呼んだのには、ちゃんとした理由があるはずだ。

「んー？それはねぇ、君に依頼があるからだよ」

「依頼？内容は？報酬は？」

“依頼”と言う言葉を聞くと職業柄なのか、反射的に口が動く。そ

れもこれも、今まで長い間同じような経験をしたからだろう。

「白君も、昔と随分変わったねえ。今じゃもう立派な一傭兵かあ」

束さんはそう言うと、昔を思い出して懐かしんでいるといった表情をする。だが、今の俺にはそんな事どうでもいい。今の俺は傭兵だ。受けた依頼を報酬の為にただこなす。それだけだ。何時まで経っても束さんが思い出の海から上がって来そうにないのでとりあえず引き上げる。その方法は――――――

ドゲシッ！

もう一回蹴っとく。

「いたっ！えーん痛いよしろくーん」

「いいからさっさと内容と報酬を話せ。こちとら学校サボってまで来てるんだからよ」

すると蹴られた本人はやっとの事で依頼について、詳しく話し始めた。

「内容は簡単。警護だよ」

「警護？誰の？」

「箒ちゃんやいっくん。それにちーちゃん・・・・は自分で自分を守れるか。まあそんなところだよ」

他には？とは訊かない。この人は自分の興味対象――――俺に一夏、

それと箒と千冬さん。後は一応親――――――以外ははっきり言って、『どうでもいい』のだ。だから、そんな事を訊いたところでやぶ蛇だ。

「・・・内容は分かった。だがどうしてだ？何故あいつらを警護する必要がある？」

「それはね、君達ＯＲＣＡが動き始めたからだよ」

束さんは言う。だがそれが何だ？今回の依頼と何の関係があるんだ？

「君達が始めて行動を起こしたあの日、ＯＲＣＡは君の情報をばら撒いたよね？」

「・・・・ああ」

確かにそうだ。あの時、俺の情報は世界中に公開された。俺はＩＳ学園に居る。世界にとって無くてはならない物の近くに。つまり、世界にとって無くてはいけない物をすぐにでも消せると言うことを、世界に教える為だ。しかしそれを理解出来たのも、一部の政治家や企業のお偉いさんだけだろう。一般人は皆、リアリティを出すためと思っただろう。

俺が考えている間にも、束さんの言葉は続く。

「君がＩＳ学園に居ることを知って、世界中は今すぐ君を手に入れようとするだろうね。その時利用されるのは何だと思う？」

そんなモノ、一つしかない。出来るだけ損をせずに、俺を手に入れる方法。

「俺の身近なやつ等。一夏達か」

「その通り。さすがは白君察しがいいね。そんな事になったらいっくん達が危険に晒される。大切な友人と大切な妹達を私は危険な目に遭わせたくないからね。だからこうして君に依頼してるんだよ」

・・・・・納得がいった。この理由を断る理由なんて、俺には無い。此処でこの依頼を断ったら、それは友に対しての裏切りだ。そんな負い目を感じながら生きられる程人間出来ちゃいない。

「理由も理解した。それじゃあ最後に報酬だが、一体何だ？それ相応のモノを用意してるんだろ？」

「もちろん。今の君にとっては有り難いモノだと、私は思うからね。君の機体――――《ホワイト・グリント》を“改造”してあげるよ」

「どう言う風に？」

「ＩＳの機動力の要である『ＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）』。それを組み込むんだよ」

『ＰＩＣ』。それはＩＳに搭載されている機能の一つだ。ＩＳはこれによって飛行、高速機動、機体制御を行っている。ネクストにそれを搭載すれば、さらなる運動性の向上に繋がるだろう。だが――――

「そうすれば白君も企業連や幽霊と戦いやすくなると思うよ？」

「・・・・・」

「オリジナルのネクストをいじらせるのは抵抗がある？」

「当たり前だ」

「そりゃそうだよねー。私が敵と手を組んでるかもしれないからね。でも、それ以外の報酬を、私は用意しないよ？もし受けないならそれで良い。だけど君は、それで良いの？守りたい人達を、見捨てても良いの？」

「俺は・・・・・・」

束さんが企業連と手を組んでいないとも限らない。その場合計画に何らかの支障を来たすかもしれない。だが、大切な人達を見捨てる事なんて俺には出来ない。

だったら――――――

「俺は・・・・その依頼を受諾する」

「ふふ。そう言ってもらえて嬉しいよ。じゃあ、さっそく始めようか」

「頼む」

そう言って、俺はホワイト・グリントを展開し、前方の装甲を開いて其処から降りる。この仕様も『全身装甲』ゆえのモノだ。

「いっくよーん！痛かったら手をあげてねー」

歯医者かあんたは。てかグリントに痛覚は無いだろ。思わず心の中で突っ込んでしまう。気付けば完全に束さんのペース。この人には

昔から振り回されてばっかりだ。自分の興味が無い相手には冷たいこの人も、俺達のような興味対象と居る時はそんな事が嘘の様に思える程ハイテンション・・・・いや、こっちが本性なのか。

「ところで束さん。『ＰＩＣ』を装備したグリントはどれくらい速度が出るようになるんだ？」

「うーん。今はどれくらいなの？」

「通常ブーストで８００？／時、ＱＢとＯＢ使用時は１４００？／時ってところで、ＶＯＢ使用時の最大速度は２３００？／時ぐらいかな。まあ機体性能に制限を付けてるから学園で使う時は少し遅い。ＱＢ時で大体９００？／時程だ」

「随分と速いねえ。まあそれならその二倍ぐらいだと思ってくれればよいよ。ＩＳみたいにオート操作が無いから機体制御が難しいだろうけど、頑張ってね♪」

二倍・・・・だと？今の二倍？つまり最高でも４６００？／時・・・・なんつう速さだ。ＰＡが無けりゃ、Ｇに絶えられなくなる。機体制御についてはＡＭＳがあるから問題無い。だとしても、そんな超スピードに慣れるには試験飛行もしなければいけないな。後で飛んでおこう。場所は・・・太平洋でいいだろ。ＩＳ条約？んなもんネクストには関係ねえ。

「よーし、後はこの装甲を閉じれば――――――はい終了！」

「もう終わったのか？」

「私の手にかかればこんなの朝飯前だよ♪」

マジかよ・・・。粒子化技術を組み込むのさえ、俺は手間取ったんだぞ。それをたった数分でやってのけたとなると、やはりただ者じゃないな。

「やる事もやったし、私はそろそろ失礼するよ」

「その前に束さん」

「何？」

「この間ＩＳ学園を襲撃した黒ゴリラ。あれを作ったのはあんただな？」

「その通りだよ。でも黒ゴリラは酷いよ～」

「目的は何だ？」

「ふふ、何でしょう？」

「いいから言え。何の為に、わざわざ一夏達を危険な目に遭わせた？」

「その内教えてあげるよ♪」

そう言った束さんを、光が包む。そして、光が晴れた瞬間其処には黒い『全身装甲』の機体が立っていた。だがそのフォルムは先日の黒ゴリラと違ってスマート。紫色に光るアイセンサーも規則正しく並んでいて、背中には黒い機械の翼の様な物が付いている。

「んなっ！？あんた、まだ『Ｉ－ＣＦＦＦ－ＳＥＲＲＥ』を使ってたのか！？」

束さんが纏っている黒い『全身装甲』――――『Ｉ－ＣＦＦＦ－ＳＥＲＲＥ』は、孤島の遺産の一つ。ＡＩの支援を受ける事を前提に父さんが作り上げた物だった。

束さんがそれを所持している理由。それは、研究データを取る為に父さんが預けていたからだ。

「当ったり前だよ白君！何処かに保管するよりも、私が使ってた方がこれを守るには最適だもの」

「だが・・・“セレ”の支援が無いんじゃ本来の性能は発揮できないぞ？」

「そこら辺はだいじょーぶ。しっかりＩＳの機能で補ってるから。っと、話し込んじゃったね。それじゃあバイバイ♪」

「あ、待て！！」

俺は急いでグリントを装着するが、束さんはその間に天上をレーザーで突き破って飛び出して行ってしまった。

追おうかとも考えたが、やめた。もし束さんの話が本当なら、あの機体は相当な速度が出る筈だ。制限の掛かったままのグリントじゃ、おそらく追い着けない。

グリントを待機状態にした俺は、倉庫の外に出て“ある人物”に通信を入れた。しかし、使っているのは通信機ではなくネクストのモノだ。

『こちらセレです。どうしましたか、白？』

俺が通信を繋いだ相手。それはセレだ。
セレ・クロワール。ラインアークの社長にして、孤島の遺産の一つ。その真の姿は『Ｉ－ＣＦＦＦ－ＳＥＲＲＥ』の支援を目的に父さんが作り上げた“ＡＩ”だ。

「“あの機体”――――『ＳＥＲＲＥ』は、束さんが持っていたよ」

『！？それは本当ですか！？』

「ああ。この目で見たからな」

『それなら私がアクセス出来なかったのも納得がいきます。そうなると回収は難しいですね・・・・。どうしますか、“レイヴン”？』

どうやら今のセレは俺を“白”ではなく“レイヴン”として見ているらしい。だが、答えは決まっている。

「暫くは現状維持だ。下手に手を出して痛い目を見るのは分かりきってるからな」

『分かりました。此方でも調べておきますので、新しい情報が入ったら連絡します。それでは』

通信終了。後には静寂が残った。

「さてと。時間も余った事だし、試しに飛んでみるか」

学校には一日休むって伝えちゃったし、今帰ったってメンドクサイ

事になるだけだ。
ああ、そうだ。ついでにビッグボックスに寄ってみるか。メルツェル達が回収したＡＦも確認しておきたいし。
次の瞬間、俺を白い光が包む。弾ける様に散ると、俺の体をグリントが包んでいた。

「そんじゃま、行きますか」

――――――コジマリアクターの制限を解除。ＰＡの展開領域最大。
――――――戦闘モードを起動します。

機械音声が頭に響く。それと同時に俺はＯＢを機動、ビッグボックスに向けて飛び立った。

ｍｉｓｓｉｏｎ２１　天才からの依頼（ミッション）（後書き）

作「皆さんどうもー。リア充に対して憎しみと怒りしか覚えない作者でーす」

白「いきなりそんな事を言われてもどんな反応をすればいいのか悩むぞ」

作「どんな反応だっていいでしょ。そんな事より今日のゲストを紹介しまーす。久しぶりの参加、セレンさんでーす。いや、霞さんの方がいいですか？」

霞「霞で構わん」

白「げっ。セレン・・・」

霞「何だその露骨に嫌そうな顔は？」

白「い、いや？な、なな、何でもない何でもない。ははは・・・」

作「其処のお二人さん。イチャイチャするのは構わないけど、さっさとトーク始めるよ？」

霞「お前までオールドキングみたいな事を言うか！」

作「まあまあ、そう怒らないで」

白「おい作者。そこら辺にしとかないと殺されるぞ」

作「へ？え、ちょっと霞・・・さん？何故に私を引きずって行くんでしょうか？あ、ちょ、いーーーやーーーっ！！」

白「死ぬなよ、作者。人もいなくなっちゃったし、ここらで引き上げるか。それじゃあ皆さんさようならー」

――――次回、多分眼帯娘登場します。つうか登場させます。あとＯＲＣＡの面子も出ますよー。

ｍｉｓｓｉｏｎ２２　黒兎と鴉、時々山猫（前書き）

どうしてこうなった・・・・・・

って思う話です。

ｍｉｓｓｉｏｎ２２　黒兎と鴉、時々山猫

暗い部屋。其処に一人の少女が居た。流れる様な銀髪と、左目に着けた眼帯が目を引く。
ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが少女の名前だ。ドイツ軍ＩＳ部隊『黒ウサギ隊（シュバルツェア・ハーゼ）』の隊長であり、ドイツの第三世代型ＩＳ『シュバルツェア・レーゲン』を駆る彼女の瞳はその赤さと違って冷たさを感じさせる。
彼女は一つの映像を繰り返し繰り返し見ていた。
ＯＲＣＡ旅団が全世界に流した映像。その一部である白い機体――――『ホワイト・グリント』の戦闘映像。

「・・・・やはり、同じだ」

ラウラが呟く。その視線は相変わらず画面へと向けられているが、意識は過去へと向けられていた。
三年前。ラウラ達の部隊は任務中に鉄塊を装備した所属不明機に遭遇。苦戦を強いられていたところ、白い機体が突如飛来。
敵の援軍が来たのかと絶望していたラウラ達だったが、次の瞬間目の前で起きた事に衝撃を受けた。
数機のＩＳでも勝てなかった所属不明機を、白い機体は両手に持ったライフルを使い一瞬で撃破したのだ。その性能はＩＳより圧倒的に上だった。性能だけではない。その機体を完全にものにしている操縦者も只者ではないのがよく分かる。
白い機体は此方を一瞥すると、所属不明機が装備していた鉄塊を持って去って行った。
その時以来、ラウラの強さへの執着がより強くなった。
ああなりたい。あの機体の様に圧倒的力を手に入れたい。そんな渇望が、彼女の心を埋めていった。

ラウラは机の上に置いてあった一枚の資料を手に取る。それに書いてあったのは、ＯＲＣＡが示した『ホワイト・グリント』の操縦者、『孤島　白』の情報だ。
それを見た時、ラウラは自分の目を疑った。幼さこそ消えているがその操縦者の顔は、自分に強さへの執着を持たせた少年の顔と酷似していたのだから。

五年前――――――

その日、ドイツ軍をある夫妻が訪れた。目的は何かの研究らしいが、機密と言う事で幼いラウラは詳しく聞かされていなかった。
その夫妻は一人の少年を連れていた。１１歳ぐらいのその少年は、夫妻の息子で研究を手伝う為に着いて来たらしい。
こんな子供に何が出来るんだ、とラウラを含めた大勢の軍関係者がそう思っていた。
だが、次の日にはその考えが間違っている事を教えられた。
コンピュータールームに入り込んだ少年は、そこに保存されているドイツ軍が開発に手間取っていた第二世代型ＩＳのデータをまるでプラモデルを組み立てる様な感じでイジり、完成させてしまったのだ。何人もの技術者が手こずっていた事を、その少年はたったの小一時間でやってのけた。
数日後、訓練を終えたラウラはすぐにその場を後にした。ある『事故』により『出来損ない』の烙印を押されていた彼女は出来るだけ一人で居るようにしていた。部隊員の近くに居ても、聞こえてくるのは彼女に対しての嘲笑と侮蔑だけだったからだ。
ラウラが訓練施設の一角にある休憩スペースに着くと、先客が居た。
それは、あの少年だった。

「あれ？お前は確か――――――」

此方に気付いた少年が声を掛けてくる。ラウラは少年に皮肉まじりに言い返す。

「誰かと思えば『天才』じゃないか。で？その『天才』がこんな所で何をしてるんだ？」

「俺は休憩してるだけだよ。それと『天才』とか言うな。俺はそんな大層なもんじゃねえよ」

「一人でＩＳを完成させておいてよく言う」

ラウラのその言葉に少年は頭を掻きながら暫く黙って、再び口を開く。

「あれは此処の技術者達がある程度完成させてたからであって、俺が全部やった訳じゃない。それに、父さんや母さんと比べれば俺なんてまだまだだよ。つうかそれ言ったらお前も軍人なんだから戦闘のプロだろ？」

「私は・・・・私は、プロなどではない。ただの『出来損ない』だ・・・」

「・・・・・『出来損ない』？」

『出来損ない』。その単語に、少年は顔をしかめる。

「ああそうだ。私は『出来損ない』だ！『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』と適合出来ず、ＩＳの操縦技術では他の者に遅れを取り・・・。戦う為に生み出されたと言うのに戦う力が無い私は『出来損ない』だ！」

ラウラは大声で叫ぶ。
何時からだろうか、他の人間からだけではなく、自分で自分を卑下するようになったのは。

「これが、この左目こそがその証だ！」

大声で叫び、ラウラは左目の眼帯を外す。開いたその瞳は赤い右目とは全く違う金色をしている。

「私は眼帯が無ければこれを制御できない。故に『出来損ない』の烙印を押された！」

「・・・・違う。お前は『出来損ない』なんかじゃない」

「違うだと？『天才』のお前に・・・・『完璧』のお前に、『出来損ない』である私の何が分かる！？私だって、好きでこうなったんじゃない！！」

最早ラウラの叫びは、子供の駄々と何ら変わらなかった。望んだ訳でもないのに生まれ、『出来損ない』として扱われる。ラウラはそれが辛くて仕方なかった。

「私は――――――」

パンッ。
乾いた音が通路に響く。最初何が起きたのか理解できなかったラウラは、頬から伝わる痛みで自分が殴られたのだと気付く。

「な、何を「馬鹿野郎」え？」

食って掛かろうとするラウラを、少年の言葉が遮る。

「さっきから聞いてりゃ自分を卑下してばっかで。出来損ない出来損ないって、お前は兵器か？道具か？人形か？違うだろ。お前は人間だ。いくら他人に馬鹿にされようと、いくら望んでない事があろうと人間つうのはそこから抜け出して強くなって行くもんなんだよ。だけどお前は逃げてる。自分は所詮強くなれないって心の何処かで思ってる」

少年の言っている事は正しかった。ラウラは『出来損ない』と呼ばれて自分自身に勝手に限界を作っていたのだ。もしかしたら自分を『出来損ない』にしていたのは自分なのかもしれない。

「後ろにばっか逃げてないで、少しは前に進めよ。其処から抜け出して、這い上がってみろよ。そうすれば、人間はいくらだって強くなれるんだからよ・・・・て、おい。何で泣いてんだよ？」

言われてラウラは気付く。知らない間に自分の頬を流れるものがあった。

「あ、もしかして強く叩き過ぎた？わ、わりい！そんな、泣かせるつもりは「そうじゃない」え、違うの？」

「嬉しいんだ。そうやって、出来損ないの『兵器』としてだはなく一人の『人間』として見て貰えたのが」

鉄の子宮から生まれ、戦う為に育てられた。『人間』ではなく『兵器』として。そんな自分を『人間』として見てくれたのは、目の前の少年が始めてだった。ラウラはそれが嬉しくて堪らなかった。

「お前は強いな。私なんかよりずっと強い」

「そうか？」

「ああ」

「そうなんだとしたら、誰かの為に強くなりたいからかな」

「誰かの為に？」

「ああ。父さんや母さん、それに友達とか大切な人を守る為にな。皆が笑ってられる様に、俺はしたいから」

「お前の言う『強さ』とは何だ？」

「うーん・・・・。さあな。俺にも分かんねえ。ま、生きてりゃその内分かるだろ。と、そろそろ戻んなきゃな。んじゃ、お前も頑張れよ」

「ま、待ってくれっ」

去ろうとする少年を、ラウラは引き止める。

「何だ？」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「え？」

「私の名前だ。まさか、名乗らせておいて自分ではそうしない気か？」

「ああ、そう言う事。俺は白。孤島白だ」

「犬みたいだな」

「それは言うな。それじゃあな」

次こそ少年は去って行った。その背中を見ながらラウラは少年の名を呟く。

「孤島・・・白」

そう呟くラウラの顔は、今までとは違う決意に満ちていた。

――――その様子を影で窺っていた人物が二人居た。

白の父親である『孤島　鎧』と母親の『絵馬』だ。

「ああいうのっていいわねえ」

「青春だなあ」

二人の顔は、それはそれは和やかなものだった。

――――現在

それが少女と少年の出会いだった。白がドイツに滞在したのはたった一週間。それだけの期間であったが、それはラウラを変えた。ラウラは他の隊員とのＩＳの操縦技術の差を埋めて行き、『あの人』

が現れた事によって部隊最強にまで上り詰めた。
しかし、その自分を変えた少年があの機体を扱っていた事には純粋に驚いた。

「隊長、クラリッサ・ハルフォーフ大尉です。少しよろしいですか？」

ラウラが昔を思い出していると、ドアの向こうから声がした。それにラウラが「入れ」と短く答えると、一人の女性が部屋に入ってくる。
クラリッサ・ハルフォーフ。『黒ウサギ隊』の副隊長である彼女は二十二と部隊では最高齢で、他の部隊員からのイメージは『頼れるお姉さま』。

「用件は？」

ラウラが促すと、クラリッサは口を開く。

「IS学園への編入ですが、期日が早まりました」

「・・・そうか。すぐに準備する」

ラウラはそう告げ、部屋を後にする。クラリッサも後に続く。

（待っていろ白。私は、きっとお前の横に並んでみせる）

――――――太平洋上空

白い影が一つ、大空を高速で移動していた。・・・・悲痛な叫びをあげて。

「く・・おぉ・・・束・・・さん・・後・・で覚えてろよぉぉぉぉぉっ！！」

白い影の正体。それは『ホワイト・グリント』を纏った白だ。白の視界の左下に映っているメーターは２４００？／時を表示している。それは、束が言っていた二倍と言う数字とは圧倒的にかけ離れていた。

「二倍じゃなくて、三倍だろ！どうすりゃ通常ブーストでＶＯＢ使用時並の速度が出んだよ！？」

ＰＡがあって良かった、と思う白。そうでなければ今頃「見せられないよ♪」てな状況になっていただろう。それだけは避けたい白だった。

「と、そろそろポイントだな。そんじゃま、一気に行きますか」

言うと同時にＯＢを起動、一瞬で速度が３９００？／時にまで到達する。

白達ＯＲＣＡ旅団が拠点とするビッグボックス。それは企業連から奪取した移動要塞だ。移動式であり、さらにＥＣＭ発生装置によって敵に発見されずらくなっている。その為、団員には毎回新しい位置情報が送らる。

三角柱型のビックボックスの壁面から飛び出したカタパルトデッキに降り立った白は、そのまま格納庫へ移動する。

其処にはスーツ姿のメルツェルが居た。向こうも此方に気付いた様で、声を掛けてくる。

「白、今日は平日だぞ？早速サボりか？」

「ちげーよ。今日はちょっと用があってな。学園には許可を貰ってる。お前は？」

「私は今からＩＳ学園に行く。お前の事で色々とな。ああそれと、他の団員は任務で出払ってて今居るのはハリだけだ。大人しく留守番してろよ」

「りょーかい副団長」

そう言って、メルツェルは愛機『オープニング』を展開すると飛び立って行った。

「霞が居ないって事は、『シリエジオ』の調整が終わったのか。・・・ふぁ～あ。朝が早かったから寝たりねえ。少しばかり寝るかぁ」

そんな事を言いながら自室へ向かう白。基本的にラインアークで過ごす白は、ビッグボックスの自室には本が二十冊ぐらい詰まった本棚と机、それにベッドしか置いていない。

そんな自室のドアを開けた時だった――――

ゴンッ！！

「ぐあっ！？」

部屋に入った白の頭に、突如タライが落ちて来てぶつかる。眠気で意識がはっきりしていなかった白は、咄嗟に反応できずモロに食らってしまう。

意識が薄れる中、後ろから声を掛ける影があった。

「すみません。手段を選ぶつもりは無いものでして」

そんな少女の声が聞こえたのを最後に、白の意識は途切れた。

白が意識を失ったのを確認して、少女――――――ハリは少し焦る。

背は低いが、スマートな体つきに子供らしさが少し残る顔立ちと腰の辺りまで伸びた綺麗なローズグレイの髪は、おそらく美少女の部類に入るだろう。

そんなハリが焦っている理由。それは――――――

「ここまで上手く行くとは思いませんでしたね。どうしましょう、気絶した時の事なんか考えてませんよ・・・・」

このくらい簡単に避けるだろうと踏んでいた為に、これは緊急事態だ。

「な、何をすれば良いんでしょうか？」

あたふたと慌てるその姿はリンクスとは思えない程子供だった。

ｍｉｓｓｉｏｎ２２　黒兎と鴉、時々山猫（後書き）

作「皆さんどうも～。リア友にＢＥ○Ａを見せたらドコモダケだろと言われた作者でーす」

白「今も転生（忘れてないよね？）前もＢ○ＴＡには殺意しか覚えない白でーす」

作「今回も気楽にやろうと思いまーす。それでは本日のゲストはＯＲＣＡ旅団副団長メルツェルさんでーす。どうぞ」

メルツェル（以下メル）「歓迎されよう、盛大にな」

白「いや、別に俺は歓迎しないし。てか何でコイツを呼んだ？」

作「ん？それは単に君をいじる為にだよ」

メル「作者の言う通りだ。しかしなあ。まさか白にあんな趣味があったなんて・・・・」

白「ちょっと待て。あんな趣味って何だおい」

作「ほんとほんと。まさか白君があんな人間だったとは・・・・」

白「いや、だからその趣味って何だよ」

メル「大丈夫だ白。私達はお前を咎めたりしない」

作「そうだぞ白君。・・・・・頑張れよ」

白「だから一体何なんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

――――白のあんな趣味とは一体！？次回、白がいじられます。皆も予想してみてね♪

ｍｉｓｓｉｏｎ２３　長い一日　＜鴉＞（前書き）

遅れてすんませんｍ（＿＿）ｍ
前回色々とワルノリしちゃったもんだから話が中々纏まらなかったんです、はい。
まあ、そんなこんなで書き上げました。どうぞ楽しんでください。

武装のアンケートは今話をもって終了にします。前置きも無しにすいません。でも、もしかしたらその内またアンケートを取るので良いアイデアがあったらその時の為に肥やしておいてください。

ｍｉｓｓｉｏｎ２３　長い一日　＜鴉＞

ｓｉｄｅ白

「うっ・・・・つぅ」

突然の頭痛。それで目が覚めた俺は、自室のベッドに寝ていた。気絶したのはドアの辺りだった筈だが、誰かが運んでくれたのだろう。枕元の時計を確認すると、九時十分を差している。こっちに来たのが六時頃だったから、三時間は寝ていた事になる。

（まずは状況を確認し――――――って、うん？）

体を起こそうとして止まる。

何かがおかしい。何故だか分からんが、右腕に温もりと柔らかい感触を感じる。

「・・・・・んっ・・」

それまでぼんやりとしていた意識がニュー○イプよろしく覚醒する。ウェーイト。ストーップ。今確実に女の声が聞こえたぞ。俺の右側から、しかも至近距離で。おそるおそる声のした方を、向き言葉を失う。

最初に目に入ったのは綺麗な赤みの強いローズグレイの髪と可愛らしい寝顔。

「・・・・・・・・・・・・」

落ち着け。落ち着け俺。落ち着いて状況を確認しよう。

束さんにあった俺は時間があったからビッグボックスに訪れた。そしたらメルツェルがＩＳ学園に行くとかどうかで出てった。そんで寝ようと思って自室に入ろうとしたらタライが落ちて来て俺は気絶した筈だ。ここまでは身に覚えがあるから（最後のは納得がいかないが）いい。
だが今のこの状況は何だ？なんで俺の隣で『ハリ』が寝てるんだ？まさか、あのタライを仕掛けたのはコイツか？コイツなのか？コイツだな。何故だか確信が持てる。何故だろうね？
・・・・あれ？何か嫌な予感がするなあ。よく分かんないけど、このままだと何か不味い事になる気がするよ。
嫌だなー。こういうのって当たっちゃうんだよなー。
そして、この予感は当たってしまった。
コンコン。ノックの音が聞こえたと思ったら、ドアの外から声が聞こえ、メルツェルが入って来た。

「居るな、白。お前の処遇だがＩＳ学園は今まで通り――――――」

書類に目を落としていたメルツェルが顔を上げ、今の俺の状況を見て言葉を止める。
最初は驚いていたメルツェルだが、状況を理解するにつれ笑顔に変わる。但しその表情は二コリではなくニヤリに近い。てかニヤリそのものだ。
コイツがこういう表情をする時は大抵ろくな事が無い。

「白、お前年下趣味があったのか」

ほらな？て、ちょい待てや。

「お前ｎ「そうかそうか」話をｋ「大丈夫だ。皆には私から言っておく」ちｇ「ああ。私は邪魔だったな。仕事もある事だし、そろそ

ろ失礼しよう。ごゆっくりと」待て！違うんだメルツェル！メルツエエエエエエエエエエエエエエル！！」

俺の制止も空しく、とある旅団のドS山猫ことメルツェルは去って行く。

・・・・はぁ。めんどくせえ・・・・・・

さっきの騒ぎから数分後。何処ぞの単純馬鹿並みの大声（ヴァオー）でも起きなかったハリを放置して（もったいないとか言った奴はぶん殴る）、俺は一人食堂で遅めの朝食を作っていた。

転生前は一人暮らしだったたし、昔は料理が出来ない両親に代わって俺が三食作っていたから料理はそこそこ出来る。

ORCAには料理が出来るのがほとんど居ないから、必然的に俺がメシ当番になって腕も上がった。

ちなみにメニューはフレンチトーストに目玉焼き、それとサラダだ。うん、やっぱりシンプルイズベストってね。

と、其処に、

「ん～・・・。良い匂いですね～」

面倒の根源（ハリ）が寝起きの目を擦りながら食堂に現れた。

そしてその目はテーブルの上に置いてある俺の朝食へ。

「おいしそうですね～。ボクの分「無い」えー。じゃあ作って「断る」酷いです白さん！」

「レーション（某蛇も嫌がる一品）か何かでも食ってろ。それが嫌なら自分で作れ」

「むぅ。作ってくれないなら今ある物を食べます」

「何！？」

ハリは俺の朝食に手を伸ばすと、目にも止まらぬ速さでフレンチトーストを確保し、それを――――――

「はむ」

美味そうに咀嚼する。てっ――――――

「何してくれとんじゃ我ぇぇぇぇぇ！！」

「ボクの分を用意してくれない白さんが悪いんです。それにしても、相変わらず美味しいですね～」

コイツめ、幸せそうな顔しやがって・・・・。あーぁ。俺の飯が・・・・・・。

自分で作った朝食は全てハリに占領されてしまった為、俺は仕方なく棚から即席ラーメンを取り出して作り始める。

出来上がったラーメンを食べて「最高だ！！」と叫びたくなったの別にどうでもいいから割愛。

現在時刻九時四十分。場所はビッグボックスの俺専用ガレージ。

ＯＲＣＡの人間にはそれぞれ専用のガレージがあり、其処で機体の調整等を行っている。

そして、俺はハリに手伝ってもらいながら『ホワイト・グリント』の調整をしていた。

タライについてはこれでチャラにしてやろう。聞いたって何故か目を逸らして何も言おうとしなかったし。

そんな事を考えながらも俺は空中投影キーボードを打つ手を動かす。

空中投影モニターには右上に小さくグリントの機体データが、真ん中には武装データが表示されている。

「くそっ。やっぱりこの間の戦闘でコジマ汚染にあってやがったか。こりゃノーマル兵装は全部ご臨終だな」

企業連め、不完全なコジマ粒子を使いやがって。しかも機体はアレサって、そんなに地球を汚染したいか！

社長砲もホワグリに付けるのは相当無理があったな。ＯＢ使えないし。反動デカイし。

換えの武装どうすっかな？

「《ＨＬＲ０１－ＣＡＮＯＰＵＳ》が良いかな？それとも《ＳＡＭＰＧＵＩＴＡ》にするか？ふふ、ふはははははははは」

「し、白さん？」

おっといけない。素が出てしまった。死んでも人間としての本質は変わらないんだな。

「うーん。やっぱこれかな」

俺はそこら辺に置いてある小型コンテナに腰を下ろしたまま、素早くキーボードを操作して新たなウィンドウを呼び出す。

－－－－－ＷＥＡＰＯＮ　ＵＮＩＴ

ＲＡＲＭ　ＵＮＩＴ：　０５１

ＡＮＮＲ（ライフル）

ＡＲＳ（コジマ）

ＥＮＩＣ（ライフル）

XMG－A030（マシンガン）
GAN01－SS－WGP（ガトリング）
DOZER（ドーザー）
07－KIKU（パイルバンカー）

MOONLIGHT（レーザーブレード）

L ARM UNIT：063
ARS ANAR（アサルトライフル）
XMG ENIC
GAN －A030
SAM 01－SS－WGP
DOZ PGUITA（ショットガン）
07－ ER
MOONLIGHT

R BACK UNIT：SAL
SAL INE05（分裂ミサイル）
XCG －B050（4連チェインガン）
EC－ O307AB（3連レーザーキャノン）

L BACK UNIT：SAL

ＩＮＥ０５　　ＸＣＧ
－Ｂ０５０　　ＥＣ－
０３０７ＡＢ
－－－－－ＳＹＳＴＥＭ　ＡＬＬ　ＣＬＥＡＲ　ＩＮＳＴＡＬＬ
ＣＯＭＰＬＥＴＥ

「やっぱ《破壊天使砲》は捨てられん。ロマンが溢れてるもん、これ。ホワグリコアに付けると凄い事になるけど（ビジュアル的に）」

《０５１ＡＮＮＲ》と《０６３ＡＮＡＲ》に《ＳＡＬＩＮＥ０５》はデフォルトだしね。ホワグリなら使わなきゃ。《ＤＯＺＥＲ》は・・・・昔回収してからずっとしまいっぱなしだったの引っ張り出してみたんだあ。俺は『剣術』より『拳術』の方が得意なんだよ。小学生の時、一夏と一緒に箒ん家の道場に行ってたけど、教わってたのは古武術と拳の使い方で剣は少ししか教わらなかったし。

「『拡張領域』の方も・・・全然余裕だな。後付なのによく持つな～。てか粒子化技術超便利。普通だったらこんなに武装付けらんねえし。さあてと、後は整備だけだし、さっさとやっちまうかな」

そう呟いて展開したグリント仰ぐ。起動時は凶悪な兵器になるネクストの待機状態は、驚くほど静かだ。

「綺麗・・・・か」

前に、一夏が始めてグリントを見た時に言った言葉を思い出す。

「これの何処が綺麗なんだよ。コイツは、こんなにも“血”で汚れてるのにな」

て、汚したのは俺か。俺がこの手で、コイツを汚したんだよな。
母さんが殺された憎しみに任せて戦い、父さんや皆が殺された怒りに任せて戦った。
４年前の“あの日”。俺は初めて人を“殺したんだ”。たくさんの人を、殺した。

「・・・血で汚れてんのは、俺の手の方か」

この手が引き金を引いた。この手が剣を振るった。だからこそコイツも汚れた。
俺が、俺さえこの世界にこなければ、こんな事にはならなかったのかもしれない。
『ネクスト』だって作られなかったかもしれない。父さんと母さんも死なずに済んだかもしれない。ＩＳ学園の皆も巻き込まなかったかもしれない。ＯＲＣＡの奴等も、普通の人間として生きられたかもしれない。
全部俺が――――――

「あのぉ、白さん？」

「え？」

呼ばれて視線を向けると、ハリがこちらの顔を覗き込んでいた。その表情は、何故だか知らないが心配そうだ。

「どうかしたかハリ？」

「いえ、白さんが泣いてたんで気になって・・・」

言われて頬に触れてみると、確かに冷たいもので濡れていた。

「い、いや。何でもない。気にすんな」

そう言って着ていたツナギの袖で涙を拭う。知らない間に泣いてるなんて、俺どうかしてるな。

「そうですか・・・。でも、何か悲しい事があったなら、黙ってないで言ってください。私達は何時でも相談に乗りますから。だから・・・そのぉ・・・」

ハリは少し考える様なそぶりを見せてから、迷いの無い瞳で言った。

「だから、その、何でも一人で抱え込まないでください。あなたの周りには共に戦い、共に笑い、共に怒り、共に泣いてくれる人達が居るんです」

あなたは独りじゃないんですから、とハリは最後に微笑みながら付け足した。

「・・・・・サンキュウ、ハリ」

「い、いや、そんなお礼なんていいですよ！」

そう言いながらハリの顔は赤くなっていく。何故だろう？俺、何かイカン事でも言ったか？

まあいいか。今はグリントの整備をしよう。

俺はコンテナから降りると、ハリが持って来た工具を使ってグリン

トの整備を開始する。
装甲を開き、近くに置いてある機材から伸ばしたケーブルを内部に繋げ、モニターに送られて来たデータを確認する。
「各種装甲が若干損傷・・・。カメラアイとレーダーは・・・問題なしと。関節部とブースターのダメージが酷いな。よしまずは此処からだ」
ネクストにはＩＳのような自己修復機能が無い為、こうやって自力で整備や修理をしなければいけないのだ。俺達はすぐに作業を開始する。
作業をしながら俺はハリの方を見る。長い髪を揺らしながらあちこちを動き回るその姿を見ながら、ふと呟く。
「俺は独りじゃない、か」
今まで周りの人間と距離を置いていた。もしかしたら何時か、皆を傷付けてしまうかもしれないから。でも、それでもコイツ等は、俺を支えてくれていた。俺の、すぐ傍で。
「そうだな。俺には、こんなにも大切な“仲間”が居たんだよな」
まったく、今更気付くなんて俺も相当鈍いな。
この“仲間”を守る為にも、こんな所で迷ってらんねえじゃねえか。
道だって、もう目の前にあるしな。
考え事は其処までにして、作業に戻る。

「サイセイ・・・カンリョウ・・・」

暗闇の中で青い光が輝く。“それ”が放つ言葉に含まれるのは圧倒的な破壊衝動のみ。

「コレ・・ヨリ・・“フンサイ”・・・ヲカイシスル」

全てを破壊しつくす“それ”に合う言葉はただ一つ――――――

――――『粉砕者』

Ｎｅｘｔ　Ｍｉｓｓｉｏｎ＞＞

ｍｉｓｓｉｏｎ２３　長い一日　＜鴉＞（後書き）

作「皆さんお久しぶりでーす。大体一ヶ月ぶりぐらいかな？」

白「間が開き過ぎだ馬鹿作者。どんだけ読者待たせりゃ気が済むんだよ」

作「仕方ないじゃないか、ネタが思いつかないんだもん」

白「ったく。もっと頑張れよな」

作「そうだねえ。それより白君」

白「何だよ？」

作「君って年下趣味ｇ「有る訳ねえだろ」な、何だってー」

白「何だそのわざとらしい驚き方は！つうかこうさせたのはてめえだろ！」

作「面白そうだったから」

白「『面白そうだったから』じゃねえよ！妙な誤解を受けるだろうが！つうか既に受けたは！」

作「まあまあそう怒んなって」

白「この野郎覚えてろよ・・・」

作「おっと。そろそろお時間のようだね。それじゃあ皆さんまた次回会いましょう」

作・白「さようならー」

――――――白の居ない学園で、少年達は何を思うのか？次回は原作組み視点でお送りします。

ｍｉｓｓｉｏｎ２４　長い一日　＜鴉の友＞（前書き）

境界線上のホライゾンの小説始めたんで、そっちの方もよろしくお願いします。
それじゃあ、始まり始まり～～

ｍｉｓｓｉｏｎ２４　長い一日　＜鴉の友＞

ｓｉｄｅ一夏

朝。俺が迎えた一日は何時もと違った。
・・いや。同じ一日を迎えると思うのが間違ってるのか。
俺が今立ってるのは一年生寮の一室――――――白の部屋の前だ。
クラスの女子が昨日食堂で白の部屋が変わった言っていたが、どうやら本当のようだった。

（何て声を・・・掛ければ良いんだろうな）

昨日、四年ぶりに会った幼馴染が武装組織の一員だと知った。
最初は信じられなかった。信じたくなかった。
それは多分、自分が許せなかったからだ。
ＩＳ学園への入学が決まった時、正直俺はふざけんなって思った。
たった一つの偶然の所為で、何で自分の人生を決められなきゃいけないんだって思った。
でもアイツは、白はどうだった？アイツは戦っていた。苦しい事をして来た。
それなのに俺は、苦しい事を避けて、周りにだって迷惑をかけた。
ＩＳの世界大会であるモンドグロッソの第二回大会。その決勝戦の日、俺は誘拐された。正体も分からない“謎の組織”に。
それを聞いた千冬姉は俺を助けに来ようとしたらしい。だが、俺を助けたのは千冬姉ではなかった。
あの時のことはうっすらと覚えている。部屋が大きく揺れ、次の瞬間壁が吹き飛んだ。その向こう側から現れたのは純白の全身装甲を持つＩＳだった。今思い返せば『ホワイト・グリント』にも似ていた気がするが、よく覚えていない。それを見た途端俺は気を失って、

気付いたら病院のベッドの上だったからな。
その謎の人物のおかげで千冬姉は第二回大会に優勝したが、俺は未だに負い目を感じている。危うく姉の快挙を阻んでしまうところだったのだから。

（だからこそ、知りたい。知らなきゃいけないんだ。アイツのことを）

よし、と気合を入れてドアノブに手を掛ける。が、

「あれ？」

開かない。どうやら鍵が掛かっているらしい。仕方なく部屋の主を呼んでみるが応答は無い。

（居ないのか？）

なら何処に行ったんだろう。
・・・考えても仕方ないか。きっと夜には戻ってくるだろうし、その時に話を聞こう。
俺はその場を離れ、教室へと向かった。

「では、ＳＨＲを始める」

教卓の後ろに立った千冬姉がＳＨＲを始める。その内容は今日の主な予定と重要事項だった。
だが、その話に俺は違和感を感じた。そう、白について一切触れていないのだ。
それに気付いた俺は、つい、

「あの、織斑先生」

「何だ？」

「いや、その、白はどうしたんですか？」

千冬姉は俺の言葉に一瞬驚いたようだったが、すぐに元の顔に戻って言った。

「アイツは今日公欠だが、何か問題でもあるか？」

大有りだろ！と思ったのはおそらくは俺だけではないだろう。
だが、俺はそれ以上何も言えず千冬姉は授業を開始した。

（くそっ。何がどうなってんだよ！？）

白が駆る『ホワイト・グリント』はＩＳではなかった。
それはつまり、白が“ＩＳ操縦者”ではないことを示している。このＩＳ学園はＩＳ操縦者の育成機関だ。つまりＩＳ操縦者ではない白には在学資格が無いということになるんじゃないのか？それなのに千冬姉の話を聞く限りでは、白は未だに生徒として扱われているようだ。
・・・駄目だ、分からん。頭が痛くなって来た。つうか白も白だ。少しぐらい事情を話してくれたっていいじゃんかよ。

「ではこれについて・・・そうだな、織斑。答えてみろ」

「は、はい！」

しまった。今は授業中（しかも鬼教官の）だった。しかし、指名されたからには答えなければいけない。

「・・・すみません、聞いてませんでした」

スパーンッ。

今日も朝から出席簿チョップの軽快な音が響き渡った。

「はあ・・」

午前中の授業が終わり、俺達は食堂にて昼食を摂っていた。メンバーは俺とセシリアと鈴だ。箒については何故だか昨日の引越しの時以来避けられている。何故だ？

「溜息なんかついてどうしたのよ？」

右隣の席に座る鈴がラーメンを口に運ぶ手を止めて問いかけてきた。

「いや、さ。俺、午前中だけで四回は千冬姉に叩かれた」

「どうせ孤島のことでも考えてたんでしょ？」

ぐっ。こいつはこういう時やけに鋭いな。

「あのぉ、お二人は孤島さんと幼馴染ですのよね？何か分かることはありませんの？」

そう言ったのは左隣のセシリアだ。

「う～ん・・・。アイツは四年前に突然居なくなったからその間のことは俺も知らないんだよなぁ」

「アタシも孤島とは一年ぐらいの付き合いしかないからよく分かんないのよねえ」

「そうですの・・」

白について分かること・・・。そうだなあ、確かアイツの両親って――――――

「確か、白の親はなんかの研究をしてるって言ってたな。確か特殊エネルギーについてとかなんとか・・・」

「特殊エネルギーの研究者？その方はもしかして、孤島鎧という名前では？」

「ん？確かそうだったな」

父親が鎧さんで、その奥さんが絵馬さんだっけ？

「それがどうしたってのよ、セシリア」

鈴がスープを飲み干して聞く。それについては俺も少し気になった。

「いえ、我が祖国イギリスで、五年前にＩＳの開発に助力してくださった方がいらしたんです。政府関係者に聞いた限りでは他国のＩＳ開発にも携わったとか」

五年前・・・か。そういやその頃、白がだいぶ学校を休んでたけ

ど、そうだったのか。

「これだけの情報じゃなんも分かんねえな。って、時間やばいな。急いで食っちまおう」

そうして、俺達は会話を一旦止め、食事に戻った（鈴は既に終わっていたが）。

放課後、俺は特訓を終えアリーナの更衣室に居た。着替えは既に済まし、今は制服を着ている。広々とした其処は、ついこの間まで二人で使って所為か、やけに広く感じる。
午後はさすがに授業に集中していたが、やはり白のことは気になる。

「本人に聞くのが、一番早いんだけどなあ」

いかんせん、その本人が居ない所為でそうは出来ない。本人が居たとしても聞けるかどうかは怪しいが・・・。

「腹も減ったし、そろそろ食堂に行くか。満腹になれば、何か良いアイデアが浮かぶかもしんないし」

更衣室を出た俺は、途中で特訓に付き合ってくれたセシリアと鈴に合流し、食堂に向かった。
食堂に着いた俺は、妙な違和感を感じた。何時もなら五月蝿いぐらいに騒いでいる筈の女子が、今日はやけに静かなのだ。
だが、その理由はすぐに分かった。
食堂の奥。晴れた日の昼間なら、綺麗な海が見渡せる隠れ絶景スポットとなっている席に座っている者が居た。
白い髪に男子用制服――――白だ。

誰かと通信をしているのか、空中投影モニターに向かって何かを言っている。
俺は自分の食事が出来ているのも無視して友の元へ駆け寄る。
白も此方に気付いたらしい。最後に一言何かを呟いてモニターを閉じる。
白の座る席の前で立ち止まった俺の後ろに、セシリアと鈴が遅れてやって来る。

「よお、一夏」

白が何時もの軽い調子でこちらの名を呼ぶ。それに俺は、

「よおじゃねえだろ！！」

つい怒鳴ってしまった。その声に、セシリアや鈴、それと他の食堂に居る女子が身をすくませる。

「そうかっかしねえで落ち着けよ。女子がビビッてんだろうが。怖い男は嫌われるぞ？」

「お前なあ――――――」

「いいから落ち着けよ、一夏」

白の数トーン下げた声に、俺は口をつぐんだ。

「・・・・わりい」

「おお、それでいいんだ。お前の言いたいことは分かるが、少し落ち着け。いいな？」

白が何時もの声で告げる。俺は振り向いて女子達にごめん、とジェスチャーで伝える。皆は安堵の表情を浮かべると、此方に視線を向けたまま食事に戻る。
俺は白に向き直って口を開く。

「なあ、白」

「何だ？」

「教えてくれ。お前が何なのか、過去に何があったのか。そして――――」

俺は一呼吸置き、再び口を開く。

「お前が何を目指すのかを」

Ｎｅｘｔ　Ｍｉｓｓｉｏｎ＞＞

ｍｉｓｓｉｏｎ２４　長い一日　＜鴉の友＞（後書き）

作「やあ皆さん。お元気ですか？自分はノット元気です」

白「当たり前だ。ありもしない文才で無理して３話分も一気に小説書くからそうなんだよ」

作「だってさあ。アニソンの神曲とか聞いてたら筆が進む。特に坂本真綾の「ｂｕｄｄｙ」とかこの小説にピッタリだね。うん」

白「・・・何故だろう。よく知ってる人物が頭をよぎったんだが」

作「気のせい気のせい。例えよぎったとしても声が似てるだけだって」

白「・・・そうか。（声が似てるって、えー。誰だっけ？誰が頭をよぎったんだ？）」

作「そうそう。（何で身近な人物なのに気付かないんだい？）」

白「てか、今回何するか決まってんの？」

作「・・・・・・・・・・・・」

白「決まってないのかよ！」

作「いや、だってさ。これ書いてんの日が変わる三十分前だし。すごく眠いし」

白「じゃあ次の日にしろよ！」

作「だって、少しでも早く皆に読んで欲しいじゃん！」

白「う・・・それは・・・」

作「だろ？（よっしゃ。上手く言い包めた）」

白「・・・（畜生、言い包められた）」

作「まあまあ。その内白君にも青春させてあげるからさ」

白「どうすりゃそうなんだよ！てか、俺は女にも青春にも興味ねえ！」

作「そうかいそうかい。と、そろそろ時間だ（睡眠の）」

白「そんじゃあ皆さん」

作・白「さようならー」

――――次回、白がいよいよ過去を話す！？一体彼の過去には一体何が？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5031t/

IS<インフィニット・ストラトス> ～舞い降りた白き鴉～

2011年11月28日06時55分発行